

# 聡明鬼

3

葵むらさき

## CHARACTERS

---

### リューシュン

死んだ人間の鬼魂を体の中に取り込み、上天へ上げてやるという能力を持つ鬼。  
元は上天にいたが玉帝の怒りに触れ、墜とされて鬼となった。

### リンケイ

若き陰陽師。  
玉帝より、リューシュンに力を貸してやって欲しいと頼まれる。  
人間よりも妖怪や鬼に興味を持つ。

### 閻羅王

生死簿を管理し、人間の住む陽世と鬼の棲む陰曹地府を統べる存在。  
リューシュンの正体は神だと断言する。

### スルグーン

奇妙な出で立ちをしている雷獣。  
かつて上天にてリューシュンと共に居たのではないかと考えられている。

### スルグーン

陰曹地府にて閻羅王の元に仕える鬼差。  
夢の話を用いて閻羅王に聡明鬼の謀反を報せる。

### テンニ

元降妖師。  
処刑され鬼となり、陰曹地府へ来る。

### ケイキョ

鼬の精霊。  
精霊王の資質を持っていることをリョーマに告げられる。

### リョーマ

リンケイに仕える龍馬。  
普段は仔犬の姿をしている。

### キオウ

地獄で生まれた模糊鬼。

閻羅王を斃す事を目論んでいたが、人間のスンキに出逢い心を改める。

スンキ

リューシュンの邸で使用人たちをまとめる役割をしていた女。  
キオウに囚われるが、後にその妻となる。

フラ

キオウに仕える龍馬。  
普段は毛並美しい黒犬の姿をしている。

コントク

年配の土地爺。人間に親しく、陽世について学ぶことを厭わぬ勤勉な鬼。

ジライ

降妖師。悪鬼を退治することを生業とする。 コントクと義兄弟の仲。

リシ

黒衣を纏い、龍馬を従える女。  
鬼に対し侮蔑的な態度を見せる。

トハキ

リシに仕える黒龍馬。

マトウ

リシが仕える陰陽師。

—うん？

ケイキヨは、恐らく独り、それに気づいていた。

元降妖師テンニが、すい、と背を向け森羅殿から出て行くところをだ。

—閻羅王に、用があったんじゃねえんでやすかい？

気づかれぬように、そっとその背を眼で追う。

—まあ……今は、テンニの話どころじゃあないでやしようけどね。

それからケイキヨは少し考え、それから自分もそっと席を離れた。

狙い通り、自分の挙動もまた今のこの場では誰にも気にも止められなかった。

森羅殿を出て少し歩いた後、ケイキヨは鼬の姿に戻った。

万一見つかったとしても、元の姿の方が逃げ足が速い。

天心地胆の在り処を眼に留め気に留めしながら、ケイキヨはテンニの後をつけた。

テンニは、キオウの棲家に乗り込んだ。

ケイキヨは冷や汗を掻いたが、そこには誰も—キオウも、その妻のスンキもいなかった。

—陽世の、陰陽師さんの所へ行っただんでやしようね。

鼬はそう推測した。

そしてテンニも、天心地胆から陰陽界へと出て行ったのだ。

――これ、は。

ケイキヨは、聡明鬼ならば大丈夫だと自らに言い聞かせ、大急ぎで陰陽師の元へ戻ることにした。

ぎああああ

風の音の中を、鼬はすべるように駆けた。  
天心地胆に、そのまま勢いよく飛び込む。

「ケイキヨ」最初にリョーマが、元気よく呼んだ。「さま」仔犬の姿のままだ。

「陰陽師さんはいやすか」鼬はすぐに訊ねた。「ここに、あの降妖師のテンニってえ奴が来やせんでしたか」

「テンニ？ いや、来ていないが」背後から声がし、振り向くと陰陽師が立っている。

「そうでやすか」

「テンニは、捕われて……処刑されたか」陰陽師は訊く。

「へい」鼬は頷く。「森羅殿にやって来やしたが、また天心地胆を抜けて行ったんで、ここに戻って来る気だとばかり」

「ふむ」リンケイは親指で唇をなぞりながら、辺りに眼を遣った。「あ奴がここに来る目的としては……」鼬を見る。「打鬼棒だな」

「あ」ケイキヨは鼬の首を伸ばした。「そうか……それを持って、陰曹地府に戻る気でやすね」

「沼だといったな」リンケイは歩き出し、すぐに走り出した。「行こう。ケイキョとフラも来てくれ。リョーマ」

「はい」仔犬は叫びながらリンケイの足許に素早く追いついた。

「ジライとコントクを連れて来てくれ」

リンケイが走りながら二指に息を吹くと、仔犬はたちまち空に飛び上がり巨大な龍馬の姿に戻った。

沼は、静かだった。

水面には木々から落ちた枯葉が浮かび、ゆるやかな風に吹かれて微かに揺れている。

リンケイは水辺に佇んでしばらく様子を見た。

息を整えつつ、腰の鞘から斬妖剣を抜く。

斬妖剣で、鬼は封じられない。

だが打鬼棒で、自分を封じることもしない。

ふう、と息を吐きながら眸を左右に動かす。

妖魔のそれほど鮮明に感ずることはないが、鬼の持つどす黒い“気”が、水面からこちらを伺っている。

確かにテンニはいるはずだ。

斬妖剣を、正眼に構える。

「けど」ケイキョが、沼の水に用心深く鼻先を近づけて疑問を口にした。「テンニも今となっちゃあ、鬼でやしよう。打鬼棒に触っちゃったら、奴自身が血になって流れちまうんじゃないんでやすか」

「ああ」リンケイはぐっと腰を沈めた。「だが、そこをどうにかする手法を思いついたからこそ

、取りに戻ったのだろうよ」

音が止む。

さ、と風が鳴る。

ゆら、と木の葉が揺れる。

右に、左に、また右に――

ざん

水が割れ、次の瞬間テンニがリンケイの眼前に居た。

ぎん

斬妖剣が、襲い来たる刃を阻み軋む。

リンケイは、その刃を見た。

それは打鬼棒ではなく、生前のテンニが手にしていた今ひとつの得物、鎖のついた刀であった

。

聡明鬼により蹴折られたはずの刃は元通り柄からすらりと伸びている。

打鬼棒と違い普遍的な武器であるから、別に調達したものかも知れない。

――そうか。

瞬時に悟る。

直接打鬼棒を手にしたのでは自らが血となって流れてしまうが、この刀の鎖で巻いた上で操れば、問題なく打鬼棒を繰れるのだ。

次の瞬間、その鎖が打鬼棒をからめ込んでリンケイめがけ右手から飛んできた。

「く」

リンケイは肩を左に開き、右肩の骨を犠牲にして打鬼棒を受ける覚悟を決めた。

だがそれはリンケイに届かず、寸前でフラの牙によって弾き飛ばされたのだ。

「フラ」呼ぶ。

「あんたに加勢する義理は、ないんだけどな」紅き焰を吐く龍馬はぶつくさ言いながらも、巨大な尻尾でテンニの身体を打とうと風を切った。

だがテンニはすんでのところでリンケイを圧していた刀を引き、跳び退った。

「キオウ様が、もうすぐここに来る」フラはテンニの動向を睨みながら言った。「それまでにこいつを、始末しておきたい」

「キオウが？」リンケイは訊き返した。

「ああ。スンキって人も、一緒に」

「スンキも……そうか」リンケイは、何か重要な情報が得られることを期待し眸を輝かせた――とはいえ先刻の、玉帝からもたらされた情報に勝るものであるかどうかはわからないが。「ではお前の言う通り、早いところこの者を始末してしまおう」

「抜かせ」テンニが叫び鎖を放つ。



リンケイは瞬時に横跳びに避けた。

背後から戻りざま打鬼棒が刺さらんとする。

斬妖剣がそれを打ち落とす。

だが得物は水面に落ちるかと思われた刹那、再び鎖によって引き戻されテンニの手に握られた

。

ごう

フラが、水面の上をなぞるように焰を吐く。

テンニは跳んだが、焰の延びる方が速く、鬼の衣ごと燃え上がった。

「うが」

テンニは熱さに悲鳴を挙げたがすぐに水中に沈んだ。

リンケイはざぶざぶと水の中に入り込んだ。

きな臭い匂いが辺りに立ち込める。

水面は少しずつ波を抑えてゆき、やがて呑み込んだものごとなど忘れたかのように静寂さを取り戻した。

リンケイは水面同様動きを制したまま、変化の兆しを待った。

だが、動きはまるで見えてこない。

「ーケイキヨ」やがてリンケイは、剣を構えたまま唇だけを動かし鼯を呼んだ。

「へ、へい」草葉の陰に隠れていた精霊はそろりと首を覗かせた。

「よもやと思うが」陰陽師は低く訊いた。「水中にも、天心地胆というのは存在するのか」

「あ」鼬はがさ、と陰から出てきた。「へ……へい」

「そうか」リンケイは剣を下げ、沈めていた身を起こした。「逃げられたか」

「す、すいやせん」ケイキョは水辺に来てうな垂れた。「うっかり、忘れていやした」

「まあいいさ」リンケイは剣を鞘に収めた。「奴が人だった時と鬼となった今との合わせて二度、この斬妖剣で斬ることになるのかと、なかば面白く思っはいたがな」

「――」鼬は言葉もなく陰陽師を眩しげな眼で見上げた。

「ここにいたのか」

声がし、振り向くと模糊鬼とその妻とが並び立っていた。

「キオウ。スンキ」リンケイは呼び、微笑んだ。「来たな。フラの言った通りだ」

「フラが？」キオウが訊く。

「御主人さま」フラはいつの間にか黒犬の姿になっており、主人の足許に伏せた。「お待ちしていました」

「そうか。気配を感じていたか」キオウはしゃがんでフラの頭を撫でた。

「何か、面白い話を持ってきてくれたのだな」陰陽師は笑顔で実のところ楽しそうに訊いた。

「ああ」キオウは少しだけ苦笑した。「面白いと思ってもらえるか、だが……聡明鬼は、元は龍の神だったのではないかと思う」

「龍の神？」リンケイの笑顔が、真面目な顔に変わる。「聡明鬼が……上天にいた頃か？」

「知っているのか」今度はキオウの方が真面目な顔に変わる。「そう、伝説のナーガだったのではないかと思うんだ。スルグーンが鳥の神、ガルダで」

「スルグーンが」リンケイは眸を横に向け、何かを思い出している様子を見せた。「なるほど...  
...その二者がかつて、敵対していたというわけだな」

「ああ」キオウは頷く。「だがガルダが謀反を起こし、ナーガをけしかけ上天を焰で焼かせた」

「青龍塔を」

「そこまで知っているのか」キオウはまた笑った。「俺がわざわざ来る必要もなかったな」

「そんなことはない」リンケイは首を振った。「あいつが龍神ナーガだった、とは.....さすがの俺にも、考えが及ばなかったよ」

「ただ伝説を当てはめただけだ」キオウは肩をすくめた。「しかし聡明鬼は、そんな素振りも見せたことはない.....焰を吐いたこともないしな。恐らく、自分が龍神だったなどまるで知らないんだろう」

「ああ」リンケイは深く頷いた。「あいつは、三年前より昔の記憶を持っていない」

「なんですって」スンキが驚愕の声を挙げた。「三年、前.....ということは、土地爺になる、前の」

「そう」陰陽師は鬼の妻に向かって頷いた。「土地爺になる前の記憶を、あいつは持っていない」

「ではいよいよ、それ以前は上天でナーガと呼ばれていたという話にも、真実味が出てくるな」

「うん」リンケイは頷きながら、何か思索めいた光をその眼に宿していた。

「その聡明鬼さんでやすが」ケイキョが大地の近くから声をかける。「大丈夫でやしょうか。テンニが打鬼棒を持って陰曹地府へ行っちまいやしたが」

「なんだって」キオウが驚く。「打鬼棒を.....けど、どうやって」

「鎖に巻いてな」リンケイが説明する。「だが聡明鬼ならば問題ないだろう。一度打鬼棒を見ているしな。閻羅王も、打鬼棒についての知識は流石に持ち合わせているだろう。今いちばん危ないのは」沼を見遣る。「スルグーンだ」

沼は水面に光を散らし煌いていたが、その底は暗く、何が存在するのかまるで見えなかった。

体が、軽い。

どこまでも走ってゆけそうだ。

人として死に、鬼となった今、不思議なほどに体が動かしやすい。

――ムイの中毒が、治ったからか。

走りながらそう考え、テンニは走りながらげらげらと笑った。

――そうか、これが最良の治療法だったのだ。

ざああああ

風が鳴る。

陰陽界を、陰曹地府に向かって走りながらテンニは笑い続けた。

もう、ムイなど必要とせずともよいのだ。

自分は、ムイの呪縛から解き放たれたのだ。

――儂は、鬼の方が向いていたということだな、人よりも。

そう思い、またげらげらと笑う。

手には鎖のついた刀を持ち、その鎖は打鬼棒にぎちりと巻きついている。

その鎖を放つことで、鬼を打鬼棒にて打つ。

その手練り方を、先刻あの陰陽師で試そうとしたのだが、龍馬の牙に阻まれてしまったのだ。だが、別に構わぬとテンニは思っていた。

――地獄へ行けば、試しに使える鬼どもがわんさか居るのだからな。

くくくく、と走りながら笑いがこぼれ続ける。

――そう、そして最後には。

脳裡に、焰のごとく紅き二つの眼が浮かぶ。

閻羅王。

地獄を統べる、王。

――奴を、なきものとする。

テンニは笑いをぴたりと止め、真っ直ぐに前を睨んで走った。

目指すところは、森羅殿だ。



「スルグーン」二足の鬼と鼯は揃って繰り返した。

「ど、どうしてスルグーンが」ケイキョが訊く。

「テンニが打鬼棒を取りに戻ったのは恐らく、それを使って陰曹地府を己の配下に置くためだ」リンケイは答えた。

「馬鹿なことを」キオウが顔を歪める。

「お前が言うのか」リンケイは面白そうに眉を持ち上げ目を細める。

「それは――」キオウは流石に言葉を詰まらせ俯いたが、すぐに顔を上げる。「だが俺には策があった、それにそのための組織も作るつもりだった」

「そうだな」リンケイは頷く。「それに比べてあの降妖師は、ひとり打鬼棒の力のみで閻羅王を斃せると思い込んでいる」

「無理でやしょう」鼬も首を振った。「それに閻羅王に、打鬼棒が効くんでやすかい」

「わからないな」陰陽師は首を捻り、模糊鬼も首を振った。

「キオウさんは、閻羅王をどうやって斃すおつもりだったんでやすか」鼬はまた訊く。

「俺は、直接には聡明鬼にそれをさせようと考えていた」

「うん」陰陽師は頷き、

「まあ」模糊鬼の妻は口を抑え、

「へえ」鼬は尻尾をくるりと巻いた。

「その周り、つまり牛頭馬頭はじめ鬼差や鬼卒、妖鬼などを、テンニを頭として山賊どもに薙ぎ払わせようと思っていた」

「そんな」スンキが眉をひそめた。「ご主人様に、そんなひどい事をさせるなんて」

「今はもう考えてなんかいない」キオウは口をすぼめてぼそぼそと弁明した。「過去のことだ」

「しかし」リンケイは考え込むように眉間に手を当てたが、それは笑いを隠す為だと鼬には明らかに判った。「テンニの方は、打鬼棒と己の体一つだけで陰曹地府すべてを叩き壊そうとしている。そんなテンニに対し、閻羅王を除き最も敵愾心を抱く者は誰か」

「敵愾心？」ケイキョが訊く。

「閻羅王を、除き――？」キオウが訊く。

「そう。そいつはきっと、自分こそが地獄の覇者たらんと目論んでいた者だ」

「自分こそが」ケイキョが繰り返す。

「地獄の、覇者——つまり、自分こそが閻羅王を、斃すのだ、と」

「無論キオウ、お前をも除いた上でだ」リンケイは微笑んだ。「今はもう、考えてなんかいないのだからな」

「そんなことわかっている」キオウはむっつりと答え、ちらりと横目で妻を見た。

——まったく意地悪でやすねえ。

鼬はそっと肩をすくめた。

「つまりそれが、あいつだというんだな」模糊鬼は振り払うように顔を上げた。

ケイキョもここに至って、その者が誰なのかに合点が行った。

スンキも、あ、と気づいたようだった。

リンケイは黙って微笑んでいる。

「スルグーン」二足の鬼と鼬は揃って口にした。



森羅殿に着いた。

手に持つ刀を今一度握り締め、その鎖の中にある打鬼棒を今一度見下ろし確かめる。

今の自分に、怖れるものなどない。

今一度、その想いを胸に描く。



殿内からは、鬼どもが三々五々出て来るところだった。

閻羅王と聡明鬼、そしてスルグーンの先程の言い争いがどのようなになったのか、すぐには判らない。

――聡明鬼が神だの、スルグーンが神だのいう、御伽噺のような話だったがな。

テンニは思い出して、また喉を鳴らし笑った。

笑いながら歩く。

鬼差たちが、振り向く。

すぐにその男の持つ武器に皆気づく。

「あ」

「あれ、は」

「うわっ」

声が挙がり、すぐにそれは

「打鬼棒だ」

「この男、打鬼棒を持っているぞ」

「うわああ」

叫び声となる。

「逃げろ」

鬼どもはたちまち恐慌を起し散り散りに走り出した。

テンニは歩きながら、不意に刀を振った。

鎖が鋭く伸び、打鬼棒が背を向けて走る一足の鬼差を打った。

その鬼差はたちまち血となって流れ、消えた。

「ひ」

「わあああ」

「助けて」

鬼どもはいよいよ悲鳴を挙げ互いにぶつかり合い尻餅を突きながら逃げ惑った。

テンニは歩を進めながら幾度か刀を振り、幾足かの鬼を消した。

鎖は長く、ここまで逃げれば大丈夫だろうと油断して足を緩め振り向きかけた鬼どもを狙い定めて打ち、消した。

森羅殿の入り口に立つ。

殿内にいるのはまだ辞しておらぬ鬼差どもだけのようだった。

閻羅王はすでに退室しており、聡明鬼の姿も見えなかった。

だが奥の方に、スルグーンの姿は認められた。

「聞け」テンニは叫んだ。

全員が、叫んだテンニの方を振り向いた。

スルグーンもだ。

「儂はテンニ、降妖師じゃ」テンニは、まるで生きていた時のように自分の名を名乗った。「貴

様ら、血となって流りたいか」刀を高く差し上げる。「この打鬼棒に打たれて」

しん、と静まり返る。

「疑うか、これが打鬼棒であるわけがないとでも」テンニはそう言ったかと思うと目にも止まらぬ速さで刀を振った。

たちまち殿内にいた一足の鬼が消える。

ひゅう

ひゅう

刀が風を切る音だけが幾度か続き、そのたび殿内のあちこちで鬼差が、声を挙げる暇もなく血となって流れた。

「うわあ」鬼差の一足が声を挙げ、

「わあああ」別の一足が叫び声を挙げ、

「やめろ」

「助けてくれえ」

「逃げろおお」

幾足もの鬼どもが悲鳴の渦を巻き起こした。

リューシユンはその悲鳴の渦を、森羅殿の別の部屋にて聞き取った。

彼は、いつの間にかいなくなっていたケイキヨを探していたのだ。

だがその悲鳴から、さっきまでいた部屋の中でただごとならぬ事態の起きていることを察し、ただちに踵を返した。

入り口からは、慌てふためく鬼差どもが我先にと逃げ惑い溢れ出てくる。  
それらとぶつかりながら、どうにか入り口に立つ。

「聡明鬼」 鬼の一足が叫ぶ。

「助けてくれ」

「聡明鬼」

次々に、必死で助けを求める叫び声が挙がる。

部屋の中ほどに立っていたテンニが、振り向く。

その手に持つ得物を、リュージュンは見た。

――刀……打鬼棒！

眼をかつと見開き、跳ぶ。

リュージュンの立っていた所の床を、打鬼棒が打つ。

「なるほどな」床に降り立ったリュージュンはテンニを見据えたまま頷いた。「道理で鬼どもがぎゃあすか喚きたてるわけだ」

「まるで他人事だな」テンニは眼を細めせせら笑った。「さも自分は鬼ではないとでも言いたいかなのように」

「俺は鬼さ」リュージュンはテンニを睨みつけた。「その証拠に、その打鬼棒が怖い」テンニの手元を指差す。

「だが本当かどうかわからんな」テンニは眸を光らせた。「何しろお前は、神なんだそうだからなあ」くっくっ、と喉の奥で笑う。

リューシュンは身構えた。  
また、放つ気だ。

「やめろ」怒鳴る声がした。

テンニの、動きかけた手がぴたりと止まる。  
リューシュンも声の方、テンニの肩越しに見えるその声の主の姿を見た。

スルグーンだ。

「一体、何のつもりだ貴様」鬼差のスルグーンは怒りの形相でテンニの背後から叱責した。「恐れ多くもここ森羅殿内で、好き勝手なことは許されんぞ」

「へえ、そうか」テンニはだらりと手を下げ、リューシュンに背を向けて振り向いた。

「スルグーン」リューシュンは思わず叫んだ。「逃げろ。こいつの武器は打鬼棒だ。お前でも敵わん」

「そんなことが問題なのではない」スルグーンは構わなかった。「俺はここ森羅殿の差官だ。規律を乱す者は取り締まらねばならん」

スルグーンは言ったかと思うと、真っ直ぐテンニに向かって歩き出した。

「ば」リューシュンは思わず馬鹿、と叫びそうになりながら、床を蹴って跳んだ。

「丁度いい」テンニはにやりと笑って体を横に引き、リューシュンの蹴りをかわした。「お前ら“神”どもに、打鬼棒が効くのかどうかを試してやる」

「テンニ」リューシュンは再び跳んだ。「やめろ」

降妖師は、ぶん、と刀を横薙ぎに振った。

リューシユンは前に出ようとしていた体を咄嗟に止め、切先を髪の一毛一本のところで届かせなかった。

そうしながら聡明鬼の眼は同時に、鎖の伸びる先を追うことを忘れなかった。

「スルグーン」呼びながら、鬼差が自分と同じように身を引きテニの得物から逃げてくれることを祈った。

鬼差はしかし、自分が抑えるべき相手から目をそらしもせず、次の一步をまさに踏み出そうとするところだったのだ。

鎖は鬼差の背後から回り込み、その頭上から恐るべき打鬼棒が、くるりと回転しながら落ちた。

「スルグーン！」リューシユンが叫ぶ。

だが、打鬼棒に打たれたスルグーンにはもはやその声は届かなかった。  
彼は血となって流れたのだ。

「スルグーン！」それでもリューシユンは再び叫んだ。

友、という意識はいまだ蘇っていない。  
その鬼差とはやはり今日初めて出会ったとしか、思えない。

だが頭では一心でなく理性として、この鬼差ともっと話をすれば、もしかしたら昔の記憶が断片なりとも、取り戻せるのではないか――そんな事を考えなくもなかったのだ。

それを、自分の“心”が望んでいるのかどうか、はっきりとは知れなかった。  
しかし飽くまで理屈として、そのような流れとなるのかも知れない、と考えていた。

「ほう」テンニは鎖を手元に戻して満足そうに頷いた。「消えたな。神も」

「きさま」リューシュンは、噛み締めた自分の牙がぎり、と音を立てるのを、鬼の耳で聞いた。



頭のとっぺんに、雷が落ちたように思った。

目がくらんだが、幾度か瞬きするとまた視界が戻った。  
景色は相変わらず海と空の二つだ。

周りの鳥たちも、相変わらず自分を恐れるように、あるいは崇めるように、距離を置いて飛び従ってくる。

海を見下ろす。  
穏やかに、波打っている。

だがそこに、それははっきりと見えた。  
ぽっかりと、それは海の水面に存在していた。

――行かなければ。

スルグーンは、強く思った。

どこへ？

自分の中の、誰かが問う。

どこだ――

すぐに答えが出てこない。

しかし想いは強く、焔のように熱かった。

行かなければ！

陰曹地府へ！

それが突如、明確になる。

陰曹地府――何故？

自分の中の誰かが、また問う。

何故だ――

今度は、答えがまったく見えなかった。

しかしスルグーンは、それ以上迷わなかった。

彼は予告もなく、翼をたたみ海面に向け落ちていった。

「ガルダ様？」

「ガルダ様！」

鳥たちが驚いて叫ぶ。

スルグーンは、返事をしなかった。

天心地胆は、今もはっきりと見えていた。

波打つ海の水の中に不気味に漂う、黒き淵――まるで鬼魂を連れに来る、地獄の差官の虚ろな眼のようだ。

スルグーンはその中に、怖れもなくまっすぐ飛び込んだ。



ざああああ

風が音をする。

スルグーンはそれに逆らって飛んだ。

だが、さっきまで飛んでいた空のように心地よく飛ぶことはできなかった。

ざああああ

この風は、まるで自分を異物として排除しようともしているかのようだ。

全身を――眼も嘴も翼も脚も、すべてを真正面から叩き落そうとしてくる、そんな気がする。

まるで自分に喧嘩をふっかけてきているようだ。

――なんて気分の悪い所だチイ。

スルグーンは顔をしかめながら飛んだ。

ほどなく、不気味で巨大な森羅殿が見えてきた。

とはいえスルグーンには、そこが地獄の王の住まう所であるとは知る由もなかった。

ただ、建物が見えたので少し安心したのは間違いないことだった。

入り口付近に降り立とうとして、スルグーンはその異様な光景に再び顔をしかめた。

森羅殿の外側あちこちに、血の跡がこびりついているのだ。

まるで、そこで戦があったのかと思うような、陰惨な有様だった。

だが傷ついた者、倒れた者、痛みに呻いたり泣き叫んだりする者は、誰一人としてそこにはいない。

ただ、血の跡だけが筋となって残されているのだ。

「なんだこれはチイ？」

用心深く地に降り立ちながら、雷獣は呟いた。

森羅殿の中に足を踏み入れる。

建物の奥から、何か悲鳴のような声が聞えてくる。

スルグーンの脳裡に、外で見た血の跡と同じものが今この建物の中にもつけられている、その様が浮かんだ。

――いったい、何事が起きているんだキイ？

陰曹地府というのは確かに地獄だが、しかし真の意味での地獄ではないはずだ。

スルグーンもそのことは知っていた。

ここは、死んで鬼となった者たちがさ迷い、ある者は再び人間として生まれ変わり、またある者は二度と戻れぬ十八層地獄――そこそが真の地獄だ――へと堕ち、その裁きをするのが閻羅王なのだ。

そういった、いわば命の生と死の管理を行う場所であるはずの陰曹地府で今、地獄絵図のようなことが起きているというのか。

だが不思議なことにスルグーンには、恐怖というものが一切感じられなかった。

どんな恐ろしいことが起きていようとも――どんな恐ろしい敵がそこにいようとも、自分までもがその敵の毒牙にかかるかも知れぬというような不安など微塵も持つことがなかったのだ。

それは、考えてみると我ながら不思議なことではあった。

ただ、大丈夫だ、という想いだけがあった。

「スルグーン！」

その声が聞えたのは、その時だった。  
雷獣ははっとして目を見開いた。

その声を、知っていた。

「あ、――」

呼び返そうとした。  
だがスルグーンは、その声の主の名を知らなかった。

否、今たしかに、喉の下までその名は浮かんできたのだ。  
だがそれは、消えた。  
消された、のかも知れない。

「スルグーン！」

声は、また聞えた。



打鬼棒は、右手の方から襲いかかってきた。

リュージュンは跳び、空中で体を縦に回して踵でテンニの頭を砕こうとした。

テンニは刃を上に向け鬼の足をざくりと切り落とそうとした。

リュージュンはさらに上体を縦に振りその蓬髪を刃にからませぎちりと巻きつけた。

降妖師は得物を奪われぬよう握る手に力を込め、鬼の髪の引っ張るのに必死で抗った。鬼の髪は刃に斬られることもなく力を拮抗させ、あたかも針金のごとくに見えた。

鬼の爪が、鎖を掴んだかと思うとぐるぐると腕にそれを巻き取り始める。

「馬鹿な鬼よの」テンニは唇の端ににやりと悪辣な笑いを浮かべ、刀から不意に手を離すと鎖を直に手で持ち、力任せに鬼めがけ先端の打鬼棒を振るった。

手を離されたことにより仰のいて後ろに倒れそうになるリュージュンの視界の隅に、今度は左手の方から飛んでくる打鬼棒が映る。

— 体を、立て直せ。

瞬時に自分に言い聞かせる。

腹から胸、首へと力を伝え、飛んでくる打鬼棒を背の後ろにやり過ごすことを強く意識する。

— 間に合わんか。

だが打鬼棒の描く軌跡は、その先端がリュージュンの背にかろうじて当ることを予測させるものだったのだ。

— くそっ。

鬼は牙を噛み締めた。

強く眼を閉じる。

がちっ

耳を劈くような音が響き、眼を開けたリュージュンはその様に驚いた。

スルグーンが、いた。

洞窟で出会った、奇妙な姿の方のスルグーンだ。

そのスルグーンが打鬼棒を嘴で噛み、ぼっさと翼を一度はためかせてすっと地に降り立ったのだ。

「スル、グーンー」リュージュンは、茫然とその名を呼んだ。

「何を驚いてるチイ」スルグーンは棒を銜えたまま言った。「お前がおれを、呼んだんだろウキイ」

「え？」リュージュンはぽかんとした。

「お前の呼ぶ声がしたから来たチイ」スルグーンはむっつりと言ったが、それは半分嘘だった。実際には、ここに来てからリュージュンの声を聞いたのだ。そもそも何故ここに来なければならなかったのかは、自分でもわからなかった。

「俺は、お前ではなく、もう一人のスルグーンを呼んだのだ」リュージュンは説明した。

「なんだそれチイ？」スルグーンは猫の顔をしかめた。「わけのわからないことを言う鬼だキイ」

「とにかく、今は」リュージュンはスルグーンの頭越しにテンニを見た。「あいつをどうにかしよう」

テンニは鎖を持ち体を開いて構えていたが、その腕にかなりの力が込められているのが離れていても見て取れた。

ということは今、この奇獣スルグーンの嘴がかなりの力で打鬼棒を引いているということだ。

しかしスルグーンの様子からはとてもそんな風には見えなかった。

「お前、打鬼棒に触れても消えないのか」リューシユンは不思議の感に全身を包まれながら訊いた。

「ダキボウ？」スルグーンは首を傾げた。「なんだそれチイ？」再びそう問う。

「今お前が銜えてる、その棒だ」リューシユンは指差した。「けど確かに、お前の方は鬼ではないからな。消えるはずはない」自分に言い聞かせるように呟く。

「何をぶつぶつ言ってるんだキイ？」スルグーンは苛立ったように言い、ついに打鬼棒を嘴から離した。

テンニが尻餅を突き、打鬼棒ががらんと地に落ちた。

「あっ」リューシユンは驚いた。「何で離すんだ」

「何でって、何でだチイ」

「あれは恐るべき武器なんだぞ。俺はあれに触れると血となって消えてしまうんだ」

「はははは」スルグーンは嘴を大きく開けて笑った。「嘘つけキイ」

「いや、本当だ」リューシユンは、テンニが大急ぎで手繰り寄せ、どんどん遠ざかっていく棒をまた指差した。「もう一度あれを銜えろ」

「嫌だチイ。面倒くさいキイ」スルグーンはそっぽを向いた。

「貴様、何者じゃ」やっと得物を取り戻したテンニが、憎々しげに叫ぶ。「この化け物が」

「ー」スルグーンは猫の目を細めて降妖師を見た。「誰に向かって言ってるチイ」

「貴様じゃ、阿呆」テンニは、人の上腕ほどの小さな生き物を指差した。「この化け物が」

「おれはガルダ」スルグーンは怒鳴った。「鳥の神だチイ。口のきき方に気をつけろキイ」

リューシユンは言葉を失った。

――ガルダ。

それこそがガルダ、鳥の神の姿

閻羅王が言った、神の名だ。

そして今、このスルグーン自身もまたそう名乗った。

自分が鳥の神ガルダだと、こいつは知っているのだ。

そうだとすると――

そしてナーガ、龍の神、それがお前じゃ

自分も、それを認めるべきなのか――

記憶があるもないも関係なく、自分はそうだったのだ、そうなのだと、知るべきなのか。

「陰陽師」リューシユンは無意識のうちに眩いていた。「俺はどうすればいい」

そうだな。

涼やかな目元が、今にも笑い出したいのを隠しながら答えるのが見える。

牛頭馬頭に化けるもよし。

そして何故か、そんな答えを返してくる。

「なんでだよ」リューシユンは独り、苦笑した。

「何をぶつぶつ言ってるんだチイ」スルグーンが猫の目をまた細めて、今度はリューシユンに向ける。「気味の悪い鬼だキイ」

「はは」リューシユンはますます苦笑した。

――そうだな。何であろうとも、俺は俺だ。

それを、嫌だと思ったことはないのだろう。

いつぞや、陰陽師はリューシユンにそう言った。

あれが、ただあれだけが、結局は答えなのだ。

自分が鬼であれ神であれ、牛頭馬頭であれ、それはあるべき姿であり、絶やさざるべき道なのだ。



「儂は地獄の王となる」テンニがまたしても刀を取り身構えながら宣告した。「閻羅王に代わってな」

「地獄の、王？」リューシュンも再び周囲に警戒しながら訊き返した。「お前が？」

「さすればお前らも儂の統治の下で働くことになる。これからは儂に、人間どもからせしめた金銀を差し出すのだ」

「誰がお前になどくれるか」リューシュンは鼻で笑った。「まあ、閻羅王にもくれてやったことはないが」

「なるほどな」テンニはにやりと笑った。「話には聞いておったが聡明鬼、貴様は実に、閻羅王にまったくかきずくことなく好き勝手に土地を統べていたのだな」

「好き勝手ってなんだ」リューシュンは怒った。「俺は好き勝手になんかやってないぞ。いつも人間たちが幸福であるように考えてやっていたし、今だってそうだ」

「ほざけ」テンニはせせら笑った。「人間の誰が、お前のような鬼の言葉を信用するものか。思い上がるのもいい加減にしろ」

「なんだと」リューシュンはつい、打鬼棒のことを忘れテンニに向かって駆け出すところだった。

「来い、鬼神が」テンニは刀を横に倒した。「貴様もここで消してやるわ」

リューシュンがはっと立ち止まると同時に、傍を黒い影が素早く追い抜いてゆき、次にはテンニの

「ぐわーッ」

という壮絶な悲鳴が聞えた。

一瞬でそこに移動したのかと思わせるほどの疾さで、スルグーンがテンニの顔面にぶつかっていたのだ。

鳥の神が離れると、テンニの片目は潰されていた。

鬼の眼から血は流れないが、もはや鬼の眼はそこからもぎ取られていたのだ。

だが降妖師は苦痛に襲われながらも刀を振り、それはスルグーンの右足を深く斬りつけた。

キイイイ

スルグーンは鋭い悲鳴を挙げ弧を描いて後ろに飛び下がり、広げたリュージュンの腕の中に背から落ちた。

「スルグーン！」リュージュンは叫んだ。

「やられた、チイ」鳥の神は苦しげに呻いた。

このスルグーンには、リュージュンの呼びかけが聞えるのだ。

――こいつだけは、死なせるわけにいかない。

リュージュンは咄嗟に強く思い、走り出した。

部屋を出、森羅殿の出口に向かう。

「閻羅王」走りながら、叫ぶ。「気をつけろ、閻羅王。打鬼棒を持った男が入り込んでいるぞ」

妙な話だ、と叫びながら思う。

自分が閻羅王に、敵がいるから気をつけろ、など、妙にもほどがある。

何しろ自分と閻羅王でさえそもそもは、敵であるのにだ。

――しかし。

腕にスルグーンの小さな体を乗せ、天心地胆に向かって走り続けながらさらに思う。

――テンニ、でもなかった。

閻羅王に、力を貸す者。

最初は、それがスルグーンなのかも知れないと思っていた。

だがスルグーン、鬼差のスルグーンはテンニの打鬼棒によりあっけなく消されてしまった。

そのテンニにしても、閻羅王に力を貸すどころか逆に閻羅王を手にかけてようなどと企む、いわば逆賊でしかなかったのだ。

――いったい、誰なんだ？

謎はまた振り出しに戻った。

リュージュンは一刻も早く、陰陽師にこのことを知らせなければならないと思った。

天心地胆が見える。

この腕の中で血だらけになり苦しげに顔を歪めているスルグーンも、きっと陰陽師ならば治癒させられるはずだと信じていた。

鬼である自分をさえ、治癒できたのだから。

ざああああ

風の音がまとわりつく。

いつにも増してその風は強く当たってくるような気がした。

だが今は構ってなどいられない。

それを背に残し、リューションは、黒き淵に飛び込んだ。

「閻羅王さま」牛頭が牛の顔を真っ青にして叫んだ。「鬼差どもが、こちらへ向かって来ます」

「向かって来る？」閻羅王は生死簿から眼を上げた。「何ぞ儂に用向きでもあるのか」

「い、いえ」馬頭も馬の顔を青くしている。「閻羅王さまを捕えよ、との声が拳がっております」

「――儂を？」閻羅王は眉根を寄せた。「鬼差どもがか？ 鬼差どもが儂を捕えると申すか」

「は」

「はい」牛頭と馬頭は牛と馬の頭を下げ答えた。

「彼奴らは何をとち狂うておるのか」閻羅王は訊ねた。「儂を怖れることを忘れたというのか」

「さきほど聡明鬼が叫んでおりました、打鬼棒というものでございます」牛頭が、恰も自分がそれによって打たれたかのように顔をしかめた。

「打鬼棒……ああ」閻羅王は思い出して頷いた。「その棒がどうしたのじゃ」

「それを手にしているテンニという元降妖師が鬼差どもを、閻羅王を捕えねばその棒で打つと、脅しているようです」馬頭が馬の顔を憎悪にしかめて答えた。「それゆえに鬼差どもがとち狂うております」

「ふむ」閻羅王はふたたび生死簿に眼を落とした。「その棒、十八層地獄よりも恐るべきものであるというのか」

「――」牛頭も馬頭も、答えることができずにいた。

「来たければ来るがよいわ」閻羅王の口調は飽くまで静かなものであった。「ここ陰曹地府というところの在り方が、昨日今日で培われたものではないということ、簡単にそれを崩したり変貌させたりするなど到底かなわぬことを、とくと知らしめてやろう」

「は」

「は、はい」牛頭と馬頭は揃って首を垂れたが、そうかといって自分たち従者が閻羅王の身の保護を怠ってよい理由など微塵もなかった。

二足は武器を取り、閻羅王の居室の入り口付近に仁王立ちした。  
彼らの下に仕える妖鬼や小鬼たちも、武器を取らせ入り口の外に侍らせてある。

迫り来る鬼差ども、鬼とはいえ決して闘いに慣れては居らぬ差官どもだ。  
牛頭馬頭の名にかけて、この室に一步たりとも侵入させるなど決してあつてはならなかった。



今思えば、父と母は大層仲の良い夫婦だったのだろう。

厳密にはいろいろと互いに不足を覚えることもあつたのかも知れないが、傍から見れば常に寄り添い、協力し合い、助け合い、支え合い、さまざまな問題や試練というものを共に乗り越えて行く、素朴ながら幸せな家族であつたのだろう。

あるいは相性というものに恵まれていたのかも知れない。

そういえば、ついに二人の生命天宮図を作ることはなかった。

――とんだ親不孝かも知れぬな。

リンケイは、目の前の鬼の夫婦――キオウとスンキを見ながらふとそんなことを思った。  
子供であつた目と今の自分の目とでは、また自身の両親である夫婦を見る目と赤の他人である夫婦を見る目とでは、見方が違うのは確かであろう。

わかってはいるのだが、今日の前にいる鬼の夫婦の姿の上に、幻のごとく自分の父と母の姿が写しだされているような気がするのだ。

さらには、陰陽師であつた父が筆を取り生命天宮図を描く傍らでそれに見入っている幼少の頃の自分、その姿をまるで上天から俯瞰するかのよう眺めている気持ちにさえなる。

――懐かしいが、しかし何故今このような気分になるのかな。

リンケイは微笑みながらもそう思った。

思ううちにも、病に倒れた父と母の、最後に見た姿――並べ敷かれた布団に横たわる姿が脳裡に蘇る。

病の治癒を頼まれ足を運んだその依頼元の家で、二人は同じ病をもらい倒れ伏したのだ。

リンケイはそれから、移る病であるからと言われ、父の友である別の陰陽師の家にしばらく引き取られることとなったが、ほどなくそのまま父と母が鬼籍に入ったことを人伝に聞かされたのであった。

――ああ、そうだ。

リンケイは思い出し、天を仰いだ。

空は青く、薄い雲がいくつか掛かり、陽は西に向かおうとしているところだ。

間もなくその方角から龍馬が、背にコントクとジライを載せ飛び戻ってくるはずだ。

――その、預けられた先の家で、リョーマに出遭ったのだったな。

その家の庭である日仔犬を見つけ、家人に訊ねても飼ってはいない、捨て犬だろうと言われたのだが、何故か自分に妙に懐いてくる。

特に嫌でもなかったし同じ年頃の子供もいない家だったので、その犬を遊び相手と考えるようになったのだ。

不憫に思ったのかその家の主も禁ずることなく、それからその犬はリンケイの傍にいつもいるようになった。

――では俺はあの時、やはり心が折れかけていたということなのかな。

実のところ両親の死というものをその時の自分は、その年齢にそぐわずそれほど理不尽と考えたりしなかった。

それは常日頃から、病についての知識、認識を培われていたからだろう。

病の治癒をする以上、同じ病に罹ることはあり得るのだと、リンケイは実際に両親が倒れたとき既に知っていた。

なので両親が死んだと聞いた時にも、治癒よりも病の方が疾かったのだなと考えた。

しかしそのような理屈とは無関係に、本来ならば自分は自らの感情に押し流され押し潰されしてもおかしくはなかつただろう。

その時すでに、リョーマは傍にいた。

いて、くれていた。

だから、心がすっかりへし折れてしまうということにはならなかつたのだ。

そういう記憶が、自分の中にはないのだ。

玉帝が、差し向けてくれたのかも知れない。

リョーマを、自分の許へ。

或いは、父母が。

――俺の生命天宮図を作ってみれば、そういうことがすべて描かれているのだろうがな。

眼を閉じ、大きく呼吸をして顔を地に向け戻す。

――まあ、金輪際そんなもの作る気にはならんが。

「陰陽師」

叫ぶ声があると同時に立ち上がっていた。

振り向くと、聡明鬼がその腕に小さな動物を載せ走って来るところだった。

「スルグーン？」リンケイは眉を寄せた。



奇獣は大量に血を流し、聡明鬼の腕からそれは滴り落ちている。  
猫の貌は苦しげに歪められており、嘴は小さく震えている。

「テンニに、やられた」聡明鬼はぜいぜいと肩で息をしながら、リンケイの方にスルグーンの小さな体を差し出した。「急いでこいつを助けてやってくれ」

「承知した」

リンケイは素早くスルグーンの全身に眼を走らせ、傷の位置が脚の付け根であること、出血の状態から急所を僅かに外れていることを読み取り、まずは止血の為の薬葉を早急に用意する、などの手順を咄嗟に組み立てた。

「それへ」

背後の、上面が平らな岩を指差す。

「ケイキョ」声を高め、電光石火のごとく走り寄る鼬に「ムイト、シノブノハを採って来てくれ」指示をする。

「へい」鼬は先に姿を消し、声だけが後からそう返事した。

「俺は何をすればいい」リューシュンもまた叫ぶ。「何を採ってくる」

「まずは事情を話せ」リンケイは飲み水とは別の竹筒から水を手に振りかけ、それからスルグーンの傷にもかけた。

チイイ

弱いながら、奇獣が苦痛の声を挙げる。

「俺の声が聞えるか」リンケイは言葉を掛けた。「お前の名を言え」

「ーース」雷獣は泣きべそのようなか細い声で答えた。「スル、グーン」

「これがスルグーンか」キオウが瞬きも忘れて初見の幻獣を見下ろす。

「初めて見たわ、こんなー」スンキも口を抑えながら、驚きを隠せないように言った。

「もう一人のスルグーンは、やられた」リュージュンは自分が傷みに耐えるのような声で話した。「テンニの打鬼棒に、あいつ自分から進んでいきやがってーその後すぐに、こっちのスルグーンが現れたんだ」

「陰曹地府に？」リンケイは聡明鬼を見上げて訊き返した。「龍馬の入れない天心地胆に、こいつは入れるのか」

「いやな、所だチイ」スルグーンは眼をぎゅっと瞑ったまま低く呟いた。「気分が、悪かったキイ」

「陰陽界がか」リンケイは見下ろし、少し笑った。「けどいいな、俺も行ってみたいところだ」

「またそんな事を」リュージュンが首を振る。「趣味の悪い」

「しかし、鬼差のスルグーンがやられたとなると」キオウが言葉を継ぐ。「閻羅王はこの先、どうなるのか」

「別に、案ずることはないさ」リュージュンは肩をすくめた。「閻羅王本来の、理屈もへったくれもねえ力ずくのやり方でねじ伏せてお終いだ」

「なるほど」リンケイは頷いた。「打鬼棒など、恐るるに足らぬというわけだな」

「あいつは打たれたりしないさ」リュージュンは考え深そうな目をして言った。「あんな、テンニごときに」

「採ってきやした」ケイキョが言われた植物を尻尾に巻きつけ走り戻って来た。

「ご苦労」リンケイは手早く止血と鎮痛を施し、次なる薬草をケイキョに告げ、採りに走らせた。

「リョーマは、どこに行ったんだ？」リュージュンが辺りを見回して訊く。

「コントクとジライを呼びに行かせたんだが.....そういえば、遅いな」リンケイは空を仰いだ。

陽は当然ながら先刻よりもさらに西側へ傾いている。

リンケイは指を唇に当て、眼を閉じた。

低く呪を唱え、それから口を閉じ何かを静かに聞き取る。

「鬼どもが、陽世に押し寄せて来ているらしい」リンケイはやがて言った。

「鬼どもが」リュージュンとキオウが揃って慄然たる叫びを発し、スンキは息を呑んだ。

「恐らく、打鬼棒から逃れんがためだろうな」リンケイは唇から指を離した。「キオウ、フラを  
使えるか」

「ああ」模糊鬼は、従者である黒犬を見下ろした。「フラ、俺と聡明鬼を載せていってくれ」

「馳もな」リンケイは付け加えた。

「ケイキョも？ けどあいつ、鬼と闘うことなんかできないだろう」リュージュンが問う。

「智恵がある」リンケイはにやりと笑った。「いち早く逃げ道を見つけるためのな」

「わかった」リュージュンは少しだけ苦笑してのち、キオウと共に龍馬に戻ったフラの背に跨った。

「気をつけて」スンキが夫と元の主に地上から声をかける。



閻羅王は杖を取り、狂った鬼差や鬼卒どもの攻め来るのを待った。

だが閻羅王が出るまでもなく、牛頭馬頭によりそれらは次々と打ち倒され、床に這いつくばり、とても閻羅王に一矢報いることなど叶わずにいたのだ。

しばらくの間は閻羅王自らも立ち、闘う用意をしていたが、やがて再び座にどかりと腰を下ろ

した。

そのあいだにも、牛頭と馬頭の三叉に叩かれ気を失ってごろごろと床に転がる鬼差たちは増えていった。

閻羅王は気絶した差官のうち、働きの悪かった者や閻羅王への反発を露わにした者などを選び、生死簿に書かれてあるその者らの生前の名のところに十八層地獄行きと記していった。

記された鬼は無論その通り、気絶したまま十八層地獄へと堕ちていった。

目覚めた先は真の地獄だ。

そこで彼らは、自分のなした所業を大いに悔やむことだろう。

だがすべてはもはや遅きに失しているのだった。

降妖師テンニを同じく十八層地獄に送ることも、容易いことではあった。

だが十八層地獄にも鬼はいる。

そこを滅茶苦茶に引っ掻き回されては、それこそ地獄の王の沽券に関わることになる。

まずは打鬼棒とやらいう小賢しい得物を取り上げ始末してからだ。

さらにしばらく待った。

やがて鬼差どもの迫り来る数が減った。

――来たか。

閻羅王は察したが、まだ立たずにいた。

牛頭馬頭が、打鬼棒とどう闘うか、それを見てもみることにしたのだ。

或いは打鬼棒の弱みとでもいうものが垣間見えるかも知れない。

逆に牛頭馬頭が打鬼棒に打たれ消えてしまえばその時は、閻羅王にとって絶体絶命の危機が訪れることになる。

だが閻羅王に、自分が血となって流れる場面などまったく思いつく頭もなかった。

ゆらり、と鬼灯のごとくに現れたその新参鬼は、片目を失っていた。

「ほう」閻羅王は座して頬杖をついたまま、少し感嘆した。「その眼、誰にやられたのじゃ。聡明鬼か」

「違う」テンニは面白くもなさそうに口の端を歪めた。「あの奇妙な鳥の化け物じゃ」

「鳥の、化け物？」雷獣スルグーンに遭遇しておらぬ閻羅王は、眉根を寄せた。「何者じゃ、そいつは」牛頭と馬頭に問う。

「は」

「ええと」

牛頭も馬頭もまたその獣に遭遇しておらず、彼らは三叉を構え降妖師に対峙したまま答えあぐねた。

「鳥の神ガルダとか言うておった」テンニは低く、口惜しげに告げた。

「なんと」閻羅王は魂消た。「ガルダだと。ではスルグーンの、分身か」

「まったく神だらけだな、ここは地獄ではなく上天なのか」

「ふん」閻羅王はむかむかと腹を立て、頬杖をついたままそっぽを向いた。「うちのスルグーンはどうなったのじゃ」

「消してやったわ」テンニはそこでようやく不敵の笑いを取り戻した。「この打鬼棒でな」

「――」閻羅王は一度眼を閉じ、それを開けてゆっくりとテンニの方を見た。

「泣きたいか、閻羅王」テンニはますます笑いを広げた。「一番頼りになる下僕を失ったのだからな」

「貴様」牛頭が怒鳴る。「閻羅王さまにお仕えするはスルグーンのみではないぞ」

「そうだ」馬頭も続く。「我らも控えておるぞ」

「貴様らなど一撃で血となる運命よ」テンニは言うが早いか得物をぶんと振るった。

それは傍目には、刀を空中で無為に空振りしただけにすぎなかった。  
だが鎖は眼にも止まらぬ速さで打鬼棒を舞わせたのだ。

びよう

風の音がしたかと思うとそれは牛頭を横から打った、ように見えた、しかし牛頭は風の音に合わせてるように三叉を立て棒の襲撃を防いだのだ。

次の瞬間今度は馬頭の三叉が打鬼棒を強くテンニめがけて打ち返した。

テンニもまた刀でそれを弾き、素早く鎖を巻いて手許に戻した。

「スルグーンは、消えたか」閻羅王は目の前で闘いが起こっていることを知りもしないかのように独り呟いた。「あ奴も内心では儂をなきものにしようと企んでいたようだったが――それを隠しながらもよく仕えてくれたものよ」ふう、と息をつく。「さらばじゃ」

牛頭が床を蹴り、テンニに向かって三叉を振り下ろした。

テンニは刀をかざし、鎖が眼にも止まらぬ疾さで伸びる。

馬頭がその鎖を三叉で叩く。

打鬼棒はくるりと向きを変え、持ち主テンニの方を打とうとする。

テンニは刀をひらめかせ自らの得物を打ち返し、またもや素早く巻く。

「ただの阿呆どもかと思っておったが、少しは知恵があるようだな」テンニは毒づいた。「二人がかりということをついつか」

「ただの阿呆ではないわ」牛頭が怒って反論する。

「そのしゃらくさい棒を取り上げてお前を十八層地獄へ叩き落してやるわ」馬頭が予告する。

「お前らなど、十八層地獄へも行けぬわ」言うが早い今度はテンニが床を蹴り、上空にて刀を頭上に振り上げた。

牛頭と馬頭からは、テンニの背に刃が隠れて見えない。

二足は三叉を立て身構えた。

びよう

空を切る音が聞えたのは、二足の背後からだった。

振り向く暇などない。

牛頭と馬頭は同時に三叉を背後に向けようとした、が、二足の三叉は二足の間であろうことかぶつかりあい刃がからみつき合っただけで動けなくなってしまったのだ。

座に坐る閻羅王の爪がぴくりと動いた。

だが打鬼棒を食らったのは、牛頭でも馬頭でもなかった。

咄嗟に身を投げ出した小鬼が、二足の目の前で打鬼棒を体に受け、棒はくるくると回りながら空中へ弾き返されたのだ。

小鬼は無論のこと、血となってもものも言わずに流れ消えた。

「あっ」

「お前」

牛頭と馬頭は叫んだが、二足にとっては名も知らぬ小間使いの鬼にすぎなかった、だがその小鬼は自らの命を犠牲にして二足を守ったのだ。

「上じゃ」閻羅王が叫んだ。

牛頭と馬頭ははっと見上げると同時に三叉を突き伸ばした。

まさにテンニがその刃と共に二足の頭上から降ってくるころだった。

三つの刃がぎいん、と音を響かせぶつかり合った。

「一人の降妖師に幾足も寄ってたかって闘うか」テンニはくっくつと喉を鳴らし笑った。「情けない奴らよ」

「やかましい」馬頭が手を伸ばしテンニを捕まえようとする、が降妖師は刀をぐいと押し背後に飛び退いた。

「やーっ」甲高い声がそれを迎え、後ろから飛び掛ってくる。

テンニは振り向きざま刀で斬り払った。

小鬼は悲鳴を上げて倒れ、動かなくなった。



「やっつけろ」

「皆でかかれ」

小鬼どもはわらわらと姿を現し、次々にテンニに向かって来る。

テンニは小鼻に皺を寄せ、鎖をぶうんと大きく振り回して打鬼棒を一回転させた。

「お前たち」

「危ないからよせ」

牛頭と馬頭は慌てて走り寄る、が、小鬼たちは消えることも厭わずわあわあと声を挙げながらテンニを攻撃するのだ。

「なんと」閻羅王までが驚きを隠せなかった。「お前たち、あの棒を恐れぬというか」

「閻羅王さまをお守りするのが我々の役目でございます」小鬼の一足が叫ぶ。

「我々がお守りいたします」別の小鬼も叫ぶ。

「お守りいたします」すべての小鬼も叫ぶ。

だがその間にも多くの小鬼が打鬼棒の餌食となって消え去ったのだ。

「馬鹿者どもが」テンニはそう言い残すと走り出し、森羅殿から抜け出した。

「やった」

「追い出した」

小鬼たちは喜んだが、

「駄目だ」

「逃がすな」

「捕えよ」

牛頭と馬頭、そして閻羅王は怒鳴った。

しかしテンニは疾風のごとく駈け去り、もはや誰にも追いつくことはできなかった。



地上に、人間の住む世界に、地獄がそのままやって来たような光景だった。

天心地胆から逃げてきた鬼どもが、それまで何事もなく平穏に生活していた人間たちの町中へ

わらわらと――山中や水中に身を潜めるということすらなく姿を現し、度肝を抜かれた人々が声もなくへたり込む目の前で食べ物をさらい、女子供をさらい、勇を鼓して歯向かう男たちを食い殺し千切り捨てた。

時を置かず町中は阿鼻叫喚の地獄図絵と成り果てたのだ。

鬼の中には鬼の差官もいたから、それらはさすがに無意味に人間世界を荒らすことはよくないと鬼どもに説いて回った。

だが鬼どもは、自分の姿を見ただけで恐れおののき逃げ惑う人間たちを見るとつい、まるで天下を取ったかのような感覚を覚えたのだ。

もとより理性や知性など大して持ち合わせもせぬ鬼のこと、高揚する気分になんて任せてどんどん凶に乗り悪業を働いていった。

「ひどい有様だ」ジライが歯を食いしばって言う。

「これは――」コントクは、自分も鬼であるからか何も言えぬ様子だったが、決して鬼どものやっていることを認める気持ちなどあるわけがなかった。「止めさせなければ」本心から彼はそう言った。

「五金よ一金に帰せよ」ジライは五行鏡を鬼の一足に差し向けた。「木火土金水、地に伏せよ」

鬼は自分の意志に関係なくどさりと地に膝を突き、ばたりと砂埃を上げて上体を倒した。

「貴様ら、何故突然陽世にやって来おった」ジライは怒鳴りつけた。

「うるさい、早く術を解け」鬼は地面に倒れながらも牙を剥き凄んだ。「頭から喰らうてやるわ」

「陰曹地府で何があった」コントクが訊く。「閻羅王に何事か起こったのか」

「土地爺か」鬼はますますいきり立った。「土地爺の分際でこんな真似をしたことを十八層地獄で悔いるがいい」

「貴様に言う言葉だ」ジライはついに護符を取り出し、その鬼の双つの角の間にびしり、と叩きつけた。

ごうっ、と黒い風となって、鬼は天に立ち消えた。

コントクは息を呑んだ。

護符は鬼を封じ、二度と転生できなくする。

相当の悪鬼に向けて使う、最後の手段だ。

それを今使うとは、弟はどれほど怒り心頭に発しているのだろう。

降妖師という職業からくるものばかりではないはずだ。

義理とはいえ兄である自分に対する罵詈雑言が許せないのもあったろう。

だがそれよりも、単純に今日の前で起こっている鬼どもの所業が人間として許せない、そういうことだろう。

「すまない」コントクは思わず頭を下げた。「俺も同じ鬼だ。理由はわからんが、こんなことになるとは」

「兄さん」ジライは吃驚した。「どうして兄さんが謝るんです？ 悪いのは悪さをしでかす鬼どもだけだ。兄さんとは違う」

「うむ」コントクは頷くが、それでも申し訳ないという気持ちに変わりはなかった。

だがその気持ちは今、何故このような事態になってしまったのか、その理由を突き止める方に向けなければならなかった。

「行こう」ジライは兄を促して走り出した。「まだまだ鬼はたくさんいる」

「ああ」コントクも続いた。「土地爺として人間の世界は守らなければならん」

ジライは定身法にて鬼を取り押さえ、コントクは力づくで羽交い絞めにした。

だがきりがなかった。

天心地胆より追い返したところで、鬼どもはまたすぐ違う天心地胆から這い出てくるのだ。

護符にて封じた鬼ですら、黒い風の状態でまた舞い戻ってくる。

そしてそこら辺に転がる動物の屍に入り込み、世にも奇態で不気味な腐った化け物となって、相変わらず人々を襲うのだ。

「くそっ」ジライは歯噛みした。「これは、打鬼棒でもなければ間に合わないな」

「打鬼棒」コントクが口にし、二足はハッと眼を見合わせた。「まさか？」



リョーマは苛立っていた。

自分の魔焰をひと吹きしてしまえば、こんな鬼どもすべて焼き尽くして終わりなのだが、今は罪のない人間たちの中に鬼どもが混ざっている状況だ。

間違えて人間を焼いてはならないから、思い切り好きな所へ好きなだけ焰をぶつけることができない。

馬の尾を使い、人間に当らぬよう注意しながら鬼だけを打ち倒す。

人間に牙が当らぬよう注意しながら、鬼の体だけにかぶりと食らいつく。

若き龍馬にとってそんなちまちました闘い方は、苛立って仕方のないものだった。

――こいつら、なんで山の中じゃなくて人間の住む町になんか出てきたんだ？

リョーマは尾で払い飛ばした鬼が、周りに人のいない原っぱに落ちたので、やっと大きく息を吸い焰を吐いた。

辺りの草ごと、鬼は丸焦げとなり果てた。

――ああ、焼く前に訊けばよかったな。

リョーマは思ったが、焼いてしまったものは戻らない。

ただちに向きを変え、再び町中へ戻る。

棍棒で人を打ちのめそうとする鬼の腕を、尻尾でぎりりと締め上げる。

「あいたたた」鬼が悲鳴を挙げ、次に「うわあああ」とリョーマを見て叫ぶ。「化け物だ」

「うるさい」リョーマは怒った。「お前ら、なんでここに来た」

「ひいいい」だが鬼に、リョーマの言葉は聞えないのだった。「化け物だああ」再び叫ぶ。

すっかり腹を立てたリョーマはぶん、と尾を振り、鬼を上空に投げ上げ、上に向かってごう、と焰を吐いた。

鬼は上空で黒焦げになった。

「助けてえ」蚊の鳴くような悲鳴が地上のあちこちで起きている。

リョーマは苛々としながら声のする方へ次々に飛んだ。

飛んだ先で鬼を捕え、銜え、放り投げ、焔で焼く。

だがきりがなかった。

鬼どもは、話に聞く陰曹地府とやらがそっくりそのまま来たのではないかと疑うほどに数多く、次々に現れるのだ。

リョーマの方はいつ終わるとも知れない鬼退治に、心が疲れてくるのを感じざるを得なかった

。

主人リンケイの姿を思い出す。

疲れた時はいつもリンケイが施療をほどこしてくれるのだ。

今すぐに、山賊どもの住処である山へ戻りたかった。

犬の姿となって、リンケイの膝元に蹲り撫でてもらってぐっすり眠りたかった。

「リョーマさん」

鼬の声が聞えたのはその時だった。

ハッとして振り向くと、フラが空をうねりながら飛びこちらへ向かって来るところだった。

「無事でやすか」その馬の背に、ケイキョとキオウ、そしてリュージュンが乗っている。

「おれは大丈夫だ」リョーマは頷いた。「鬼どもがわんさかやって来てる」

「コントクさんとジライさんは」ケイキョがフラの背からリョーマの背に飛び移って訊いた。

「さっきどこかで降ろしてくれと言われて、それっきりだ」リョーマは地上をきよろきよろと見回した。「どこにいるのか、わからない」

「テンニを覚えていやすか」ケイキョは更に問う。「打鬼棒という武器を使って聡明鬼さんと闘った降妖師、あいつを見やせんでしたか」

「テンニ？」リョーマはきよとんとした。「いや、全然見かけなかったぞ」

「そうでやすか」ケイキョはフラに乗っているキオウとリュージュンを振り返った。「どうしやすか、鬼どもを片っ端から抑えるにも、こう数が多くちゃ」

「だがやるしかない」リュージュンは地上を見下ろし、そう言い残すとひらりと宙に身を投げ出した。「お前たちは空から鬼をつまみ取ってくれ」

「きりがないよ」リョーマは思わず聡明鬼を呼び止めようとした。「人間と鬼がごちゃ混ぜになっちまってるし」

だが聡明鬼に龍馬の声は届かず、振り向きもしないまま下に落ちていった。

リュージュンは高い塔の屋根に一旦降り、そこからまた地面へと飛び降りた。

地獄の鬼どもが、人間たちの住処を滅茶苦茶に壊し、荒し、支配していた。

人間たちは恐怖に取りつかれ、叫び、泣き、駈けずり回り、鐘を打ち鳴らし、中には武器を取って鬼に対峙する者もあった。

しかし襲い来る鬼どもは後を絶たない。

人間たちは次第に疲れ、力尽き、諦め、くず折れていった。

リューシユンは、吼えた。

その怒りの声にすべての者が驚き振り向いた。

聡明鬼は蓬髪を逆立たせて人間の首を手に掴む鬼に向かって走り、その顔に爪を立て、首を振り切った。

「貴様、鬼のくせに人間に加勢する気か」鬼怪の一足が怒鳴る。

「貴様らこそ鬼の分際で陽世に来て何していやがる」リューシユンはそれを撥ねつけ压した。「俺は土地爺だ。陽世を治める長として貴様らの所業は断じて許さん」

「何が土地爺だ」

「閻羅王さまに従いもせぬくせに」

「閻羅王さまに玉の一つでも差し出したことがあるのか」

「この裏切り者が」

鬼どもは一斉に喚き立てた。

「黙れ」リューシユンも負けてはいない。「閻羅王に何の関係がある。閻羅王の命令でお前らはここに来たというのか」

「そもそも貴様は神だというではないか」鬼の一足が声を高めて言った。「貴様こそ何故陰曹地府に来ていやがるのだ」

「そうだそうだ」

「龍の神だというではないか」

「貴様は何者なのだ」

「俺は」リューシユンは息を大きく吸った。「鬼だ。聡明鬼とは俺のことだ」

「神？」

「龍の神？」

人間たちまでが戸惑い、囁き合った。

「ナーガ様だというのか？」

「なるほど、それだからあの土地爺さまは我々を救って下さるというのか」

「ナーガ様」誰かが叫ぶ。

「ナーガ様」

「我らが豊穰の神よ」

「我らをお守り下さる神よ」

人間たちの、必死にすぎる目がリューシユンに向けられる。

「俺は」鬼だ、ともう一度リューシユンは否定しようとしたが、しかしその言葉が言えなかった

。

「神よ」

「鬼どもを蹴散らして下さい」

「我らを守り下さい」

「ナーガ様」

人間たちの目は真っ直ぐにリューシユンを見ており、その声は喉を締め付けられてでもいるかのように助けを求め続ける。

「俺は」

「神ではないと？」

「我らをお守り下さることはできないと？」

「我らを、鬼どもの牙にかかるとままたまにさせておくおつもりですか」

「あんたはやっぱり、鬼なのか」

リューシユンが逡巡している間に、人間たちは次々と怒りの貌をあらわにしていった。

「鬼なのか」

「鬼の味方をするのか」

「神のくせに」

「龍神のくせに」

――守ってもらふことしか、考えていないのか。

リューシユンの中に、突然そんな想いが生まれた。



先ほどまで自ら武器を取り鬼どもと対峙していた者も、今みるとすでにその得物は地に捨て置かれ、皆丸腰となって闘う気持ちなど微塵も見えず、こぞって聡明鬼の力に頼ろうとしている。

「俺はお前たちを守る」リューシユンは叫んだ。「だからお前たちも、武器を取れ。そしてお前たちも」

「無理です」すぐに人間たちは首を振った。

「我らに鬼を倒すことなどできっこありません」

「鬼を倒せるのはあなただけです」

「闘って下さい」

「我らのために、鬼どもを駆逐して下さい」

「――」リューシユンは言葉を失った。

哄笑が聞える。

「見たか、聡明鬼よ」

「しょせん人間どもなど、こんなものだ」

「自分のことしか考えておらんのよ」

その時だった。

突如、リューシユンの中に鬼魂が入ってきたのだ。

「あぐうっ」リューシユンは腹を押さえずくまった。

腹に鬼の爪を立てられこと切れた人間のものだ。

その鬼魂は痛みと苦しみ、恐怖と絶望をリューシユンに投げて寄越した。

「うう、ぐうう」リューシユンは膝を突き前のめりに倒れた。

「何だ」

「どうしたというのだ」

「儂らは何もしておらんというのに」

鬼どもがきよとんとし、人間たちは青くなり顔を見合わせる。

やがて鬼魂はリュージュンの中から上天へと逝き、リュージュンはよろよろと膝を立て立ち上がった。

だがすぐ、次の鬼魂が入り込んできた。  
今度は頭を裂かれてこと切れた者のようだ。

「うぐああああ」リュージュンは呻き、頭を抑えまたしても地に倒れ伏した。

「何をやってるんだ」

「闘う気はないのか」

「ふざけているのか」

人間どもは苛立ちの声を挙げはじめた。

「なんだ、こいつ」

「よくわからんが、我らをどうこうすることはもはやできないようだ」

「ははは、聡明鬼が聞いて呆れるわ」

「まったくだ、さっきまでの豪語はどこにいった」

鬼どもも、痛みと苦しみにのたうつリュージュンを見下ろし、足で小突き、馬鹿にして笑った

。

「ちが、う」リュージュンはぜいぜいと息を切らしながら、なんとか身を立てようとした。

だが鬼魂、鬼に切り裂かれ喰い殺された人間たちの行き場のない死霊は次々に、リュージュンを見つけては入り込むのだった。

――生きていても死んでからも、頼るんだな。

苦しみを受けながらリュージュンは頭の隅でそう想った。

嫌では、ないのだろう。

いつぞや陰陽師の言った言葉が蘇る。

――どうなんだかな。

苦痛に顔を歪めながら、リューシユンは頭の片隅で呟いた。

――嫌ではないんだろうと、そう思っただけなんだがな。

美しい景色が、脳裡に広がる。  
彩りも鮮やかな、上天の景色だ。

懐かしく、哀しい景色。

リューシユンは、ああ、と合点のいく思いに捕われた。

――哀しい、こった。

自分が今、哀しみに包まれていることを、彼は知ったのだ。

――俺はそれでも、当たり前前にこれを、やっていかなきゃいけないんだろうか。

もはや立ち上がる気力すらなかった。

地に伏したまま、入り込んでくる鬼魂の苦しみに翻弄されるがままとなっていた。

鬼魂ですら、そんなリューシユンの在り方に不足を覚えているかのような顔を向けてきた。

「手前ら、邪魔だ」

「どけどけえ」

「武器を持たぬ奴はとっとと消えうせろ」

「山の中にでも逃げ込んでしまえ」

野蛮に怒鳴り散らす声がいくつも重なって響いた。

リュージュンは倒れたまま、うっすらと眼を開けた。

山賊どもが現れ、鬼どもにかかっていくのが見えた。

彼らの頭上には、鬼めがけて鞭のように形成した紅い焰を吐く龍馬と、その背に乗る模糊鬼キオウの姿があった。

山賊たちはそれぞれの武器を振り回し、鬼を斬り、刺し、叩きのめした。  
町の住民たちは尻込みして見守るだけだった。  
逃げ出そうにも、背後でも鬼と山賊がぶつかり合い、下手に動けない。

リューシユンは、のろのろと起き上がった。

鬼魂は入り込んで来なくなった。  
近くにいるものはもうすべて上天に逝ったのだろう。

体力は、ひと戦を闘い抜いたのとおなじほどに消耗していた。

ばさり、と目の前に、巨大な馬の尻尾が垂れ下がる。

「乗るか、聡明鬼」フラの背からキオウが声をかけた。「後はうちの奴らに任せておけばいい」

「——」リューシユンは少し迷ったが、自分の体が震えているのを自覚し、よろよろと尻尾にし  
がみついでよじ登った。

「ナーガ様」すぐに住民たちが慌てて呼び止めた。「我らを捨て置かれるのですか」  
「どちらへ行ってしまわれるのか」  
「あなたは山賊どもの仲間なのか」

リューシユンは言葉もなく馬の背から人々を見下ろした。

自分は神ではない。

だが、土地爺だ。

——山賊どもを、一人残らず殺してやる。

突然降って涌いたように、リューシユンはかつて自分が鬼魂に約束したことを思い出した。  
それは、賊どもに蹂躪され殺された女の死霊だった。

女の恨みを受け取り、山賊どもが二度と悪辣な振舞いのできぬよう、皆殺しにしてやると言って聞かせたのだ。

——それが今は、このざまだ。

今自分は、殲滅せしめるべき山賊どもに命を救われ、不甲斐なく龍馬の背に乗って逃げようとしている。

「やかましい」怒鳴り声が雷のごとくに轟く。「この土地爺がどれだけ闘ったか見ていなかったのか」

リューシユンは茫然とその背中を見た。  
細く華奢な背中だ。  
それは模糊鬼キオウのものだった。

「守ってくれだの救ってくれだの見捨てる気かだの、たった一足の土地爺にどこまで求めるのか。こいつは神なんかじゃない、よく目を開いて見てみろ。こいつは鬼だ、ただの土地爺だ。都合のいいように妄想するのもいい加減にしろ」

言っている端から、フラの尻尾は地上の鬼どもを叩く。

「救って欲しいのなら我が山賊一味、そしてこの紅龍馬フラが救ってやる。我らを神と呼ぶがいい」

リューシユンはなかば口をあんぐりと開け初めて聞くキオウの怒鳴り声に耳を傾けていたが、そこでつい風のように笑ってしまった。

「何が可笑しいんだ」キオウはむっつりとした顔を半分振り向け、いつもの呟くような声で訊いた。

「いや」リューシユンは馬の背の上でくすくすと笑う。「実際神なんて、誰がなってもよきそう  
なもんだと思ってな」

「——」キオウは前を向く。

フラがごう、と紅き焰を吐き、それは正確に鬼だけを狙って黒焦げにした。

「けど、最上の神は、お前だからな」背を向けたままキオウは、かろうじて聞き取れるほどの声  
でぼそぼそと告げた。「お前しかいない」

「——」今度はリューシユンが言葉をなくした。

「打鬼棒の男が陽世に来たぞ」

遠くの方から、恐怖に怯えた声が聞えた。

「逃げろ。血になって流れて消えてしまうぞ」

「テンニが来たのか」リューシユンは戦慄の声を挙げた。

「フラ」キオウが従者に叫ぶ。「声のする方へ飛べ」

龍馬は直ちに上方へ翔け上がり、主の言葉の通り悲鳴の聞えた方角へと飛び始めた。

鬼となった降妖師は、片手に刀を、片手に鎖を握り、眼をぎらつかせて街道の真ん中に立っ  
ていた。

辺りには打たれた鬼どもの残した血の跡があちこちにこびりつき、凄惨な光景を成していた。

「フラ」馬の背の上からキオウはテンニを睨み付けた。「あの鬼を、燃やせ」

ごう

フラの口から魔焰が迸る。

テンニは跳んでかわし、上空を睨み上げた。

フラは続けざまに焰を吐き鬼を追った。

刀の届かないところからの攻撃だ。

テンニは憎々しげに口を歪め、矢庭に刀を持ち替え、フラめがけてぶんと投げ上げた。

フラは素早く身をかわした。

びよう

リューシユンの耳に、鎖の風を切る音が聞えた。

「打鬼棒が来る」叫び、素早く周囲を見渡す。

それは妖力によって姿を消していたものかのごとく、突然現れキオウを横から打とうとした。

「キオウ」リューシユンが叫ぶのと同時に、フラの馬の尻尾が打鬼棒をばしんとはたき落としていた。

「鬼どもが天心地胆から抜け出して行く」キオウは遥か遠くを見遣りながら言った。「俺たちもここは引き上げた方がいい」

「逃げるのか」リューシユンは不服そうに言った。「まだ人間たちがいる」

「テンニは人間たちに手をかけたりしないだろう」キオウは振り向いた。「あいつが狙っているのは陰曹地府の覇権だ」

「そう、か」リューシユンは迷いながら答えた。

だがキオウの予測の通りにはならなかった。



テンニは、突然周囲の人間たちに刃を向け始め、二人、三人と続けざまに斬り倒したのだ。

「な」リューシュンとキオウは絶句してその光景を見下ろした。

「者ども」テンニは叫んだ。「あの神を名乗る鬼どもを見たか。なんだかんだと言って結局、お前らを見捨てる気だ」言ったかと思うとそばにいた人間をまた斬る。「もうお前らを助けてくれるものなどおらぬ」

「ひいいい」

「わああ」

人間たちは恐れおののきただ地べたに座り込みうち震えるだけだった。

「テンニ」

「貴様あつ」

キオウとリューシュンは同時に怒声を挙げた。

ごう

フラが焰を吐く。

テンニは高く跳び、降りた先で刀を振るい、また跳び同じくした。

「フラ、道を塞げ」キオウが命ずる。

龍馬は言われた通り尻尾で近くの家々の門や塀を打ち壊し、瓦礫の山を道の上に築き上げた。狙い通り降妖師の逃げる足は鈍った。

「小癩なことをするわ」テンニは毒づき、泣き叫ぶ少女の髪を掴んで自分の背に被せ、焰から身を守る盾として走った。

「この野郎」とうとうリュージュンは黙って見ておられず、フラの背から飛び降りた。

瓦礫の上に素足のまま降り立ち、そのまま駆け上る。

足が傷つくことなど構いもしない。

「フラ、テンニだけを巻き取れるか」キオウは龍馬に告げた。

フラはすぐに尻尾を伸ばし、少女の体を避けて降妖師の脚を狙い巻きつけた。

「ぐあ」テンニは体を浮かせ、瓦礫の山の上に倒れこんだ。

少女の体は放り出され、すんでのところでリュージュンがそれ受け取った。

テンニの体は空高く引っ張り上げられ、そこでフラは尻尾を放したかと思うとごうと焔を吐いたのだ。

「うぐああああっ」壮絶なわめき声が響く。

テンニは空中で紅き焔に包まれ、燃えた。

そしてそのまま再び瓦礫の上に落ちた。

フラはもう一度テンニに向けて尻尾を伸ばした、だがテンニは盲滅法に刀を振り回し、尻尾を寄せ付けなかった。

少女を離れた所へ連れて行った後リュージュンは駆け戻り、素手のままテンニに掴みかかった。

振り回される刀に身をかわし、隙を突いてその柄を掴む。

テンニを焼く焔は消えたが、黒焦げになって尚テンニは動いていた。

それは眼を覆いたくなるほど恐ろしき姿だった。

リュージュンは掴んだ柄を捻った。

テンニの体はよろめき、刀はがらんと音を立てて瓦礫の上に落ちた。

素早くリュージュンはテンニの焦げた体を引き千切らんと手を伸ばした。

びよう

だがその時また風を切る音が聞え、咄嗟に跳んだ。

リュージュンのいた所に、今度は打鬼棒ががらんと音を立てて転がった。  
テンニが巧みに、焦げた足で鎖を操ったのだ。

テンニは残った方の手で刀を素早く拾い、振った。  
その度リュージュンは二度三度と跳び退かなければならなかった。

だがそれはリュージュンを狙ったものではなく、龍馬を、正しくは龍馬の背の上の模糊鬼を狙ったものだったのだ。

二度三度と刀が振られるたび、打鬼棒がキオウを打とうとした。  
フラの尻尾がそれに応え何度もはたき返していた。

リュージュンがそれに気づいた時、テンニは巧妙に距離を取っており、次に天心地胆からふつと姿を消した。

「くそ」リュージュンはそこに向かって走り出そうとした。

「待て」キオウがフラの上から呼び止める。「今のお前の体で無茶をするな」

「く」リュージュンは立ち止まった。

確かにキオウの言う通り、思い出したように体が重く、いつもの疾さでは走れない有様だったのだ。

「乗れ。山に戻ろう」フラの尾が地面に着く。

リュージュンはもう一度、ふらふらしながら龍馬の背によじ登った。

「これは」コントクは立ち竦んだ。

「やはりな」ジライも立ち止まり、その往来の凄惨な光景に眼をすがめた。

彼ら兄弟は今、血塗られた町に辿りついていた。

すなわち建物に、道に、そこら中に血の跡がついている町だ。

「テンニが、ここへ来たのだ」コントクは弟とともに予測したことを口にした。

「ああ。打鬼棒を持って」ジライも兄の言葉に頷いた。

「降妖師、あの悪鬼は何処に」コントクは辺りを見回した。

「テンニ」ジライは声を限りに叫んだ。「どこにいる。出て来い」

だが返事はなかった。

土地爺と降妖師の兄弟は、しばらくきよろきよろと首を巡らせていたが、既にテンニは他へ姿をくらましたのだと察し、互いに顔を見合わせ首を振った。

町中にはもはや鬼の姿はなく、ただ茫然と力なくへたり込み泣き叫ぶことすら忘れてしまったかのような人間たちがそこここに見えるだけだった。

鬼どもはすべて血となって流れたか、天心地胆から陰曹地府へと逃げ戻ったかしたのだろう。

「兄さん、どうする」ジライが振り向き言った。「聡明鬼や陰陽師と合流して策を練るか」

「——ああ」コントクは肩を落とし気味にして答えた。

本心を言えば、あの恐るべき打鬼棒と直に対峙せずですんでほっとしている所もある。

自分は弟とは違い、鬼の身だ。

打鬼棒は、やはり怖い。

だがそれは、口が裂けても言えぬ感情であった。

「兄さん」

弟が叫ぶ。

はっとして顔を挙げたのと同時に、コントクは羽交い絞めにされていた。

「うぁ」

次に視界に入ってきたのは、打鬼棒の先端だった。

それは自分の鼻先に真っ直ぐに向けられ、鎖でぐるぐる巻きにされており、その鎖の上から真っ黒に焼け焦げた手がそれを握っていた。

「テンニ」弟がまた叫ぶ。「兄さんを離せ」

「俺の体を治せ」黒焦げの手の主は、コントクの耳の傍でコントクの弟にそう言った。「でない  
とこいつを打つ」

「きさま」ジライは歯噛みした。

「ジライ」コントクは、恐怖に喉首を締め上げられたような声でありながらもきっぱりと言った。  
。「こ奴の言うことになど耳を傾けるな」

「ほう」テンニが言い、打鬼棒をぐいとコントクの鼻先間近に引き寄せる。

ひ、とコントクの喉が鳴る。

「やめろ」ジライが悲鳴に近い声で叫ぶ。「お前を治そう。だから兄さんを離せ」

「ジ、ラ」コントクは弟を制止しようとするが言葉が出てこない。

体も凍りついたように動かせない。

もしぴくりとでも動いたなら、そしてテンニの手の位置がほんの少しでもずれたなら、次の瞬間自分は血となるのだ。

動いてはいけない――

そう思えば思うほど体は震え、何故か前のめりになり打鬼棒の先端へと自ら触りに行ってしまいそうになるのだ。

自分に制止をかけようとする思いが自分の意識を奪い、昏倒しそうになる。

——あいつなら……聡明鬼なら、どうするのだろうか。

不意に、そんな想いが頭をよぎる。

無論聡明鬼であれば、今このような状況でも果敢に降妖師の手を振り解き、恐れもなく打鬼棒に立ち向かって、そしてあいつならば、勝つのだろう。

だがそれは、聡明鬼だからこそだ。

自分はいつほどに強くない——

コントクの頭はますます錯綜した想いにかき乱され、立っているのも困難なほどに眩暈と吐き気が襲った。

——ああ、もう打たれて消えた方が、楽なのではないか——

ついに土地爺の胸にはそんな想いまでもが浮かび上がってきたのだ。

「少し待て」ジライが懐から朱砂を取り出す。「これに術を施し、お前の火傷を癒してやる」腰に下げた巾着から別の包みを取り出し、中の黒い粉を朱砂に混ぜる。

テンニは焼け焦げた顔で眼だけを白く不気味に光らせながら、その様子を瞬きもせず見つめた。

——ジライ、やめろ——

——いや、ジライ、早くしてくれ——

コントクの中で、相反する二つの叫びが拳がったが、そのどちらも土地爺の口から外に出ることはできずにいた。

「それは本当に、儂を治すためのものなのだろうか？」テンニが低く訊ねる。

ぴたり、とジライの手が止まる。「無論だ」手元を見たままで、弟は答えた。

「まさか、逆に儂を封じるためのもの、例えば定身砂の類なのではなかろうか？」テンニはまた訊く。

「違う」ジライは顔を上げ、叫ぶように言った。「そんなものではない」

「ではまず試せ」テンニはすかさず言った。「この土地爺に、その砂をかけてみよ」

「——」ジライは固まった。

くくく、とテンニの喉が笑いに震える。「ばか正直な男よ」

ジライはそのまま何も返すことができず、焦燥の顔でテンニを睨み返すのみだった。

「まあいい、貴様ら揃って亡き者にした後で、貴様の法具を漁れば何か役に立つものが見つかるだろうて」テンニはそう言い、ついに打鬼棒を頭上に振り上げた。

「やめろ」ジライが声を限りに叫ぶ。「テンニ、お前を治す、だから」

耳を傾けもせず、テンニは手に持つ棒を振り下ろした。

「うわあああ」ジライが声を裏返して悲鳴を挙げる。

——ああ、俺はここまでなんだな。

コントクは眼を閉じ、そう思った。

そしてそれが、自分の思う最後の想いなのだった。

最後に聞くのは、弟の悲鳴だった。

悪いことをした。

もっと、弟を悦ばせることをしてから消えたかった。

悲鳴などではなく、弟の笑顔を見て、笑う声を聞いて、そして消えたかった——

「ぐあああ」

悲鳴がまた聞えた。

それは弟のものではなかった。

眼を開ける。

そこにあった打鬼棒は見えなくなっていた。

眼を見開く。

茶色の長い尻尾が空中を撫でるように横切っていった。

それから音もなく地に降り立ったそれは、しなやかに身を捻りくるりと振り向いた。

ケイキョが、打鬼棒をテンニの手首から先ごと、牙の下に啜えて立っていた。



「貴様」テンニは唇をわななかせ叫んだ。「その棒を返せ」

ケイキヨは返事もせずに再び身を翻し、一目散に走り出した。

「待て」テンニはそれを追うべく一步踏み出した。

だがその体を巨大な馬の尻尾がするりと巻き取り、締め上げた。

「ぐふッ」テンニは息もできず空中高く持ち上げられたのだ。

「リョーマ」ジライがその尻尾の主、龍馬の名を呼ぶ。

「よく焼けてるな」リョーマは尻尾に巻いた獲物を眺めて言った。「けどもう一度、念には念をだ」

するりと尻尾を解き、テンニの体を上空に投げ上げる。

続けてごう、と蒼き焰を龍の口から吐く。

その時ケイキヨは、啞えている黒焦げの手がぴくりと動き、見えぬ力に引っ張られそうになるのを感じた。

——リョーマさん！

叫ぶことが出来ぬため、念として龍馬に強く送る。

——よけて！

吐いた焰が、目の前で真っ二つに割れた。

見開くりョーマの眸に、黒焦げのテンニが残った片手で刀を持つ姿が映った。

刀で、魔焰を斬ったのだ。

——斬妖剣か。

リョーマの脳裡に、リンケイの得物のことが浮かぶ。

あれと同じ類のものなのだろう。

そういえば山でケイキョを刺したのも、この刀だった、或いはこれと同じ類の刀だった。

そう思いつつ、ケイキョの強き念に弾かれるように、リョーマは馬の体を斜めに開いたのだ。

真っ直ぐに突き出されたテンニの刀が、龍の髭をかすめ空を突く。

——この打鬼棒からつながってる刀を捕まえたんでやすね。

ケイキョの念がそう説明する。

この打鬼棒——つまり今ケイキョが黒焦げの手首ごと啜えている棒のことだ。

リョーマは尻尾でテンニの刀をはたき上げた、と思ったが敵もその攻撃を讀んでいたらしく素早くかわし、地に着くなり蹴って後方に飛び退く。

ぎん

鎖が、空中で真っ直ぐに張られた。

一方の端には降妖師テンニ、そしてもう一方にはその手首を啜えるケイキョがいる。

ごう

リョーマはテンニに向けて再び焔を吐く、がテンニはケイキョとの間に鎖を張ったまま飛んでかわす。

幾度か焔で追ううち、テンニは出し抜けにケイキョのいる方へと飛んだ。

はっと鼬は手首を啜えたまま身構えた。

降妖師は飛びながら頭上に刀を振り上げた。

「ケイキョ」リョーマは「さま」をつけるのも忘れ叫んだ。

今焔を吐けば、それはケイキョまでを呑み込んでしまう。

茶色の細長い体は、まるで迫り来る刀の周囲に巻きつくかと思う動きでその刃をかわし、同時に首をぶん、と振った。

テンニの手首が鎖越しに握ったままの打鬼棒で、テンニを打とうとしたのだ。

「くっ」テンニもまた紙一重で体をかわし、さっと飛び退いた。

「惜しい」リョーマはまた叫んだ、がすぐに焔で降妖師を追う。

またしてもテンニは鎖を張ったまま円周上を飛び逃げ始めた。

だがその動きがついに止められることとなった。

それはコントクとジライの兄弟が、ケイキョとテンニの間に渡された鎖を二足がかりで捕まえたからだ。

テンニはたたらを踏み、瓦礫の上で踏みとどまった、だが三足もの力には到底太刀打ちできず、砂煙を上げてずるずると引き摺られた。

打鬼棒は鼬の口にある、そのため土地爺コントクも今は恐れる必要などない。

先刻の不甲斐なき様をさらしてしまった事への詫びも込め、またそんな姿をさらさせたテンニへの憎しみも強く、コントクは黒焦げの元降妖師の体を捻じ切らんと、鎖より手を離しテンニに飛び掛った。

その時テンニはあっさり刀から手を離して遥か後方に飛び退いた。

力を合わせ引っ張っていたケイキョとジライは、仰のいてしまった。

「待て」コントクは怒声を浴びせ、テンニを追って走った。

——天心地胆から抜け出る気だな。

走りながら、そう予測する。

そうならば、追って自分も陰陽界に飛び出る。

土地爺の眼は片時も、逃げ去る降妖師の姿を逃さなかった。

そして実際、テンニはふっと姿を消し、続いてすぐにコントクも同じ地点から姿を消したのだった。

「兄さん——」ジライは遥か遠くに眼を細めてそれを認め、ただ眩くことしかできずにいた。だが彼は自分が何をすべきか、すぐに考え始めていたのだ。

——聡明鬼に……陰陽師に、知らせなければ。

「ジライさん」

呼ぶ声に振り向くと、目の前に鼬がおり足許に鎖の巻かれた打鬼棒が置かれていた。

「あっしも追って行きやす」ケイキョは黒い眸でジライを見上げ言った。「こいつを持って、聡明鬼さんと陰陽師さんの所へ行ってくださいえ」

「お前も——」ジライは驚きに目を見張った。

「リョーマさん」次にケイキョは空を見上げ呼んだ。「ジライさんを、山へ乗せて行ってくださいえ」

「わかった」龍馬はすぐに尻尾を地に下ろした。「陰曹地府へ行くのか」

「コントクさんの力になろうなんて大それたことは言えませんが」鼬はぶるっと体を振るった。

「この中で天心地胆を抜けられるのはあっしだけだ。聡明鬼さん達にこのことを、急いで知らせてくださいえ」

「無茶をするなよ」

「精霊王が死ぬわけないけど、死ぬなよ」

ジライとリョーマは大真面目に言葉をかける。

「へい」鼬は肩をすくめ、走り出した。



山は、静かだった。

山賊たちがすべて出払っているからだ。

焚き火もなければ、あちこちに張られた天幕にも人の気配はなかった。

その中で、リューシユンは大理石の上に横たわり空を見上げていた。

空には全体に雲がかかり、もうしばらくすると雨空に変わりそうな色をしている。

石の上には天幕から持ち出された敷布がかけられ、頭の下にも枕が置かれていた。

大気が冷えてきているので天幕の中で休めと陰陽師は言ったが、僅かの変化にも気づくことができるよう、大気の音を聞いていたかった。

それでリューシユンは外、キオウが山賊たちを集め談議していた広場の大理石の上に横たわっているのだ。

「降りそうだな」陰陽師が近づいて来た。「まだここにいるか」

「うん」リューシユンは空を見たまま答えた。「リョーマとケイキヨはまだ戻らないか」

「ああ」リンケイも空を見上げ答えた。「コントクとジライもまだだ。知らせもまだない」

「——無事とは思うが」

「無事さ」リンケイは聡明鬼を見た。

「スルグーンは」

「回復に向かっている」リンケイは腕組みをした。「お前、自分以外の者の心配ばかりしているな」

「当たり前だ」リューシユンは眼を閉じた。「自分がどうなのかってのは、自分で分かるだろう」

「どうだかな」リンケイは眼を細めた。「普段元気な奴ほど、得てして自分が見えていないからな」

「——」

会話が途切れ、しばらく木々の音だけが聞えた。

リンケイは別の大理石の上に腰を掛けた。

「その通りだ」やがて眼を閉じたまま、リューシユンが言った。「俺は、自分が見えていなかった」

リンケイは言葉を返さず、聡明鬼をただ見た。

「俺は、間違っていた」リューシユンは続けた。「肝心なところで、一番してはいけないことをしてしまった」

「——」リンケイは、まだ言葉を返さずにいた。

「いや、違う」リューシユンは眼を閉じたまま眉をしかめた。「逆だ。肝心なところで、一番しなきゃいけないことをしなかった」

リンケイの唇が開いたが、リューシユンの言葉はまだ続いた。

「俺は、テニニを取り込まなきゃいけなかったんだ」

「それは」

「俺はわかっていなかった」リューシユンは眼の上に腕を乗せた。「玉帝に頼まれていたのは、ああいう奴をこそ俺の中に取り込んで、陰曹地府へ行かないようにしろって事だったんだ。閻羅王に力を貸すことができないように」

「あいつは閻羅王に力を貸してなどいないだろう。それどころか閻羅王の首を狙っている」

「だが結果として陽界に打撃を与えることになった——俺があいつを取り込んでいれば、こんなことにはならなかった」

「どちらにしろ、お前が間違っていたのではない」リンケイは首を振った。「それは、俺が思いついたことだ。玉帝さまの傍にあんな奴を送りたくはないだろうとお前に提言したのは俺だ」

「けど俺は」リューシユンは牙を食い縛り、自分を責め続けた。「ちゃんと考える事ができなかった」

「——」

「自分の想いに捕われすぎてたからだ」

「——」

「そのせいで俺は、兄さんとの約束を守れなかった……多分」眼を強く閉じる。「上天から追い出された時と、同じように」

「——」リンケイはまた唇を開いた。「思い出したのか」小さく訊く。

玉帝の金色の髪が山の風になびいていた様が蘇る。

「いや」鬼もまた小さく答える。「思い出してはいない……思い出したなら俺はきっと、狂う」

「——」

それはできません

かつて自分が聡明鬼の記憶を戻して欲しいと頼んだ時、玉帝ははっきりとそう言った。  
それは弟を許さないからではなく、弟の心を守るためだったのだ。

そして自分も、この山であの景色——青龍塔の焼け落ちる景色を見せられた時、もう聡明鬼にそれを思い出させたくないと願った。

——ご主人さま。

リョーマの思念の声が届き、リンケイははっと顔を上げた。

——今ジライを連れて山に向かっています。

——ジライを……コントクは？

リンケイは思念の声を返した。

——コントクは、テンニを追って陰陽界に出て行きました。

——テンニを追って……打鬼棒を持っているのではないのか？

——ケイキョが取り上げて、ジライに渡しました。ケイキョも陰陽界へ行きました。

——ケイキョも？

——はい。天心地胆を抜けるのは自分だけだから、急いでご主人さまと聡明鬼に伝えろと言って。

「どうした」

聡明鬼の声にそちらを見ると、腕の下から片目をのぞかせていた。「リョーマか」続けて訊く



「ああ」リンケイは頷く。「コントクとケイキョが、テンニを追って陰陽界へ出て行ったらしい」

「なんだって」リュージュンは腕を顔から下ろし、上体を起こした。

「打鬼棒はジライが持っているという」

「とはいえ」リュージュンは首を振る。「あの男は油断ならないぞ。一筋縄でどうにかなる相手じゃない」

「そうだな」リンケイは視線を巡らす。

「俺も行く」

「待て」

リュージュンが地に立とうとするのとリンケイが手を挙げるのが同時だった。

「止めるとは思ったが、俺は行くぞ」リュージュンは構わず立ち上がる。

「だがあいつがこのまま陰曹地府へ行くとは限らんだろう」リンケイも立ち上がる。

「どういうことだ？」リュージュンは眉を寄せる。

「天心地胆というのは」リンケイは上を指差した。「空にも存在するのか」

「空？」リュージュンは上を見上げた。「ああ。空にもある」

「戻って来る気かも知れん」リンケイは空を見る眼をまた細めた。



ケイキョは陰陽界の暗い地道を、流れるがごとく走った。

コントクの背が、遥か彼方に小さく見える。

それを追う。

その向こうに、テンニの背が更に小さく見える。

——陰曹地府に……森羅殿に、このまま行くとは思えない。

鼬はそう考えていた。

今の丸腰の状態でおめおめ森羅殿に赴けば、ただ十八層地獄へ即座に墜とされに行くも同じだ

。

その前に奴はきっとどこか、他の天心地胆のどれかから、再び陽界へと抜け出るに違いない。

それはきっと、打鬼棒がその近くに在ると見られる天心地胆だ。

打鬼棒を再び手にしてから、奴は陰曹地府へ戻るのに違いない。

ならばその前に——陽界へと抜け出られる前に、ここ陰陽界であ奴をなんとかせねばならない

。

打鬼棒も斬妖剣も持たぬ今、自分とコントクとで何とかせねば。

無論ここに、聡明鬼やリョーマ、ジライに陰陽師までもがいてくれたなら、それは容易い話だろう。

だが聡明鬼はいない、リョーマもジライも陰陽師も天心地胆を抜けることができない、それであれば、つべこべ文句を言っている暇などない。

自分とコントク、この二足でなんとかせねばならないのだ。

考える内にも、鼬はぐんぐんと二足の鬼たちに近づいていった。

だが同時に、ここ陰陽界からでは陽界を飛ぶリョーマに思念を送ることが出来ぬことを残念に思っていた。

——用心するように、伝えておけばよかった。

そうは思えど、今更つべこべ文句を言っている暇などない。

鼬はひたすら、前の二足との距離を詰めるだけだった。

「戻って、来る？」リューシユンは訊き返した。

「ああ」リンケイは空を見上げたまま答えた。

「陽世に、か」

「ああ」リューシユンを見る。「空にある、天心地胆からな」

「どうして」

「無論、打鬼棒を取り戻す為さ」

「あ——」

「ということは」再び空を見上げ、二指を唇に当てる。

——ジライを狙って来るぞ。

——ジライを？

リョーマが念にて訊き返してくる。

——打鬼棒を持ってるから？

——そうだ。しっかりと守りなさい。

「陰陽師」

リューシユンが呼ぶ。

「何だ」

「俺が打鬼棒に打たれたら、どうなると思う」

「どうなる、って」リンケイは瞬きした。「血となって、流れるのだろう」

「本当に、そうかな」

「何故」

「スルグーンは……消えた」

「そう言っていたな」リンケイは頷いた。

「けどあいつは、まだ生きている」

「——ああ」つまり、雷獣のスルグーンの方だ。

「俺は、どうなんだろうな」リューシユンは、俯いていた顔を陰陽師の方へ向けた。

「——」リンケイは少しの間、返答できずにいた。

「まあいい。行って来る」

リューシユンは背を向け、リンケイが手を挙げると同時、そして声を掛けるよりも速く、ふ、

と姿を消した。

「間違っても、試したりなどするなよ」

リンケイは、聡明鬼の消えた地点に向かって呟いた。



「待て」

陰陽界に出た途端、コントクの叫びを聞いたのだ。

リュージュンはすぐに、その声のする方向にテンニのいることを察し走った。

ざあああ

風の音も今はリュージュンの心に届かず足も止めなかった。

ただ夢中で走った。

そして暗い灰色の陰陽界の中で聡明鬼は、黒焦げになり果てながらいまだ眸には憎悪に満ちた光を湛えている元降妖師に、正面から出会った。

互いに走り寄ろうとしたのも束の間、テンニはいきなり横へと進路を変えリュージュンからもコントクからも遠ざかりはじめた。

「待て」

今度はリュージュンとコントクの叫ぶ声が重なった。

「聡明鬼」

「ああ」

二足の土地爺は目を見交わし軽く頷き合いしてすぐにテンニを追った。

その二足の鬼たちから離れたところを鼬もまた走っていた。

だが鬼たちの後ろを追っているのではない。

鬼たちに並び、だが距離は離れたところを走っていたのだ。

鼬はテンニが、打鬼棒を取り戻しにまた陽世へ飛び出るだろうと読んでいた。

そしてそのために使う天心地胆は、空に浮かぶものであるはずだとも思っていた。

テンニは空中からリョーマの背の上に乗し、その上にいるジライの手から斬妖剣と、その鎖に巻かれている打鬼棒とを取り上げるつもりだ。

そう読んでいたからケイキョは、コントクとは違う道、つまり空へとつながる天心地胆のある所を選んで先回りを仕掛けてきたのだ。

だがテンニは今まで、ケイキョのにらんだ天心地胆のどれにも近寄ろうとしなかった。

鼬が来ていることに気づいているようにも見えない。

とすると、意図してそれらの天心地胆を使わずにいるのだ。

他に何か、考えがあるのだろうか――

その時テンニが、走りながらほんの一瞬肩越しに後ろを振り返った。

「？」

ケイキョは鼬の額に皺を寄せ不審に思った。

だが元降妖師はすぐまた前に向き直った。

そして向き直りざま、口元ににやり、と笑みを浮かべたのだ。

「――」

鼬もまた走りながら自分の肩越しに後ろを振り向いてみた。

灰色の大地と空しか、背後に見えるものはない。

ずっと走って来たから、すべてが後ろに遠ざかっていった。

すべて――

「森羅、殿――」

思わず呟く。

そして鼬は、ハッと前を向いた。

「森羅殿から、一番遠い所――」

鼬は悟ったのだ。

テンニは振り向き、森羅殿から十分に遠ざかったことを確認して満足を覚え、ために口元でニヤリと笑ったのだ。

森羅殿から一番遠い所に来たテンニは今、森羅殿から一番遠い位置にある天心地胆をただ目指して走っているのだ。

それはつまり、上天に一番近い所にある天心地胆なのであった。

「聡明鬼さん、コントクさん」鼬は声の限り叫んだ。「早く、陽世へ。ジライさんの所へ、リョーマさんの所へ」

「ケイキョ？」走りながらリュージュンは声のする方へ顔を向けた。

「あいつも、来たのか」コントクも同じようにする。

「陽世へ、と言ってるな」走りながらリュージュンは眉をしかめる。「何事だ？」

「わからん、しかし」コントクはぎり、と牙を噛み締めた。「あ奴がすぐそこにいるというのに、ここで逃すことはできん」前方の元降妖師の焦げた背を睨み付ける。

「うん……」リュージュンにもコントクの気持ちは自分の気持ちとして同意できた、だがケイキョ、陰陽師がリョーマの次代の主と認めたあの鼬が、必死の声で訴えてくるというのは、た

だ事ではないはずだ。

天心地胆から、今すぐに飛び出すべきなのか。

「それに」コントクは走りながら尚も言った。「ジライ達の所へというが、それはまさにテンニが今から行こうとしている所だろう。ならばこのまま奴を追えばケイキョの言う通り我々もジライやリョーマのいる所へ出るはずだ」

「あ」リューシュンは走りながら天を見た。

確かにそうだ。

このまま走ってゆけば、自分たちもジライとリョーマのいる所へ出るはずだ。  
しかし、ならば何故ケイキョは敢えてわざわざあんな事を必死で叫んだのか？

必死で――

――遅かった。

ケイキョははっきりとそう思った。

テンニの狙いに気づくのが、あまりにも遅すぎた。

鼬に今できるのは、ただ必死で走り、少しでも早く元降妖師に追いつくことだけだった。  
だが――

――遅かった！

鼬がぎり、と歯を食いしばると同時に、テンニはその天心地胆に飛び込んだ。

上天に、一番近いところにある天心地胆であった。



風が冷たくなった。

山が近づいたのもあるが、寧ろ雨が近づいたからだろう。

湿った空気が鼻先に当たる。

リョーマはそういった感覚を受けながらも、辺りを隈なく見渡し続けることを怠らなかった。

天心地胆。

自分にも、それは見える。

黒い淵のようなものだ。

大気の中に突然ぽっかりと、罫のように存在している。

見えるが、それを抜けることはできない。

ケイキョのように、聡明鬼のようにそこを抜け出すことは、どうしてか自分には出来ないのだ

。

ケイキョは精霊王だから出来るのか——

そんな風にも思う。

フラもまた、天心地胆が見えるがそれを抜けることができないからだ。

しかし注意深く見てきたところ、他の精霊達、いわゆる雑霊の中にも、天心地胆を抜けて陰陽界に出て行く者がいくらかはいるようだ。

選ばれた者だけが、抜けられるのか——

しかしそうだとすれば、何をもって、何を根拠として天心地胆の抜けられる、抜けられぬが定まるものなのか。

そんなことを今考えても仕方がないというのは重々わかっているのだが、要するに自分は口惜しいのだと、リョーマはそれもわかっていた。

自分が、天心地胆を抜けられたなら！

ケイキョの後に、ついて行けたなら！

無論それは、鼯に出来て龍馬である自分にできない事を口惜しがっているのでは決してない。

ケイキョ、自分の“次の”主と決めた相手を、近くで護りたいという願いが叶わぬことへの口惜しさだ。

自分の力のなさを痛感してしまうのだ。

リンケイが聞けば、それが物事の理であるから仕方がないのだと、自分に説くだろう。

けれどそれではなかなか納得がいかないのだ。

なぜそんな理があるのか。

なぜ自分は天心地胆を潜り抜けられないのか。

若き龍馬はいらいらとしていた。

いらいらとしながら、迫り来る天心地胆からは身をくねらせ遠ざかりつつ、飛び続けた。





テンニが飛び出してからひと呼吸もする間があっただろうか、それほど短い時の後に、リューションも、そしてコントクも同じ天心地胆から陽世へと飛び出した。

何も、なかった。

「——え？」

聡明鬼は、自分が間違えて違う世界に出て来てしまったのかと思った。  
そこには山も海もなく、人も鬼もいず、光すらもなかったのだ。

何もない、闇の世界だった。

と思ったのは、ただ一瞬の間だけだった。  
光は、すぐに目に届いた。  
蒼い光だ。

リューションはぱちぱちと瞬きし、そしてすぐに、自分が地に足を着いておらず、まっすぐにもすごい速さで落下してゆきつつある事を知った。

「うわあ!？」

叫ぶ。

だがその声すらも、あっという間に上方へ置き去りとなり自分の耳にすら届かない。

「どこだ、ここは!？」

上天にいちばん近い所です。

はっ、と目を見開く。

足元から轟音を立てて空気がぶつかって来る。

弟よ。

落ちながら、上を見上げる。

玉帝？

だがその姿は見えない。

声として、それが聞こえたのかも判らない。

それはもしかすると——

さようなら、我が弟よ。

「兄さん」

眩くと、眸から涙が溢れ、それもあっという間に上方へ振り払われていった。

そうだ。

そうか。

俺はかつて、これと同じように、上天から落ちたのだ。

スルグーンと共に——

「見えたぞ」

コントクが頭上で叫ぶ。

またしてもリューシユンはハッと目を見開き、今度は落ちてゆく先、足下を見た。

奇妙に湾曲した形で緑と茶の色をした大地、真っ青な海、それらが遥か遠く見えた。

そして目を凝らしよくよく見る先に、長く伸びる龍と馬の合わさった体が身をくねらせながら飛ぶのが見えた。

「リョーマか」

そう認めた、だがなんと遠いのだろう。

リューシユンは目をすがめた。

——テンニは？

焼け焦げた降妖師の姿を探す、だがそれはなかなか見つけられずにいた。

遥か下に見えるリョーマ、その背に乗っているであろうジライ、テンニの狙いは確かにその二足のはずだが、今風にぶつかられ続けている鬼の目には、その忌まわしき姿が入って来ないのだった。

——なんだってあいつは、こんな……

そう思うがその答えはすぐにわかった。

ただ落下するだけしか出来ぬ今の状況であれば、リューシユンもコントクも、決してテンニに追いつくことができない。

己の脚で走るのであれば、時間さえあれば追いつくことも可能だったはずだが、今この時、いかな聡明鬼であっても、ただ落ちてゆくに身を任せることしか成し得ぬのだ。

——それでケイキョは。

テンニの狙いを見定めた颯は、すぐにリョーマとジライのいる所、こんな上空でなくもっと地に近い所へ移って、テンニよりも先に二足の許へ辿り着けと、そう言いたかったのだ。

——くそっ!!

悔しさに牙を剥く鬼の目に龍馬の体はぐんぐんと近づき、そして突然その黒い点が、龍馬と鬼の目の間に現れた。

元降妖師の姿が、そこでやっと認められたのだ。

「テンニ」

声を限りに叫ぶ。

答えるかのようにテンニは焦げた顔を上に向け、そしてにい、と笑った。

それから降妖師は両腕を左右に大きく広げて、若き龍馬の背の上に真っ直ぐ降りて行ったのだ。

最後にリューシュンは、こちらを見上げ、テンニと自分とその兄の姿を同時に見つけ、

「兄さん」

と叫んだジライの声を聞いた。



——リョーマさん！

唐突に、ケイキョの叫ぶ声がした。

はっ、とリョーマは龍の首を左右に振った、だがその声の主の姿は見えなかった。

——上でやす！

その思念の聲が届くと同時に、

「ぐふッ」

自分の馬の背の上でジライのくぐもった声があると、どすんと重いものが突然飛び乗って来た感触とが同時にあった。

はっ、と再び息を呑み振り向く龍の目に、体半分を斬り取られたジライの腰から下のみが映った。

「ジライ——」

リューシユンは、言葉を失った。

上から、それを見ていた。

両腕を拡げながら龍馬の背に乗った元降妖師は、その瞬間ジライの体を真二つに斬ったのだ。それは常人の目に留まり得る動きではなかった。

馬の背に降り立つ寸前、その足の爪先で、自分を呆然と見上げるジライの、微かに力緩んだ手から斬妖剣を引っ掛け蹴り上げ、着くと同時にその刃を横に薙ぎ払ったのだ。

リューシユンがリョーマの背に降り立った時には、テンニはまんまと姿を消し、ただジライの、腰から下だけの骸がそこに座っているだけだった。

斬り落とされた上体の方は、後方に吹き飛んだのだ。

「ジライ!!」

リューシユンはしかし、逃げたテンニを追う事をしなかった、どころかそんな事を思いもしなかった。

「ジライ!!」

聡明鬼はただ、信じられぬ姿となり果てた仲間の名を、声の限りに叫んだ。

「ジライ——」

かすれた声に、はっと振り向く。

コントクが、リューシユンのすぐ後ろに降り立っていた。

「リョーマ、止まってくれ」次にリューシユンのした事は、龍馬に停止を依頼することだった。

「ジライの鬼魂を、呼ぶ」

若き龍馬はまったく疑うこともなく、すぐに空中でとぐろを巻くようにして飛ぶのを止めた。

——ジライ!!

直ちにリューシユンは、いつも鬼魂に呼びかけるやり方と同じようにして、仲間の名を叫んだ。

——こっちに、来い。俺の中に、入って来い!!

匂いは、ない。

だがリューシユンは、信じていた。

信じて、疑わなかった。

ジライは、きっと近くにいる。

近くに——自分のところに、来てくれる。

——ジライ。

上天へ——

仲間を、共に闘ってきた友を、地獄へなど送り込むことには微塵も思い至らなかった、上天へ、玉帝のもとへ。

ただその想いしかなかった。

それは、兄に自分の友を見せたかったからかも知れない。

否、そうでなくともよい。

ジライを、上天へ。

ただ、ジライを上天へ上げてやりたかった。

——聡明鬼。

言霊が、届いた。

「ジライ!!」

顔が、喜びに輝くのを自分でも感じる。

思い切り、空気を吸い込む。

だが匂いは、まだ届いてこなかった。

「ジライ、早く俺の中に入れ」

呼びかける。

——聡明鬼。俺は、上天へは行かん。

「え」

リュージュンは、ぽかんと目を丸くした。

——もちろん、そうさ。俺はこのまま鬼となり、兄さんと共にあいつを、テンニを倒す。

ジライの言霊は、どこか笑っているような、何か楽しげでさえあるような、雰囲気だった。

「で——でも、けどお前」リュージュンは、戸惑った。「鬼になるって」

——お前とも同じ、鬼になるんだ。

ジライの言霊はいよいよ、くすくすと笑っているかのような、幸せそうな雰囲気になる。

「でもお前、まずは閻羅王のところに行って——」

リュージュンは、ますます困惑した。

「下手をすると、十八層地獄へ落とされるぞ」

——大丈夫さ。俺はそんなに、悪行を働いたこともない。こう見えても、まっとうな降妖師として仕事をしていたんだぞ、テンニとは違って。

「そ、それは無論知っているが」リュージュンはきよろきよろと辺りを見回す、だがジライの鬼



魂の匂いはどこからも漂って来ないのだ。

——心配するな。

ジライの鬼魂が、ふっ、と笑う。

——悪鬼になど、ならんよ。俺も散々手こずらされたからな。あんな奴らの仲間になど、なるものか。

「そ、それも無論わかっている、けど」リューシユンは、きよろきよろと辺りを見回すことしかできずにいた。「何処にいるんだ、ジライ!!」

「ジライと、話しているのか」コントクが背後から、呆然と訊く。「ジライの、鬼魂と」

「あ——」リューシユンは振り向いた。「ああ。ジライは、上天へは行かないと言っている。鬼となって、あんたと一緒に闘うんだと」

「そうか」言ってからコントクは、顔全体で笑った。「なら、いい。ジライに、陰曹地府で会おうと伝えてくれ」

「え——」リューシユンの方が、こんどは呆然となった。「いいのか」

「当たり前だろう。俺と同じ、鬼となってくれるというのならば、大歓迎だ」コントクは力強く頷く。「俺たちも、早く陰曹地府へ行こう」

——待っているよ、兄さん。

ジライの言霊も頷いているのを、リューシユンは感じ取った。

そうして鬼魂は、消えた。

鬼差が迎えに来たのか、それともジライ自身が天心地胆を潜り抜けて行ったものか、リューシ

ユンには判らなかつた。



「ジライガ」リンケイは呟き、眸を閉じた。

リョーマからの報せだ。

まずはコントクを想い、それから聡明鬼を想う。  
それぞれにどのような心情に達するのだろうか。  
そしてすぐにそれらは見えてくる。

そうなる、次に自分がどう動くべきであるかが見えてくる。

その思惟の流れに、今まで特に気にも留めていなかった或る想いがふと、絡み付いてきた。  
気にも留めなかった——というよりは、敢えて取り構わずにいたのかも知れない。  
または、見えぬ振り、をしていたのかも——

——閻羅王に、力を貸す者——

「聡明鬼」呟く。「ここに、戻って来い」

念が通じる相手ではない。

名すら互いに名乗っていないのだから、何も通じるものがあるはずはない。

あるのはただ、共に幾足かの鬼どもを懲らしたという経験のみだ。

それはたまたま、その時同じ空間に、または近い空間に居合わせ、そしてたまたまその悪鬼どもを懲らす必要を感じていたからに他ならない。

もし自分が、或いは向こうがそこに居らず、居たとしてもその必要を感じずにいたならば、決して共に闘うことなどなかつただろう。

確かに、そう思う。

だが今リンケイは、聡明鬼に、会って話したいと思っていた。

会って、話さなければならぬと感じていた。

それはつまり、

——閻羅王に、力を貸す者。

それが誰なのか、判った気がするからだ。

しばらくの間、何も考えられなかった。

これからどうすればよいのか、何処へ行くべきなのか、何を目指すべきなのか——

——俺は、無能なのか。

ただそんな想いだけが、頭の中ぼんやりと漂うだけだった。

「聡明鬼さん」

呼ばれ、はっとする。

声のした方——背後の足下を見おろすと、ケイキヨが黒い眸でリュージュンを見上げていた。

リュージュンよりも先に、鼯はリョーマの背に降り立っていたのだ。

だがリュージュンと同様テンニに追いつくことはかなわず、鼯が降り立った時すでにジライは還らぬ様となり果てていたのだった。

「陰陽師さんが」

「ああ」すべてを聞くまでもなく、リュージュンは頷いた。「山へ、戻ろう」

リョーマがすぐに飛翔を再開し、馬の背に乗る者たちの頬を風が再び撫でる。

「そうだな」コントクも頷く。「あの山に、ジライの骸を埋めてやりたい」

「あの山に？」リュージュンは少し驚いた。「あそこで、いいのか？」

「ああ」コントクはもう一度頷いた。「麓の墓場に埋めたとしても、もしかしたらこの先——鬼どもに、荒らされてしまうだろうと思う」

「——」

「聡明鬼」コントクは厳しい顔付きでリューシユンを見た。「人間と鬼の——陽世と陰府の、これから戦になるだろうと俺は思う」

「——」

やっぱりあんたは、鬼なのか。

人間の叫び声。

自分を神と呼び——呼びたがり、救って欲しがり、すがりつきたがっていた、人間たち。

みずから武器を手にとろうとはせず、ただ守ってくれと頼るだけだった、人間ども。

死んでからも、われ先にとリューシユンに痛みと苦しみを投げて寄越し、早く上天に上げてくれと求めるばかりの、人間ども。

いいかげんにしろ。

怒鳴ったのはリューシユンではなく、キオウだった。

だが本当はリューシユン自身も、そう怒鳴りたかったのかも知れない——きっとそうだ。

ふざけるなど。

いいかげんにしろと。

自分以外の鬼どもが、キオウの他の鬼どもが、そう思わないはずがあるだろうか。

今日の前にいる、土地爺コントクでさえも。

「そうだな」リューシユンは眼を閉じた。「戦に……なるだろう」

哀しい、こった。

リューシユンはまた、そう思った。

だが哀しい、というだけで済むものではないのだということも、わかっていた。

玉帝の心配していたことが、まさに今、現実になろうとしている。  
自分には、止めることができなかつた――

「閻羅王に、力を貸す者」

ハツとして、眼を開ける。  
それを声にしたのは、ケイキョだった。

「何――」

「陰陽師さんが、そのことを話したいようでやす」 鼬はリョーマに伝えた。

「閻羅王に、力を貸す者――まさか」 ジライの、下半分となった骸を見遣る。



「リンケイさま」 リョーマの念が、叫ぶように呼んだ。「嫌だよ」

「はは」 リンケイは、苦笑を洩らした。「さすがに、お前には一目瞭然といったところか」

「嫌だよ」 リョーマは龍の首を振った、それが念の上からも伝わった。「ご主人さま――リンケイさま」

「今後はケイキョを、主人として崇めなさい」

「い」 リョーマは言いかけた、だがその言葉は止まった。

「嫌だ、とは言えぬだろう」 リンケイは微笑んだ。「リョーマ……達者で、暮らせ」

「ご主人様」龍馬は、半分泣きベそをかいているような念を、飛びながら送ってきた。

リンケイは、念のやり取りをそこで断った。

共に暮らしてきた、幾年もの歳月を彩る景色が脳裏を過ぎる——過ぎろうと、する。  
だが今は、もっとやるべきことがあるのだ。

リンケイは眼を閉じ、それを開けた。

——俺はことを、やらなければならぬのだ。



ジライの埋葬は、コントクとケイキョ、そしてリョーマに任せた。

リューシュンは真っ直ぐ、陰陽師の待つ天幕まで独り走った。

陰陽師が何を話したいのか、もうすでに分かっていた。

ジライがテンニに斬られたということは、すでにリョーマから念を通じて伝わっているはずだ

。

その、テンニに斬り払われ鬼と成ったジライ、彼こそが、閻羅王に力を貸す者だというのだろう。

つまり陰曹地府においてテンニを捕らえ、抑え、あ奴の“閻羅王を斃し地獄の王と成り上がる”という野望を、打ち砕く——そういう意味において“閻羅王に力を貸す者”だとする、その考え。

——絶対に、違う。

リューシュンはそう信じて疑わなかった。

天幕の中に陰陽師はいなかった。

ならばと、自分がずっと寝そべっていた広場の大理石目指して走る。

果たして陰陽師はそこにいた。

リューシュンが駆け寄るのに眼を上げ、にこりと笑いかける。

「来たか、聡明——」

「ジライじゃない」何も聞かずに切り出す。

「——何がだ」

「閻羅王に力を貸す者がだ」半分息を切らしながら、リューシュンは陰陽師の眼の前に立ち止まる。

「無論、ジライではない」陰陽師は静かに頷いた。

「コントクでもない」首を振る。

「確かに、コントクでもない」頷く。

「言っとくが、俺でもない」

「お前でもない」

「じゃあ」

「俺だ」

「——」

風が鳴り、葉がざわめき、鳥が囀り羽ばたく。

その中で、二足は言葉もなく互いを見ていた。

「俺はここ最近、自分でも意外なことを考え込んでいる時があった」やがて、リンケイは話し出した。



「——意外な、こと？」リューシュンは呆然と訊き返した。

「うん」リンケイは頷いた。「まず、早い内にリョーマの次なる主を見つけたいと思った」

「あ」リューシュンは瞬きした。「ケイキョ、か？」

「まあ、わざわざ俺があいつを選んだわけではないがな。だがリョーマ自身が奴を気に入り、仕える気になってくれたことで、俺は大いに安堵した」

「——そう、か」

「そして俺は」リンケイは続ける。「父と母のことを、思い出した」

「え」リューシュンはまた眼をぱちくりさせた。「お前の、か」

「ああ。俺自身の、幼き日のことをな——リョーマと出会った日のこともだ」

「そう、か」リューシュンはつい、それはどんな経緯なのか知りたくなかったが、問いかける事は憚られた。まだこの陰陽師には、話したいことが残っているはずだ。

「決定的なのは、俺がお前に提言したことだ」リンケイはさらに続けた。「テンニの鬼魂を上天に上げさせまいと、お前を洞窟へ連れて行った」

「あれはお前」リューシュンは首を振った。「俺を、立ち直らせようと」

「その結果が、今のこの状況だ。玉帝さまが危惧なされていた、一都（いちぼう）の境の混乱」

「違う」

「だがそれらを凌駕し、何より俺の中に強く根ざす思いがある」リンケイは両膝に手を突き言った。「それは意外でもなんでもなく、俺の本心から現に想っている、想いだ」

「——」リューシュンは多少気圧されるものを感じた。「何だ」訊く。

「俺は」リンケイは、真っ直ぐな目を聡明鬼に向け答えた。「陰曹地府に、何故自分だけが行けぬのかと、いつも思っていた」

「——」碧の眸を揺らし、聡明鬼は確かにいつもそんなことを口にしていた陰陽師の姿を思い起こしていた。

「いつもそれを、口惜しく思っていた」

「そ」

「俺は、陰曹地府へ行きたいのだ」

「——」

「そういう、ことだ」

「そういう、ことって」

「俺が行く」リンケイは言った。「俺が陰曹地府へ行き、テンニから閻羅王を守り斃させぬ」

「——」

また、風が鳴る。

葉がざわめく。

鳥の声は遠くから響き、羽ばたきは今や聞こえない。

「閻羅王に、力を貸す者」リューシユンは誰かに聞かれるのを恐れるかのごとくか細い声で、呟いた。「それが.....お前のことだったってのか、陰陽師」

「まあ結果としては、そうだ」

「なんてこった」

「よかった」リンケイは微笑んだ。

「何が？」リューシユンは眉をしかめた。

「いつものお前らしい、応え方だ。安堵した」

「そんな事を言ってる場合じゃないだろう、お前、お前がまさか、そんな」リューシユンは首を振り、多少言葉をもつらせながら言い立てた。

「それでそういうことだから、俺は晴れて陰曹地府へ行く」

「駄目だ」リューシユンは叫んだ。「どこが晴れてなんだ」

「確かに“晴れて”は失言だな。すまん」リンケイは苦笑したが、すぐに真顔に戻った。「しかし今は、そうするしかないだろう。このままでは陽世と陰府の戦となり、人間の世界は凄惨なものになる。玉帝さまの仰せになっていた状況そのままに」

「そうだろうが、しかしそれは」

「一刻も早くテンニを屠り、これまで通り閻羅王による管理を維持させねばならぬ。陰府の存続を守る為、つまりは陽世の存続を守る為に」

「——」リューシユンは黙った。

頭の中が、ぐるぐると回転しているようだった。

「そういうことだから」リンケイはもう一度言った。「俺は、陰曹地府へ行く」

「——陰陽師」リューシユンは呼びかけた、だが次の言葉を口に出すことができなかった。

風が鳴る。

葉がざわめく。

鳥たちは埒（ねぐら）に戻ったのか、もはや鳴いてはいない。

いつの間にか、辺りは夜の闇に包まれていた。

「次の新月の晩」リンケイは静かに告げた。「俺の屋敷に来てくれ。そこで俺は、俺に呪いをかける。それを手伝って欲しい」

「な」リューシユンは言葉を詰まらせた。「ん、だって」

「呪いだ」リンケイは繰り返した。「俺を生きたまま、陰曹地府へ送るためのな」

「——」リューションは、完全に言葉を失った。

「死んで鬼となってそこへ行けば、打鬼棒に触れ血となって流れるという危険が待っている」リ  
ンケイは説明した。「生きたまま行けば、その恐れはない」

リューションは、陰陽師の眸が暗闇の中でぎらりと光を放つのを見た。

この男は、本気だ。

心の底から本気で、それを言っているのだ。

心の底から本気で、自分が今為すべきことを語っているのだ。

「俺は、テンニと互角に渡り合える」

ざああああ

ジライにとっては初めて聞く音だった。

陰陽界に吹きすさぶ、風の音。

だが本当の風、つまり大気の動くがゆえに生まれる音ではなく、無数の鬼魂たちの無念の声、溜息が作り出す、風の音だ。

そこまで無念に想うような生き様など送らねばよかったものを、と思うところはある。

もっと自分の心のままに、思うさま想いのままに、好きなように思い切り生きていれば、こんな無念の声で風を生むなどせずともよかろうに、と。

だが、それが出来るものであればそもそも、上天など必要のないものなのだろう。

陰曹地府も——十八層地獄も。

たとえ法に背き悪事を働いて人を騙し金を奪り取るような生き様をする者であっても、必ずしもそれがその者自身の“想いのまま”の生き様であるとは限らぬのだ。

その者にとってはもしかするともっと別の、歩みたき道があったのやも知れぬ。

ジライ。

不意に聞こえたその声は——言霊であろうか——決して嘆きの声ではなく、ただジライを呼び止めるかのごとく聞こえたものだった。

ジライは立ち止まった。

ジライ。

それは、もう一度聞こえた。

ジライは、右を見、左を見た。

無論のこと声の主——言霊の主の姿は、眼に映らなかった。

だがジライにはすぐにわかった。

それは自分に向けられた、母の——あるいは祖母の声、だった。

「母さん——婆ちゃん」ジライは声に出して呼んだ。

ジライ。

声はジライを呼び、そして笑った。

笑いながら、ジライを呼んだ。

ジライにはそれが判った。

「母さん——」

ずっと、墓にも参らなかったな——そう思った時、ジライは手を差し伸べていた。

「ごめんよ、母さん、婆ちゃん」

ざあああああ

肉親の声は、風の音に吞まれて消えた。

「母さん」

呼べど、応えは二度とジライに届かなかった。

兄ちゃん。

今度は、別の声——言霊が届く。

それは、妹のものだった。

遠き日、幼くして病に亡くなった、妹だ。

兄ちゃん。

あどけない子供のままの声が、呼ぶ。

大人に成ることのできなかった、哀れな妹。

ホンウイ。

呆然と首を巡らす、だが当然のこと妹の姿など見えない。

瞼の裏には、まだ元気にはしゃぎまわっていた頃の妹の姿が浮かぶのだが、眼を開けてもそれはどこにも見えないのだ。

兄ちゃん。

妹は呼び、笑う。

——ああ、そうか。

ジライは納得し、頷いた。

自分は、死んだ。

人として、テンニの剣にぱつぱりと斬られ、ほんの瞬きする間に殺されたのだ。

その後すぐ、聡明鬼に「俺の中に入れ」と呼ばれ、だが自分はそれを断った。

ただまっすぐに、天心地胆を目指しそこから陰陽界へと飛び出したのだ。

森羅殿に、行くために。

ただひたすらに、がむしゃらに、森羅殿へ行きテンニを倒す、それだけを目指してきた。

自分の生死はその途中に起きた、単なる過程のひとつぐらいにしか見えなかった。

そう、自分は生きていようが死んでいようが関係なく、テンニを倒さねばならないのだ。

だから死んだ時——つまり今だが、普通ならば起きるはずの、自分の来し方を振り返るということ、忘れていたのだ。

それが、陰陽界に来てから遅ればせながら起きたのだ。

ジライはそれから、さまざまなものを見た。

陰陽界の中にぽつんと佇んで、己の中に去来する自分の生きてきた道、見てきた風景を味わった。

コントクとの出会い。

鬼でありながら人の書いた書を読み、理解し、歩み寄ることにやぶさかでないその土地爺に、当初は戸惑いを覚えたものだった。

何か、企んでいるのではないのか——そうとさえ、疑ったのだ。

智慧を身につけ、人と並び、人を出し抜いてその足許にひれ伏させる——人の地を治める土地爺であれば、そのように想うことに不思議はないといえ shouldn't be.

だが何か、他の土地爺とはちがうものをジライはコントクに感じた。



それが何なのかわからぬままコントクと接し——それは主にコントクの側から積極的にジライとの親交を求めてきたからだ——その土地爺の心根に、何らどす黒く淀むものなど見えることもなく、むしろ心迷う時や疲れた時、家族以上に心配し寄り添ってくれるコントクに、いつしかジライは疑いを解き心の扉を開いていったのだ。

兄さん。

いつの間にか、ごく自然に、ジライはコントクをそう呼ぶようになっていた。  
コントクの方も、特にてらいや気兼ねをすることもなく、ごく自然に呼びかけに応えた。

それはつまり、二足が義理の兄弟となったということだ。

人と鬼、という垣根など、もうどうでもよかった。

——兄さん。

ジライは心の中で、義理の兄である鬼を呼んだ。

——俺は先に、行っているよ。

兄も、すぐに来てくれるだろう。  
弟の元降妖師はそう信じて疑わなかった。

そしてジライは、再び歩き出した。

ざあああああ

陰陽界の風の音の中、ジライは森羅殿に向かって進みだしたのだ。



ぼんやりと、空を見る。

そうし始めてから、どれだけ時間が経ったのだろうか、わからない。

「俺に、呪いをかける」

陰陽師が言ったその言葉が、幾度となく脳裏に響き渡る。

今リューションは、自分の治める町の役所に来ていた。

そこは本来の仕事をする場所だが、こうしてやって来るのは随分久しぶりに思える。

とはいえ元々、そこに留まって書類に目を通すだとか判を押すだとか部下に指示を下すだとか、そんな仕事に多く時間を割くような土地爺ではなかった。

多くは町に出向いて——というよりは町中をぶらついて、住民とくだけた話をしたり、作業に手を貸してみたり、時には使い走りや子守までも請け負ったりしていたのだ。

争いをしている者同士の仲裁を、通りがかりにしてやったこともある。

両者の言い分を聞き、どこで互いに折り合いをつけるべきか提案し、考えさせ、結論を出させ、和解の証人として書をしたため印を押す。

リューションは、人が好きだった。

人が好きだからこそ、人の世を平和に保っていてやりたいと願った。

そのために、時には真剣に考察しあるものは切り捨てあるものは拾い上げ、きちんとものごとを整理する必要があると思っていた。

あるものを切り捨てるということは、ある人にある願いを諦めさせるということにつながる。

その人にとってそれは、身を切られるほどの痛みと苦しみ、哀しみを伴うものであることも多い。

そんな痛みを人に味わわせることは無論リューションにとっても厳しく辛いことだった。

だが、人の世すべてをきちんと整理し、平和に穏やかに健やかに保つためには、ある人のある

望みが断たれることに眼を瞑らねばならぬ場合もあるのだ。

ふう

空を見上げたまま、溜息をついた。

「何か気懸かりなことでもあるんでやすかい、旦那」

背後から不意に声がかかり、はっとして振り返る。

薄茶色の毛並みを持つ、鼬——ケイキョだ。

「ああ……いや」リューシユンは瞬きを何度か繰り返しながら答え、それから少し笑った。「お前、昼飯食ったのか」

「いや、あっしは別に」ケイキョは尻尾をくるりと回した。「旦那こそ、腹が減ってるんじゃないんでやすかい」

「ああ……じゃあ、一緒に何か食うか」リューシユンは言って、うん、と伸びをした。

「陰陽師さんは、あれから？」

「——」

鼬がごくさりげなく挟み込んできた問いに、リューシユンは伸びをしたまま固まってしまったのだ。

俺に、呪いをかける。

そう言った陰陽師の言葉を、このケイキョも草葉の陰で聞いていた。

その後、返事も出来ぬままのリューシユンをそこに置き、陰陽師は立ち去った。

それきり、顔を見ていない。

次の、新月の晩――

その夜、自分の屋敷に来てくれと陰陽師は言い置いた。  
そこで彼は、彼自身に呪いをかけ陰曹地府に自らを送るというのだ。

リューシユンは、是とも非とも、応えを返せなかった。

だが間違いなく次の新月の晩、リューシユンが訪ねてくるだろうことを陰陽師も承知の上でいることだろう。

自分は、行かねばならない。

リューシユンにしても、そのことは承知の上だった。  
だがいまだ、それを聞いたことが幻想だった、幻聴であったのではないかと、心のどこかでは思うことも確かなのだ。

確かに、鬼となることなく人の身のまま陰曹地府へ行きテンニと闘うことができるならば、打鬼棒を怖れることなく互角に渡り合える。

それは、確かにそうだ。

だが――

「生きたまま陰曹地府へ行って、また陽世に戻って来られるものなんですかい？」

疑問を口にしたのはリューシユンではなくケイキョだった。

「――わからん」

リューシユンにはそうとしか答えられなかった。

「そんなこと……そもそも生きたまま陰曹地府に行ける方法があるなど、俺も知らなかったか

らな」

「へえ……あっしも、初でさあ」ケイキヨは鼬の首を縦に振った。「さすがの、物知りさんでやすねえ」

「まあ、大丈夫さ」

リューシユンは、何の確証もなきままそう口にし、そんな自分に内心で驚いた。

「あいつは、きっと大丈夫だ」

「……それでやすかい？」鼬が問う。

「ああ。大丈夫だ」リューシユンはケイキヨを見下ろし、頷いた。「何があっても、陽世に戻らせる。俺が必ず」



小さな黒い仔犬が、膝の上に丸まって眼を閉じている。

リョーマだ。

元は巨大な龍馬だが、普段は仔犬に姿を変え無邪気に駆け回り遊んでいる。

だがここ最近はずっと、リンケイの許から離れようとしなかった。

常に足元にまとわりつき、腰を下ろせばすぐに膝の上に乗ってくる。

頭を撫でたり、腕に抱き上げたりしてやると、眼を細め至福の表情で鼻をこすりつけてくる。

「嫌だ」

もう、そうは言わなくなっていた。

言わなくなつて、くれていた。

だがリンケイには痛いほど分かっていた。

リョーマが、体全体で「嫌だ」と思っていることを。

リンケイも、何も言わなかった。

ただリョーマの頭を撫で、耳を擦り、うっとりとした気持ちよさそうにしている仔犬を黙って見下

ろしていた。

ずっと、そうだった。

息を吸えば自分が居り、息を吐けばリョーマがいる。

そんな、間柄だった。

特にいちいち言葉として表す必要もなく、顔を見、眼を見交わせば、互いに何を想っているのか、何を望んでいるのかが己がこととしてわかっていたのだ。

その点で言えば、聡明鬼との関係とは真逆であった。

あんなに、喧々諤々と言葉を投げ合い論じ合い反駁し合い、そんな中で共に敵と闘う、というような間柄は、リンケイにとって初めてのことだった。

「おれ、本当は口惜しかったんだ」

不意に、膝の上でリョーマが呟く。

「ん？」訊き返す。「口惜しいとは？」

「あの聡明鬼と出会ってから、リンケイさまはすごく楽しそうだった」リョーマは薄く眼を開けた。「おれと一緒にいるより、聡明鬼と一緒にいる方が楽しいのかなって」

「——」リンケイは何も言えず、仔犬の頭を撫でつづけた。

「おれ」リョーマはまた眼を閉じた。「焼きもちを、焼いてた——聡明鬼に」

リンケイは、ふ、と笑い、リョーマの垂れた耳をそっとつまんだ。

確かに、そうだろう。

そうなのだろうと、リンケイも知っていたのだ。

「聡明鬼は」リョーマは寝そべったまま小首を傾げた。「龍馬、だね」

「うん」リンケイは頷いた。「そうだな」

「どんな龍馬なんだろう」

「さあな」リンケイはそう答えたが、脳裏に浮かぶ一頭の龍馬の姿があった。

スルグーンが洞窟で描いた、あの龍馬だ。

「龍馬なのに、陰曹地府へ行ける」リョーマは続けた。「ずるいよ」小さくそう言うと、自分の前足の中に鼻を突っ込む。

拗ねたような仕草だ。

「出来ることならばお前も懐に入れて」リンケイは微笑んだ。「一緒に、陰曹地府へ連れて行きたいな」

リョーマは顔を埋めたまま、何も言わなかった。

けれどその小さな体が、細かく震えるのをリンケイは手に感じた。

——言わずともよいことを、言ってしまったかな。

見下ろす眸に移る仔犬の顔が、ぼやけて揺らめいた。

コントクは天心地胆を抜けた後、特に急ぐこともせずゆっくりと歩いた。  
急いだからといって、すぐに弟に会えるものではない。

弟ジライはまず閻羅王の許へ行き、生前の行いを検分され、死因を確かめられ、しばらく待たされた後で転生の道をゆくか十八層地獄へ墮とされるかの審判を下される。

無論コントクに、よもや弟が十八層地獄へ墮とされるのではないかなどという心配は微塵もなかった。

ジライ、あれほどに優れた降妖師、人の世に災いをもたらす悪鬼どもを何足となく駆逐してきた男だ。

それも欲をかって不当なまでに高額な報酬を求めたことなど一度たりとてない。

それだからこそ、自分はジライともっと近づきたい、親しくなりたいと望んだのだ。

信用し、信頼のできる人間だと、判断したのだ。

そして、尊崇も。

「兄さん」

初めてジライがそう呼んだ時、面映い気持ちがまったくないこともなかったのだが、コントクはジライの呼びかけに自然に答えていた。

生まれてからずっと一緒にいた、まさに本当の兄弟のごとく、二人は信頼し合い支え合ってきた。

やがて、行く先の灰色の大地の上に、森羅殿の姿が浮かび上がってきた。

――もしかすると、テンニの奴もあそこへ向かっているのかも知れない。

胸中にその考えが湧く。

不安の雲がたちまち拡がるが、コントクはそれでも急ぐことなくゆっくりと歩いた。



森羅殿、遙かにしえより陰府の鬼も陽間の人も、すべての者がその行く末を任せてきたあの場所が、きのう今日鬼と成ったばかりの新参者などの手でどうにかなるはずがない。

決して、森羅殿は揺るぎはしない。

そこには閻羅王が居り、牛頭馬頭が居り、無数の鬼差どもが居り、そして此度鬼の仲間入りをした我が弟ジライが居る。

そして自分も。

聡明鬼も。

――これからあの場所で、我々の闘いが始まるのだな……惜しむらくは、陰陽師殿の居ない事だ。

コントクは歩きながらそう想った。

――だが彼には陽世を、龍馬たちと共に守ってもらえばいい。

コントクは無論、その陰陽師リンケイが聡明鬼に告げた決意のことを知らなかった。



「先生」

「先生、ぜひお力を」

「我らに力をお貸し下さい」

「共に闘いましょう」

「鬼の手から、我ら人間の手に、この陽世を取り戻しましょう」

「先生」

門の外で呼ぶ声は、朝からひっきりなしに続く。

だが屋敷の主は一切姿を見せずにいた。

「先生の法力で、鬼どもを蹴散らして下さい」

「先生の法珠で、あ奴等をふっ飛ばして下さい」

「先生」

「先生」

――そんなことを、降妖師でなく陰陽師に頼みに来るのだな――

リンケイは筆を進めながら、そう想う。

無論、巷の降妖師たちの元へも挙って人々は力を頼みに馳せ参じていることだろう。

だが今、テンニ、そしてジライという、有力な降妖師二足が鬼と成ってしまったことは、衆人の知るところとなった。

その経緯を知る者がどれほどいるものかは知れぬが、頼みとなすべき降妖師の御大二名が鬼籍にいる今となっては、陰陽師にでもすがるしか道はないのだろう。

リンケイは黙々と、巻紙に筆を走らせ続けた。

長く、それは続いた。

門は勿論のこと、雨戸も障子もすべて締め切っている。

灯りは式神の少年が持ち、リョーマは部屋の片隅で、リンケイの仕事を邪魔せぬよう丸まっている。

部屋の中は静かで、ただ外からひっきりなしに呼ぶ人間たちの声だけが遠く小さく届いてくるのみだ。

――新月まで、あと十日――

リンケイは目を細め、“その時”のことに想いを馳せた。

今はただ、その時までには整えておくべきを整えるのみだ。  
ただそれだけに、全霊を傾ける。

――法珠で鬼を吹っ飛ばすのは、それからだ。



町は、ひっそりと静まり返っていた。  
リューシュンは、そんな町中を歩いていた。

独りではない。  
ケイキョが、並んでちょこちょこ足を運んでいる。  
鼯の姿のままだ。

双方とも、何も言わない。

異様に静まり返った町――人っ子一人姿を見せぬ町の様子について、どちらも言葉を口にする  
ことはなかった。

二足とも、知っているのだ。

人々が、決して町からいなくなったのではないということ。

ただ姿を見せぬだけだ。  
それは、鬼が来ているからだ。  
つまり、リューシュンが。

これが他所の町、土地爺がリューションでない町ならば、もしかしたら人々は逆に踊り出て闘いを挑みに来るのかも知れない。

だがリューションにそれを仕掛ける者は、今のところいないようだった。

それは――

――幸甚、てことなのかな。

リューションは想い、歩きながら鬼の臉を閉じた。

幸いだ。

この町の人々は、リューションを敵として正面から傷つけることを選ばずにいてくれるのだ。

それは、土地爺としてのリューションが今まで町のために、人のためにどれだけ尽くしてきたかを、皆覚えてくれているからだ。

だがそれもいつか、人々の心から忘れられてしまう日がくるのかも知れない。

いつか、人々はリューションのことを、ただの鬼、ただの敵だと思い、石を投げ、刀や槍を向けてくるようになるのかも知れない。

――もし、戦いになってこの俺が、人を殺めてしまったなら。

リューションは歩きながら想った。

――俺はその人の鬼魂を取り込んでやるのが、できるのだろうか。

せめてもの償いと慰めに、自分が殺した人間を自分の手で上天に上げてやることを、リューションは考えた。

だがリューションの手によって殺された人間が、果たしてそれを望むのか。

――望む、だろうな。

リューシユンは歩きながら、ふうと息をついた。  
人間とは、そういうものだ。

くるしみとかなしみは、できるものならばすべて自分の手の届かぬところへすべて押しやってしまいたい――押しやってもらいたい。

たとえそれが自分を殺した者の手による仕業であったとしても、自分を楽にしてくれるのであれば、構わない。

――人間が怖い、とは、こういう事か――

リューシユンは陰陽師の言葉を思い出し、もう一度ふう、と息をついた。  
颯が足許から、ちょこちょこ歩きながらちら、と見上げた。

――新月まで、あと十日――

歩きながら、空を見上げる。  
このところぐずつく気候が多く、天日を数日拝んでいない。  
見上げる空はどんよりと灰色にくすみ、ひんやりとした風が肌を撫でる。

――兄さんは……玉帝は、どう想うのだろうか。

空を見ながら、そう考える。  
何を想うのか。

玉帝は陰陽師に、弟の力になってやって欲しいと頼んだのだという。

その頼んだ相手である陰陽師こそが、閻羅王に力を貸す者であった、というそのことを、もし知ったとたら――否、恐らくすでに玉帝は知っているのだろう。

そのことについて、どう想うのだろうか。

陰陽師に裏切られた、と想うだろうか。

しかしリューシユンは、もしそうだとしてもそれは違う、と声を大きくして兄、玉帝に異を唱えるだろうと思うのだった。

裏切ったのではない。

玉帝をも、自分をも。

だからこそ陰陽師は自分に、新月の夜訪ねてくれと望んだのだ。

裏切りではなく、それこそが自分の力になることだと信じているからだ。

陰陽師自身も、そして自分も。

――閻羅王にじゃない、俺に力を貸すつもりなんだ。

真の筋立てはそういうことなのだと、リューシユンは地を見下ろしてそう思った。

――だから、兄さん.....あんたの頼みを、あいつは今まさに、かなえようとしている所なんだ

。

答える声は聞えてこない。

リューシユンはもう一度、天を見上げた。

さようなら、我が弟よ。

テンニを追い飛び出した天心地胆、そこから墜ちる時にふと聞いた、過去の呼び声――記憶。

それは、地から遠く、上天にいちばん近い所にある天心地胆だったからこそ、聞こえたものだったのかも知れない。

玉帝の、声。

その声の中にリューシユンは、大いなる哀しみを聞いた。  
そしてその哀しみとは他でもない、自分自身が玉帝に対し与えたものだったのだ。

――俺は、あんたを裏切ったんだな――

天を見上げ、そう思う。

――だがあいつは、そんなことはしない。

「哀しそうで、やすね」

鼬の声が、聞える。  
見下ろすと、ケイキヨは前を向いたまますたすたと歩を進めている。

「陰陽師さんに、やめろとは言わねえんでやすかい」

「――」

リューシユンは、答える言葉をすぐに見つけられなかった。

「後戻りは、できねえんでやしよう」鼬はさらに訊く。

「――」

――やめろ、とは――

リューシユンは、言われてふと気づいた。

陰陽師の口からそれを聞いた当初は、まさか、とも、信じ難い、とも思ったのだが、陰陽師の眸を見た後は不思議と、それを止める言葉などついで口から出ては来なかったのだ。

思いとどまらせることなど、考えもしてこなかった。

「ーああ」リューシユンは、低く答えた。「止めはしないよ……俺が止めて、止められるような奴でも、ないしな」

鼬は歩きながら、リューシユンを見上げた。「確かに、そうでやすね」

「わかってるんなら、訊くなよ」リューシユンは苦笑した。

「けど、哀しそうに見えやしたんで」鼬は首をすい、とすくめた。

「ー」リューシユンは、歩きながら少し唇をすぼめた。



スルグーンは、洞窟の入り口に降り立った。

空を飛んで来たのだ。

傷は、まだ完全に癒えたとは言えぬが、それは足の傷であり、翼を使うにはそれほど難儀しなかった。

「戻ってきたのね」

声が聞え、はっとして周りを見回す。

「ここよ」少し怒ったような声が続く。

スルグーンはさらに眸をきよろきよろさせ、それから足許の、海から続く川に気づいた。



一度話をした、目のない魚だ。

「友達には、会えたの？」魚は泳ぎながら訊く。

「――」スルグーンはしばらく魚を見下ろしていた。「会えた、チイ」

「そう」魚はまた言った。「これからずっとここに、住むの？」

「それは」スルグーンは迷った。「わからない、キイ」

「どうして？」魚は訊いた。「そんならなんで戻って来たの？」

「――」スルグーンは、眸を洞窟の外に向けた。「もしかしたら」

「もしかしたら？」

「戦に、なるかも知れないからだチイ」

「戦？ それ何？」魚は訝しげな声を出した。

「要するに、喰うか喰われるかってことだキイ」

「うえ」魚は嫌そうな声を出した。「外の世界でもあるのね、そんなのが」

「どこでだってあるチイ」スルグーンは話しながら、洞窟の奥へと進んだ。

「あんたもそれ、やるっていうの？ 戦とかいう、それ」魚も話しながら、ついて来る。

「――わからないキイ」眩くように答える。

「あんたを喰おうとするのって、どんな奴？」魚は泳ぎながらまた訊く。

「――おれを？」

「喰うか喰われるか、なんでしょ。あんたは誰を喰うの？」

「――」

誰だろう――

スルグーンが戦の話聞いたのは、山で傷の手当てを受け体が幾分回復してきた時だった。それを告げたのは、フラという生き物――龍馬だった。

スルグーンを斬ったテンニという鬼、それが陰曹地府の鬼どもを次々に手にかけ、そして陽世にいる人間どもが今、鬼に敵意を向けている。

テンニは閻羅王を斃し陰曹地府の覇者となり、次に人間どもを支配しようとしている。

様相としてはそうだが、スルグーン自身は人間でもなければ鬼でもない――鬼となっていたスルグーンの“欠片”はもう、テンニの手にかかって亡き者とされた。

とすれば自分は、何と闘うのか――

――それは。

「決まってるチイ」スルグーンは立ち停まり、その岩壁を見上げて答えた。

彼の描いた龍馬の絵が、そこに残っていた。

「おれは、おれの友達を喰おうとする奴を、喰うキイ」

森羅殿に向かったのではなかった。

テンニは、陰曹地府の片隅に身を潜め考え続けていた。  
龍馬の魔焰に焼き焦がされた鬼の体を、回復させる方策が必要だった。

陰陽師、乃至降妖師の力を借りるしか、なさそうだったと思った。  
それを思うと、つい苦笑いが出る。

自分にとって最大の敵となった者達と、同じ職業の者達を頼らねばならぬという現状にだ。

だが、だからといって迷ってなどはいられない。

陽世で陰陽師や降妖師として仕事をしていた鬼どもを見つけ、そいつ等から方策だけを聞き出し、陽世に戻り治癒に当る。

そういう策に従うべく、テンニは腰を上げた。

陰曹地府の暗い大気の中、黒焦げになったままの両腕――片方は手首までしかない、それは鼬によって、喰い千切られたのだ――を拵げ、伸ばしてみる。

灰色の空を仰ぎ見た時、テンニはふとある事に思い至った。

――ふむ。

その思いつきに、独り笑いを浮かべる。

――陰陽師、降妖師ではなく。

腕を下ろし、焼け焦げた手で顎をつまむ。

――鬼に頼む、という手もあるか。

くくく、と喉の奥で笑う。

――龍馬にやられたものについては、さぞ龍馬を飼う者がよく知っておろうよ。

元降妖師の鬼は、歩き出した。

――今度は儂がお前を雇う番だな。キオウ。



森羅殿に、着いた。

ジライは、ごくりと喉を鳴らし、殿内に一步、足を踏み入れた。

森羅殿の周囲、また内部の壁や天井のあちこちには、いまだテンニの打鬼棒により血と化して流れた鬼どものその跡が、ところどころうっすらと残っている。

陽世においても兄コントクと共に同様の惨状を目の当たりにしたジライは、眉をひそめた。

ここでこんなことが行われたがゆえに、鬼どもが恐れ人間たちの世界へと大勢逃げ出して来、そうしてあのような暴虐を働いたのだ。

許すまじ、という想いが改めて湧き起こる。

殿内にいる鬼差や小鬼に、閻羅王のいる場所を尋ね、歩く。

やがてそこに、ジライは独り、着いた。

閻羅王は玉座に、やはり独りで坐っていた。  
今はもう、傍に仕えるスルグーンはいない。

とはいえジライにとって、閻羅王を見るのはこれが初めてだった。  
スルグーンという鬼差がいたことなども無論、知らない。

だが同じ部屋の中にいた、牛頭馬頭のことは知っていた。

かつて兄コントク、聡明鬼、そして陰陽師と共に、だまくらかしてやったことがあるからだ。  
鼬ケイキョを兄に化けさせ、ここへ連れて来させた。

――まさか、あれをほじくり返して十八層地獄へ墮とされるということはなかろうな。

苦笑いしたくもあり、冷や汗を拭いたくもありしながら、ジライは黙って閻羅王の前へ進んで行った。

「ジライ、か」

地獄の王は、生死簿に目を落として訊ねた。

「はい」ジライは神妙に頭を下げた。「ジライです」

「――」閻羅王はしばらく黙って生死簿に書かれてあることを読んでいた。

ジライも黙って、待った。

「そうか」やがて地獄の王は目を上げ、ジライを見た。「テンニに、やられたか」

「はい」

「なんと」

「テンニに」

牛頭馬頭が驚く。

どうやら、牛頭馬頭を騙したことについては深く問わずにおいてくれるらしい――

ジライは内心、ほっと胸を撫で下ろした。

「テンニは恐らく、ここへまたやって来るだろう」閻羅王は予測を述べた。「怖いと思うか」

「まさか」ジライは首を振った。「私も恐らく奴がまたここに来るだろうと思ったからこそ、ここへ来たのです」

「――つまり」閻羅王は訊いた。

「私に、地獄の武器をお与え下さい」ジライは答えた。「あ奴を、二度と悪行の働けぬよう叩きのめしてやります」



「髪が、伸びたようだな」庭先でリンケイは顎に手をやり、聡明鬼を検分するかのようにつめを覗いた。

「そんなには経ってないだろう」リュージュンは苦笑した。

「まあ、上がれ」リンケイも笑いながら背を向け、先に縁側へ上がった。「ひとまず茶を淹れさせよう」

新月の空には小さな星々がひしめき合い、賑やかな様相を見せている。

リュージュンが陰陽師の屋敷に着いた頃には、陰陽師に鬼退治を呼びかける人々の姿もすっか

り消え失せていた。

というよりも、日が経つにつれ陰陽師に鬼退治を頼む人の数さえも次第に減ってきていた。

それは、あの日以来鬼どもは陽世に姿を見せなくなったからであり、それはテンニが陰曹地府に姿を見せなくなっていたからであった。

一見すると平穏な日々だが、本当のところはこれがどういう状況であるのか、誰にもはかり知れぬものであるはずだ。

だが、とりあえず自分の身に危険が及ぶことがないとなると、人はすぐに気持ちを緩め、のんびりと気楽な生活に戻ってしまうものなのだ。

陰陽師に説明を聞かずとも、リューシュンにも今はそれがよくわかっていた。

だから敢えて「人が少なくなったな」とは言わずにいた。

式神の少年が茶を淹れ、運んで来る。

虫の鳴く音が疎らに聞える庭の片隅、灌木の根元の辺りに、仔犬の坐る影が見える。その後ろには、低く身を伸ばした鼯がいる。

リョーマと、ケイキョだ。

二匹は今宵、追いかけてこをするでもなくただ大人しく坐り、伏せていた。

ケイキョが聡明鬼について庭に入って来たことを、リンケイは特に咎め立てたりしなかった。寧ろ、リョーマを気遣いやって来てくれたケイキョに、感謝を示すかのように頷いたのだ。

そして二匹の精霊たちは、灌木の茂みの根元で向かい合い、何か話しているのか、どちらも黙り込んでいるのか、とにかく静かだった。

「三年、か」

湯呑を持ったまま、ふとリンケイが空を見上げ言った。

「ん」茶をすすりながらリュージュンは陰陽師を見た。「何が——ああ」

三年、とは、リュージュンがここ陽世において土地爺となってからの月日のことだ。

「お前」リンケイは呼んでから、茶をすすった。「この三年の間、女を抱いた事があったか」

「あ？」リュージュンは眉を寄せた。手に持つ湯呑の中の茶が波立つ。「——ない」口をすぼめて答える。

「そうか」陰陽師は、ふうと息を吹いた。「俺の勝ちだな」

「何がだ」リュージュンは更に眉を寄せた。

「俺は抱いたからだ」

「どうせ精霊の類だろう」リュージュンは陰陽師を湯呑を持たぬ方の手で指差した。

「精霊ではない」陰陽師はまた茶をすする。

「じゃあ式神か」

「——」

「なんだ、凶星か」リュージュンにはやりと牙を見せた。

「呆れただけだ」リンケイは湯呑を盆の上に置いた。「じゃあ、そろそろ」

「いや、凶星だろう」リュージュンは陰陽師の言葉を遮った。「お前が抱いたのは式神だ。それは女を抱いた事にはならん。お前が自分で」

「もういい。始めるぞ」リンケイも聡明鬼を遮り立ち上がった。「こっちへ来い」



リューシユンは口をすぼめて立ち上がり、陰陽師について室内に入った。

「これへ」リンケイは、床の一点を指で指し降ろしながら告げた。「坐ってくれ」

「ここ、か」リューシユンは確かめながら、言われた場所へ膝を折り坐った。  
坐ると目の前に、陰陽師が常日頃腰に挿している斬妖剣が置かれてあった。

「うん」陰陽師は答えながら、縁と室を隔てる障子をそっと引き、閉めた。

閉める間際、もう一度リンケイは、灌木の根元に坐るその小さな影を眸に映した。

リョーマは、何も言わずにいた。

何も言わず、ただ坐って、主のーリンケイの障子を引く姿を、見ていた。

ケイキヨも、何も言わずにいた。

何も言わず、長い尻尾をゆるり、とリョーマに巻きつけた。

ーおいらが、ここにいやすよ。

そのことを、リョーマに知っておいてもらいたかったからだ。

「今から、俺に呪いをかける」リンケイは言いながら聡明鬼の前に、聡明鬼に背を向け坐った。

「うん」リューシユンは表情を引き締め、頷いた。

「まず、俺が呪いを唱える。そして後ろに手を伸ばす。お前はそこから」リンケイは首だけで振り向いた。「坐ったままでいい、俺にその斬妖剣を渡してくれ」剣を指差す。「俺は背を向けたまま、それをお前から後ろ手に受け取る」

「うん」

「それだけでいい」

「え」リューシユンは少し驚いた。「それだけか」

「うん」今度は陰陽師が頷く。「それだけだ」

「ーそうか」聡明鬼は眸を少し揺らしたが「わかった」そう言って頷いた。

「何か、訊きたいことはあるか」陰陽師は言う。

「訊きたいことか」リューシユンは少し考え「お前、嫁を娶ることは考えたことなかったのか」と訊いた。

「ー」リンケイは少しの間無言で聡明鬼を見、それから顔を少し逸らし「ないこともないが」と答えた。

「なんでもらわなかったんだ」

「面倒だからだ」

「面倒？」リューシユンは眉を寄せた。

「嫁というのは、生きている人間だからな」リンケイは肩をすくめた。「俺には荷が重過ぎる」

「まあ、お前らしいといえばそうだがな」

「お前こそ、嫁をもらわないのか」リンケイの方が訊く。「キオウのように」

「俺は」リューシユンは声をくぐもらせた。「鬼になってからはまだ三年しか経っていないし、そういうのはよく分らん」

「そういうの、とは」

「つまり、男と女がどうこういうようなことがだ」

「なるほど」リンケイは顔を前に向け、頷いた。「お前はまだ、子供だったんだな」

「ー知らん」リューシユンはますます声をくぐもらせた。

「他にはないか」リンケイは前を向いたまま問うた。「訊いておきたいことが」

「ー」リューシユンは陰陽師の、黒く艶を放つ髪を見た。「戻って来れるのか」呟くように訊く。

「ー」リンケイは少し置いてから「いや」と答えた。

「ー」リューシユンは目を落とした。

斬妖剣が、そこにある。

「そうか」リューシユンは、言った。

「始めるぞ」

「うん」

リューシユンは、待った。

まず陰陽師が、呪を唱えるー

「そうだ」だがリンケイは顔を上げ、また上体だけ振り向いた。

「何だ」リューシユンは片眉をしかめた。

「リンケイ」陰陽師は言った。「俺の名だ」

「ー」リューシユンは目を丸くした。

リンケイはそれきり微笑んでいる。

「あ、リ、リューシユン」聡明鬼は慌てて返した。「俺の名は、リューシユン」

「リューシユン」リンケイはただ一度呼び、「ではな」と再び背を向ける。

「リンケイ」リューシユンはその背に向かって呼んだ。

「オボチススヂマヂチウルヂ」リンケイは答える代わりに呪を唱え、後ろに手を伸ばした。

「リンケイ」リューシユンはもう一度、声にならぬままその名を唇にしなから、斬妖剣を片手に握って差し出した。

「リューシユン」斬妖剣を受け取りながら応えるリンケイの声もまた声にならなかったが、その囁きは聡明鬼の耳に確かに届いた。

風が起こった。

ざあああ

その音を、リューシユンは知っていた。

よく聞く風の音だ。

そうー

陰陽界に吹く、大気の動きではない風の音だ。

穢れの地府の扉が、リンケイを呑み込むため口を開いたのだ。

リューションが瞬きをする暇もなく、陰陽師の姿は消えていた。

ざああああ

それはまるで波のごとく、強くなり、弱くなり、だが完全に途切れることはなく、リンケイ——この初見の闖入者をためつすがめつしながら、すぐ傍をかすめてゆく。

——なるほどこれが、音に聞えた陰陽界の“風”というもののか。

陰陽師は摺り足に近い歩みを静かに進めていた。

耳を、頬を撫でるのは大気の揺らめきではない。

怨念の、憎悪の、そして助けを乞う悲哀の声でもある。

——こんな所に俺はあれほど来たがっていたのだから、趣味が悪いと言われるのも無理はないな。

独り、歩を進めながらにやりと笑う。

怖れはない。

不安も、緊張も抱いてはいない。

右手に握っていた斬妖剣を、歩きながら腰に挿し直す。

聡明鬼の——リユーシユンの手から受け取った、剣だ。

足は、素足のままだ。

傷めるかも知れないが、別に構わぬだろうと思う。

何しろ今から、足どころではなく恐らくは全身、この身のすべてに、傷を負うことになるのだろうからだ。

ここ陰陽界から陰曹地府へ抜け出た暁には、もはや無傷でいられるつもりでなど端からいない。

そしてもはや、逃げ場所などないのだ。

生きたまま陰曹地府へ来る——陽世へも、上天へももはや行く術はない。

やがてリンケイは、地面からそそり立つように存在する黒き淵を見つけた。

自分の目で見つけるのは、これが最初だった。

近づくとそれは、淵を細かく震わせながら佇む影のようだった。

或いは震える淵に囲まれている黒き闇のようでもあり、墨汁のようでもある。

確かに言えることは、その向こうに平和で穏やかな——そう、上天のように心安らぐ場所など、皆無であるに違いないということだ。

それがつまりは、天心地胆だ。

陰陽師は、そこへ足を踏み入れ、そして全身入った。



ふう、とため息を洩らす。

「どうした」夫が少し笑いながら、訊く。

「ええ」スンキも少し笑う。「随分、静かな日が続くなと思って」

「――そうだな」キオウは答え、梢の向こうの夜空を見上げる。

新月の今宵は、星屑がひしめき合い賑やかな様相を見せている。

特に、そこから何かが降って来るという予感を持つわけではない。

だが、考えてみればいつそのような事が起きたとしても意外ではない、そういう状況のはずだ

。

打鬼棒を手許に取り戻したテンニが、何処かに身を潜めている――それは陰曹地府であるのかも知れないし、ここ陽世の何処か山の中であるのかも知れない。

キオウとスンキは、キオウが山賊の頭として棲んでいた天幕に身を寄せていた。

フラもいる。

山の空気は冷たく、スンキの身重の体には厳しい環境なのかも知れないと、模糊鬼は考えもしたが、妻はそれでも良いと言った。

陰曹地府にいるよりは、この山の中の方がまだ安心できるというのだ。

それは、キオウと、そしてその妻スンキのことも守ってくれるだろう龍馬フラが、近くにいてくれるからだ。

フラは黒犬の姿となって、石の上に坐るキオウの足許に蹲っていた。

だが不意に、フラはぴくり、と耳をそばだて、閉じていた目の片方だけを開けた。

「どうした、フラ」キオウは、今度は真顔で問うた。「何か来るのか」

「えっ」キオウの隣に坐るスンキも驚いて犬を見下ろす。

啼いてる。

フラは、念によりキオウにそう教えた。

「啼いて……誰が？」キオウは訊いた。

リョーマ。

「リョーマが？ 何故……」キオウは眸を揺らした。「陰陽師は？」

ー行った、みたいです。

「ー陰曹地府へ？」

ーはい。

「そうか.....聡明鬼は」

ーわかりません。あいつは何も.....

「.....そうか」

「陰陽師さまが、陰曹地府へ行ったということなの？」スンキが、そっと訊く。「聡明鬼さまと？」

「いや、独りで行ったようだ」キオウは考えを述べた。「だが聡明鬼もすぐに追って行くだろう」

「リョーマは、独りになってしまったのね」スンキは眉を曇らせた。

「大丈夫だ、ケイキョがいるからな」キオウは頷いた。「しかしずっと仕えていた主を失ったことに変わりはない。フラ、リョーマにもここへ身を寄せるように伝えてくれないか」

ーここに、来たがるでしょうか、あいつ。

フラはちらり、と主を目だけで見上げた。

「来たがるさ。お前もいるしな」キオウは微笑む。

ざざざ

激しく葉擦れの音が起こったのはその時だった。



「ん」

天心地胆を抜け陰曹地府へと出たリンケイが最初に目にしたのは、思いもかけぬ再会の相手だった。

「スルグーン」呼ぶ。

「よう、チイ」雷獣はふわりと宙に浮いている。

初めて洞窟で出遭った時のようにだ。

「ここに来ていたのか」リンケイはにこりと微笑んだ。「一人か」



「ああ、キイ」スルグーンは浮かびながら頷いた。

「体の方はもうすっかり好いようだな」リンケイは施療者の眼差しでスルグーンを見た。

「ああ……あの時は、あれだチイ」

「何だ？」リンケイは眉を上げた。

「その、だからまだ言ってなかったと思ってキイ」スルグーンは浮かびながら顔を横にそむけた

。

「何をだ」リンケイは訊く、が、いつものように大体は察しがついていながら空慌けているのだ

。

「だからチイ、あれをだキイ」スルグーンは顔を戻さず嘴を小さく上下させてぶつぶつ答える。

「歯切れが悪いな。お前らしくもない」リンケイは腕組みをしてため息をついた。

「だから」スルグーンはむすっとした顔をやっと正面に向けた。「礼を言ってなかったっていうんだチイ」

「ああ」リンケイは目を丸くしてみせた。「そういえばそうだな。礼を言ってもらっていなかった」

「お前、礼を言えっていうのかキイ」

「いや、別に俺はどっちでもいいが」リンケイは肩をひょいとすくめた。「気になるんなら言ってくれてもいいぞ」

「ちきしょう」スルグーンは嘴をさらに尖らせるかのように喰ってかかった。「あの時は助かったチイ、ありがとうキイ」叫ぶ。

「――」リンケイはしばらく黙ってスルグーンを見ていたが、とうとう吹き出して大笑いし始めた。

「お前」スルグーンはやたら羽ばたいた。「何が可笑しいチイ」

「まさか陰曹地府に来てこんなに楽しい気分が味わえるとは思わなかったな」リンケイは眦を指で拭いながら言った。「お前はこれからどうするんだ、スルグーン」

「おれは」雷獣は言い淀んだ。「そのチイ、あいつと一緒に、戦で闘おうと思うキイ」

「戦、か」リンケイは真顔になりスルグーンをまじまじと見つめた。「聡明鬼と、か」

「――」スルグーンは浮かんだまま俯いた。

「どうした？」

「お前、あいつの名を知っているのかチイ」スルグーンは顔を振り上げた。「聡明鬼の、本当の名をキイ」

「――」リンケイは少し考えた。「ああ」頷く。

知ったばかりのところだ。

「その、教えてくれないかチイ」スルグーンはまた俯いた。「おれは、どうしても」猫の目をぎゅっと瞑る。「思い出せないチイ」

「――」リンケイは雷獣を見た。

玉帝さまは、どうお望みだろうか――

ふと、陰陽師の胸中にはそんな想いが生まれる。

消してしまった記憶、そのほんの一部分である聡明鬼の名ーリューシユンの名を、この叛逆者スルグーンに戻すことを、玉帝はお望みになるだろうか、お許しになるのだろうか。

「あいつの名は、俺の口からは教えられん」リンケイは静かに答えた。「だが恐らく、遠からずあいつ自身の口から教えてもらえるだろうよ。何故ならお前はあいつの」にこりと微笑む。「友達だからな」

スルグーンが猫の目でじっとリンケイを見た。



キオウとスンキは、はっと音のした方へ振り向き、キオウはスンキを背に隠しスンキは夫の背に手を置きその肩越しに様子をうかがった。

フラも犬の姿のまま牙を剥き喉を唸らせ、茂みの向こうを睨みつける。

だが音の後、姿を見せる者はいなかった。

しばらく三足は身じろぎもせず音の聞えたところに注意を向けていたが、やがてフラが、地面に鼻をつけながらそろりと足を踏み出した。

「テンニか」キオウが低く問う。

ーテンニ、ではないみたいです。

フラは答え、それから顔を上げたかと思うと走り出し茂みの中に飛び込んだ。

ほどなく黒犬は、茂みの中で見つけたものを主人に報せた。

「なんだって」キオウは眉をしかめ戦慄の声を上げた。

「どうしたの」スンキが半ば悲鳴のような声で訊く。

「ー山賊の一人の」キオウは妻に背を向けたまま答えた。「首、だけがあつたらしい」

「えー」スンキは口を抑え言葉を失った。

くくくく

遠くから、風の音と紛うほど小さく、その邪悪な笑い声が聞えてきた。

「テンニ」キオウは怒鳴った。「貴様か」

「キオウ」

邪な声は模糊鬼を呼んだ。

姿は見えない。

「お前と同じ事をしたまでだ」

「――」キオウは牙をぎり、と囁んだ。

スンキは息を潜め、ただ夫の背に隠れている。

「お前は土地爺の首を落として行った。人間の町に」

「やめろ」キオウはまた怒鳴った。「何の為にこんな事をする」

「儂も見せしめに山賊どもの首を落として行ってやろう」

「閻羅王を斃すことをやめたからか」キオウは姿の見えぬ敵に向かって訊いた。「俺を裏切り者と呼ぶか」

「お前にはどうせ出来ぬ事だったろうよ」テンニはそう言って風に乗せ高笑いを放った。「裏切るも何もないわ」

「――」キオウは屈辱の言葉を浴びせられ怒りに身を震わせた。

「さて、それはともかくだ」突如声が近くで聞え、鬼の夫婦は坐っていた岩から飛び上がって地に降り立った。

茂みからフラが飛び出し、激しく吼えながら声の主に飛び掛る。

だがテンニはひらりと跳んでかわし、枝の上に焦げた足を音もなく乗せて立った。

「何が望みだ」キオウは見上げて鋭く訊いた。「その黒焦げの体を俺に治せとでもいうのか」

「察しがいい」テンニはにやりと笑った。「頭脳だけは相変わらず良いな」

「悪いがお門違いだ」キオウは睨みつけたまま言った。「俺は医者でも法力使いでもない。ただの鬼だ」

「だが龍馬を操っている」テンニも睨み返した。「龍馬の吐く焰についてもお前なら下手な法力使いより余程知っているだろう」

「――」キオウは黙り込んだ。

「儂は龍馬二匹の焰に全身巻かれてもこの通り動くことができてる」テンニは両腕を体の左右に広げ自分の体を見下ろした。「人間のままだったならばこのような事はなかったのだろうか」

「――」

「とはいえ他の鬼どもも、龍馬に焼かれれば消炭となって消えておった。だが儂は他の鬼どもとは違う。鬼となった今このように無事で――まあ、片手は失ったが、動けておる。ならばこの焦げた体を元通りに戻すことも、ひょっとして無理なことではないのかも知れぬと思ったのだ」

「――」キオウは答えない。

「何が必要なんだ、模糊鬼」テンニは木の上からひたりと睨み下ろしながら訊いた。「儂の体を元に戻すためには」

「――」

「答えぬと、山賊どもの首がまたそこいらに転がるぞ」不敵な笑みを唇の端に広げる。

「よせ」そこでキオウは怒声に乗せ言葉を発する。「時間だ。時間が経てばいずれお前の体は元に戻る」

「――」今度はテンニの方が黙る。

「ただ待つだけだ。それしかない」

「――他には」

「ない」

テンニは焦げた顔を横に向け、ふ、と息を吐き、次の瞬間木の上から消えた。

ざざ

元降妖師が消えた後で、枝葉が揺れた。

「やめろ」キオウは思わず茂みの方へ走った。「あいつらを殺すな。他の方法を俺が考える」

「ほう」背後で声が答える。

はっとして振り向いたキオウの眼に、テンニとその腕を首に巻きつけられ捕えられたスンキの姿が飛び込んだ。

「スンキ」視界がぐらり、と揺らめく。「やめ」

テンニは、手首のない方の腕でスンキの首を捕えていた。

もう片方の手は、頭上高く差し上げられている。

キオウの震える眼は、そこに握り締められたものをはっきりと見据えた。

それが何か、知っていた。

――そこまで、真似をするというのか――

奇妙なことに一瞬、模糊鬼の頭の中にはそんな想いが走ったのだ。

それは、彼キオウが模糊鬼となり生まれることを導いた、ものだった。

七寸釘だ。

テンニは特に何も言わずじっとキオウを見据えたまま、狙い違わずその釘を、キオウの子を宿すスンキの腹に深く刺した。

「あ……ああ……」腹を刺されたスンキはただ喉の奥から呻き声を洩らし、眼をかつと見開いて眼前の虚空を凝視していた。

「スンキ」キオウもまた喉の奥で妻の名を囁くばかりで、手を差し伸べることさえも心に浮かばずにいた。

ただテンニだけが、スンキの腹に刺し込んだ七寸釘を握り締めたまま、にやり、と笑った。



ぴくり、とリョーマは耳をそばだて、次にはがばっと立ち上がった。

「リョーマさん？」ケイキョが驚いて見上げる、が、鼯にも何故仔犬がそのような仕草を見せたのかすぐに理解できた。

「どうした」障子を開け縁側に出て来たリョーシユンが、二匹の精霊たちの様子を見て眼を丸くする。

「スンキさんが、やられやした」ケイキョは叫んだ。「テンニが、山賊の山に」

「何だと」鬼も叫ぶ。「リョーマ、元の姿――」

そこで三足ははたと言葉を失った。

リョーマは今、仔犬の姿のままだ。

元の、龍馬の姿に戻るには――

「こ」ケイキヨは茂みの下に置いてあった巻物を鼬の口に咥えて持ち上げた。「これを、陰陽師さんが」

「――」リューシユンは茫然とそれを見た。「それは？」

「陰陽師さんが、いざという時のために残してくれた、色んな呪の手引きでやす」ケイキヨは巻物を咥えたまま地面に眼差しを落とした。「あっしに、いざという時にはこれを使え、と」

「――」

リンケイが。

リューシユンは心の中で呟いた。

鼬は、陰陽師の名を最後まで知らされずにいたのだろうか。

ただその呪の手引きだけを渡されて、後は法力を駆使してなんとかしろと、そう言い渡されたのだろうか。

そんなことを、想う。

「使えるか」リューシユンはそれを振り払い、厳しく訊いた。

「な、なんとも」鼬は自身なさげに鬼を見上げる。「あっしにそこまでの法力なんて」

「けど」鬼はそれでも言う。「やってみろ。それしかない」

「――」

――ケイキヨさま。

脳裡に届いたリョーマからの呼びかけに、鼬ははっと身をすくませた。

――おれに、お力を。

リョーマは仔犬の身を地に伏せ、瞼を閉じて新しき主より受ける法命を待っている。

ケイキヨはぎゅっと眼を瞑り、それから開き、尻尾をくるりとひと巻きして子犬の額に触れた。

「ノウマクサンマンダバサラダンセンタマカロシヤダソワタヤウンタラタカンマン」

巻物にて教えられた通り呪を唱える。

ややあった。

何も、余計な事を想ってはいけない。

鼬はひたすら耐えた。

心の裡に、頭が龍、体が馬の、リョーマの元来あるべき姿を描く。

強く閉じる瞼がずきずきと傷む。

――法力が――欲しい。

鼬は強くそれを望んだ。

――法力が！



「何か、聞えたか」スルグーンは不意にそう言って立ち止まった。

「ん」リンケイもつられて止まる。「何か、とは？」

「――」雷獣は今来た道を振り返る。

陰曹地府のくすんだ世界の中、そこここを背を丸めて歩く鬼や鬼魂らの他動くものもない。  
何かぶつぶつと呟く者はいるが、それは世を恨む言葉でしかなく、聞き取るほど価値のあるものとも思えない。

「何か、聞えたチイ」スルグーンはしかし、そんな風景を己の肩越しにじっと見る。「何か……呪文のような」

「――」リンケイは雷獣の後頭をじっと見た。「呪文？」

陰陽師自身には、何も聞えなかった。

だが、呪文――それは恐らくこの雷獣よりも自分の方が遥かに身近に知っているはずのものだ。  
。

「どんな呪文だ？」訊く。

「――」雷獣は小首を傾げる。「ノウマク、サンマン、ダ……」

「ケイキョカ」リンケイは眼を見開いた。「リョーマを呼び戻す為の呪だ。お前にはそれが聞こえたか」



「焔に関わりがあるのかキイ」スルグーンが振り向く。「この呪文はチイ？」

「焔？」リンケイは訊き返す。「直接にはない、だが龍馬を呼ぶためのものだ。龍馬は魔焔を吐く、間接には関わりがあるということになる」

「行ってもいいかキイ」スルグーンはばさり、と翼をはためかせた。「何か、必死になってそれを詠み続けてる奴がいるチイ」

「――」リンケイは、拳を握り締めた。「ああ。よろしく頼む」

素早く、スルグーンは天心地胆に飛び込み消えた。

――何が起きた。

独り陰曹地府に取り残された陰陽師は、推察するしかなかった。  
だが、ふ、とつい微笑む。

――今度はこちら、陰曹地府側で、陽世に行けぬことを悔しがるとはな。

考えられるとすれば、山にて何事か危急の事態の起こった事だ。

実をいうとリンケイは、リュージュンがすぐに自分を追いこ陰曹地府に飛び込んでくるのではないかと思っていたのだ。

だが鬼は来ない。

そしてケイキョが、巻物にて伝授した呪を早速ながら読誦し始めた。

危急の事態が起きたとしか、考えられぬ。

――頼む。

リンケイは眸を細め、今一度スルグーンに心の中で伝えた。

――法力を、貸してやってくれ。



がん、と脳天を殴られたような衝撃を感じた。

「あぐツ」

ケイキヨは呻いて身を仰け反らせる。

だが痛みに歪んだ表情で眼を開けると――

そこには巨大な龍馬が、陰陽師の庭から高くその頸を上空に向け立ちはだかっていた。

「よし」聡明鬼が叫ぶ。「行くぞ、ケイキヨ」馬の尻尾からその背に駆け上がる。

鼬も慌てて後続く。

――まさか、おいらがこれを？

昇りながらも鼬には信じ難かった。

だがその理由はすぐに判った。

馬の背に、あの小さく奇妙な生き物が先に乗っていたのだ。

「スルグーン」リューシュンが叫ぶ。

「陰陽師に頼まれて来たチイ」雷獣はふわりと浮かんだ。「当面の間、おれの法力を貸してやるキイ」

「陰陽師ー」リューシュンは思わず辺りを見回すが、当然のことながらどこにもその姿は見えない。「あいつは、行ったのか」

「ああチイ」スルグーンは頷く。「陰曹地府の森羅殿で、待ってるはずだキイ」

「うん」リューシュンも頷く。「すぐに行きたいが、まずは山だ」

リョーマはすでに満天の星の下を翔けはじめていた。



「懐かしいものだろう」テンニはにやにやと笑いながらキオウに言った。「いや……お前自身には懐かしくもないものだろうな。これを腹に刺されたのはお前ではなく、お前の」

「貴様」キオウは身を震わせて怒鳴った。「十八層地獄へ叩き落してやる。閻羅王ではない、この俺がだ」

「ー」テンニはきよとんとした顔になり、それから口を耳まで裂けるかと思わせるほど大きく開けて笑った。「はははは。お前が、この儂をか。ははははは」

スンキはがくりと頸を垂れ、大笑いするテンニの腕の中でゆさゆさと揺れた。

「スンキ」キオウは頭の中が真っ白になる想いに捕われた。妻は、そして自分の子は、もうこの手に取り戻せないのかー

「この女は死んではおらん」テンニは笑うのをやめ、馬鹿にしたように顎を持ち上げてキオウを見下げた。「腹に七寸釘を刺されるということは、お前も知っておるだろう、模糊鬼が生まれ出ないようにするための呪だ」

「ー」キオウは、はっと眼を見開いた。

そうだ、確かに自分の母ハユクも、地獄で子を、つまり模糊鬼を生まぬようにと腹に七寸釘を刺されたのだ。

そしてそれを山賊どもが抜き去ったがため、模糊鬼、つまり自分は今ここにこうして生まれ存在しているのだ。

「スンキ」上ずった声でキオウはもう一度妻を呼んだ。

「あ、なた」蚊の鳴くような声でスンキは答え、震えながら首を持ち上げた。

「ああ」キオウは思わず手を伸ばし、妻を抱き締めようと望んだ。

だがテンニはそれを許さず、一步退いた。

「この釘が抜かれるのは、儂の体が元に戻ったその時だ」

「ー」キオウは牙をぎりりと噛み締めてテンニを見た。

「考えろ」テンニはもう一度顎を上げキオウを見下げた。「時間とやらの他に、儂の体を元に戻す術を思いついたなら、再びこの地に来て儂を呼べ」

テンニはそう言ったかと思うと更に背後に素早く下がり、藪の中へスンキともども消えた。

キオウが慌てて藪を掻き分けた時にはもはやその姿は消えていた。

ただそこには、黒く渦巻く天心地胆がうっそりと立ちはだかっていた。



「あの打鬼棒の奴が逃げたチイ」リョーマの背の上でスルグーンが告げた。「女をさらっていったキイ」

「なんだって」リューシユンが眉を寄せた。「くそ、間に合わなかったのか」

「とにかく、行きやしょう」ケイキョがそわそわする。「キオウさんに、一体どうなっているのか聞かないといけやせん」

「テンニは、陰曹地府へ行ったんだろうな」リューシユンは、前を睨んで言った。「キオウも、

追って行ったんじゃないのか」

「――いえ」ケイキョが答えた。「キオウさんは……身じろぎもせずに立ち竦んだままでやす」

「身じろぎもせずに？」リューシュンが不審そうに鼯を見る。「一体、何で――」だが鬼はすぐに眼をしばたたかせた。「まさか、何か言い含められたのか」

「言い含められる、って」今度は鼯が聡明鬼に訊いた。「一体、何を」

「わからん」リューシュンは首を横に振った。「とにかく、急ごう」

嫌な予感が鬼を襲うのだった。

何事もなければ、妻を捕えられて黙って見逃し、追いかけてもせずにいるキオウではないはずだ。

体つきは華奢でありながら豪胆とも言えるほどに敵を恐れず立ち向かうキオウ、冷徹なまでに策を練る才も持ち合わせているキオウ、その模糊鬼キオウが何故、妻を再び捕えられたというのに手をこまねいているのか。

テン二に、何を言われたのか――

山が見えてくるまでの時間が今ほど長いと思ったことはなかった。

だがリューシュンは飛び降りたいのを耐え、リョーマが全霊を傾け天を翔けてくれるのに任せた。

満天の星の下に、模糊鬼はいまだ独り、茫然と佇んでいた。

「キオウ」リューシュンはその姿を認めるや、今度こそ龍馬の背からひらりと身を躍らせた。

模糊鬼は、自分を呼ぶ聡明鬼の声に肩をぴくりと揺らしたが、すぐに顔を向けることはしなかった。

「キオウ、スンキが攫われたのか」リューシュンは模糊鬼の傍に来、自分よりも背の低い、少年

のような鬼の俯いた顔を覗き込むようにして訊いた。「テンニに――何か、言われたのか」

「――」キオウは眼を閉じ、ますます俯いた。

自分に、話せないのか。

リューシユンは、眉を寄せた。

それは何故か。

自分に話すと、スンキの身に危険が及ぶことだからか。

それとも、自分に話してもどうしようもないことだからか。

それとも、自分に話す気にならないからか。

自分は、そのことを話すに値せぬ者、信ずるに値せぬ者なのか――

「俺は」キオウはやっと顔を上げ、わずかにリューシユンの方へ顔を向けた、だがその眼を見ない。「しばらく、消える」

「何」リューシユンは戸惑った。「消える、って」

「すまない」キオウはまた眼を閉じ、そしてそれを開け、ようやくリューシユンを見た。「今は、何も訊かずにいてくれ」

「――」

キオウは言葉を失うリューシユンに意志の見えぬ視線をただ真っ直ぐに送り、それから後ろざまに跳んで茂みの中へと消えた。

「キオウ！」リューシユンは叫んだ。

だがその呼びかけに応えるものは、満天の星空の下で風に揺れる枝葉の音ばかりだった。

何が生き残るのだろう――

陰曹地府を歩きながら、そんなことを想う。

一体、誰が、何がこの先で、生き残るのか。  
鬼か、人か。

それとも、神か。

だが答えの出ぬまま、コントクは森羅殿に辿り着いたのだった。  
閻羅王の座に真っ直ぐに向かう。  
閻羅王の左右にはいつものように牛頭馬頭が侍っている。  
そして――

「ジライ！」

兄は叫んだ。  
弟がすぐに振り向く。

「兄さん！」

かつては人間、そして今や兄と同じ鬼と化した弟が、その鬼の牙を見せて笑う。

「大丈夫か」コントクは走り寄り、弟の肩や背に手を当てた。「痛みや苦しみは、ないか」

「ああ。大丈夫だ」弟は、人間として生きていた頃とまったく変わりなく、力を込めて頷く。「

兄さんも、怪我などしていないか」

「するもんか」コントクも、やっと笑った。「お前の事が心配で、体より心の方がくたくたになっているぐらいだ」

「今閻羅王さまに、武器を与えてくれるよう頼んでいたところだ」ジライは自分の背後、座にどっかりと腰を下ろし灼熱の色の眸を向けている閻羅王を手で示した。

「武器を？」コントクは驚いた。

自分も鬼ではあるが、閻羅王にそのような頼みをするなどついぞ思いついたこともなかった。弟は元降妖師、それだけに鬼も閻羅王も恐れることのない性分を、自分が鬼となった後も持ち続けているようだ。

「その武器は」閻羅王はゆるりと自分の顎に手を置いて訊ねた。「この儂の為に使うと、そのつもりで居るとのことか」

「無論です」ジライは振り向きざま答えた。「このままあのテンニという男を放っておけば、あ奴は未来永劫いつまでもどこまででも、閻羅王さまの命をつけ狙ってきます。一刻も早く成敗せねばなりません」

コントクは、弟の後ろ姿をまじまじと見つめた。

「閻羅王さま」と呼んではいるが、弟が本当に望んでいることは恐らく――陽世の存続と平和、それのみだ。

その為に、閻羅王を守るというのだ。

――弟は、鬼が生き延びることを望んでいるだろうか？

突如、またしてもその思いがコントクの心に浮かんだのだった。

テンニを斃した暁には、投胎して再び人間になりたい、ただその為だけに今武器を、と閻羅王に頼んでいるのだろうか。



コントクは、眉を寄せた。

弟を、鬼のままでいさせたいなどと自分は望むのか？

それは、違う。

首を振る。

弟が、ジライが本気でそれを望むのであれば、彼が人間になろうと鬼でいようと、どちらでも良い。

頷く。

「コントクよ」

閻羅王の不意の呼びかけに、はっと眼を見開く。

「は、はい」威儀を正す。

「さっきから首を縦に振ったり横に振ったりしておるが、どうしたのじゃ」閻羅王が訊く。

「あ、い、いえ」コントクは慌てた。「テンニと相對した際に首を少し、痛めてしまったよ  
うで……」もごもごまかす。

「なんだって」ジライが驚いて振り向く。「兄さん、さっきは怪我などしていないと言っていたのに、やっぱりしていたのか」

「あ、いや」

「貴様よもや、魑の化けたコントクなのではなかろうな」閻羅王が眉を吊り上げ改めて訊く。

「――」鬼の兄弟は、言葉を失った。

かかかか

閻羅王が大笑する。

牛頭馬頭はきよときよとと眼をさ迷わせ、コントクとジライは、気まずそうな笑いを互いに見交わすのみだった。

「さて」閻羅王は笑いを止め、ジライとコントクを真っ直ぐに見据えた。「うぬら鬼の、兄弟と呼び交わす者どもよ。では儂の手から、地獄の武器を取るがよい」横を向く。「牛頭」

「は」呼ばれた従者は叫ぶように答えた。

「三叉を」

「は」牛頭はただちに走り去り、すぐにまた戻って来た。

それらは閻羅王の言葉通り、閻羅王の手からコントクとジライに渡されたのだ。

「この三叉は」閻羅王は二足に渡しながら言った。「鬼を溶かすことも、消すことも出来ぬ。それでもあ奴、あの元降妖師の打鬼棒に、これで立ち向かえるか」

鬼の兄弟はそれぞれの手でその武器を受け取りながら、強く頷いた。「無論」



天心地胆には潜らずにいた。

山を駆け下り、途中からは龍馬の背に飛び乗った。

フラは、自分に従ってくれた。

すなわち聡明鬼たちの元から走り去る前に、既に主人の行く道に先んじて待っていてくれたのだ。

駈けて来たキオウの姿を認めるや、黒犬から龍馬へ姿を変え、主人が馬の背に駆け上るや周囲の木々をへし折らんばかりに低空を飛びはじめた。

「どこへ、行きますか」フラは訊いた。

「――」キオウは少しの間考えているようだった。

フラは、答えが出るまで高みに昇ることを抑えていた。

今上空に姿を見せれば、すぐにリョーマが追いかけてくるだろう。

方向が定まるまでは、ひたすらにリョーマ、そして聡明鬼から遠ざかることだけを考えた。

「フラ」やがて、模糊鬼が声をかけた。「お前の仲間を、探してくれないか」

「――仲間？」フラは驚きを隠せずに訊き返した。「おれの、仲間、ですか？」

「ああ。つまり龍馬を、だ。無論リョーマ以外のな」

「――」どうして、と問いたいところを、フラは飲み込んだ。「かしこまりました」ただそう答え、龍の首をぐいと上に向けて高みへと昇りはじめた。

キオウはフラの背を撫でた。「ありがとう」

フラが主人からその言葉を聞くのは、これが初めてだった。

主人が、内心ではいつも自分に対しそう思ってくれていることは、勿論十分に承知していた。だが言葉としてそれを聞いたことは、これまでなかったのだ。

キオウの心の在り方というものが、まさにスンキという存在を得て変化したのだろう。

フラは、そんな風を感じた。

そして同時に、スンキという存在がどれだけキオウにとって大きく重要なものであるのかも。

少しばかり、複雑な想いもあった。

自分は一度、陽世に置き去りにされた。

主人は、すぐにまた会いに来ると約束してはくれたが、いつも共にいられることはもう決していないのだ。

自分もはや、主人にとって何よりも大切な存在ではなくなったのだ――

フラは龍の首をぐっと下げ、それを持ち上げ、そうやって体を強くうねらせて速度を高めた。

今はそんなことを想っている時ではない。  
今主人は、自分の背の上に乗っているのだ。  
そして自分に仲間を探してくれと頼んだのだ。

仲間を探せ、と命令したのではなく。

フラは龍の眼をかッと開いた。  
従者である自分に「ありがとう」と言ってくれる主人に、今こそ全霊を尽くし応えなければ龍馬の価値など芥子ほどもありはしない。

龍馬を探すのだ。

自分と同じ、龍の首に馬の体を持つ巨大な霊獣を、一刻も早く。



「貴様、人間か」不意に、おぞましき声が背後からかかる。

肩越しに首だけ振り向けば、いかにも陽世を恨み人間というものを根絶やしにしてしまおうと企む、絵に描いたような悪鬼の姿があった。

「いかにも」リンケイは首だけを向けたまま応えた。「俺は人間だ。生きたまま、ここへ来た」

「人間」鬼は口をかッと開いて牙を剥き出し叫んだ。「喰ろうてやる」

「打鬼棒を探している」リンケイは静かに言った。「見たことはあるか」

「打鬼ー」鬼は、息を止めた。

周囲にいた他の鬼どもも、揃ってリンケイを見て体を凍りつかせた。「打鬼棒？」

「そうだ、打鬼棒だ」リンケイもぐるりを見回して応える。「見た者はいるか」

「貴様、あの男の仲間なのか」

「あの、黒焦げになった男の」

「貴様も俺達を血に変えてしまうのか」

「そんなこと、させるか」

「やってしまえ」

「喰ろうてしまえ」

鬼どもは、次から次へわらわらと集まり、口々に叫んだ。

――すごい数の鬼だ……ああ、ここは地獄だったな。

リンケイはそう想い、それから余りにも呑気な自分にふと苦笑した。

「こいつ、笑ったぞ」

「何が可笑しい」

「喰らえ」

「喰ろうてしまえ」

「これほどの鬼と闘うのは、初めてのことだな」リンケイは斬妖剣を抜いた。「だが簡単に喰らえると思うなよ」

まずは正面から来た鬼にその速度よりも速く近づき下から斬り上げ、直後右足をどんと踏んで上に跳び体を回して右手からの鬼の首を撥ねる。

着地すると同時に左手に剣を降りその鬼の体を二つに分け、返す剣で上から降ってきた鬼を刺し、すぐに下に振り抜きざま背後から来ていた鬼を右斜め下より斬り上げる。

リンケイは右と左に交互に剣を振り、合間に上へ跳び下へしゃがみして、迫り来る鬼どもを無駄な動きの一つなく斬り捨てていった。

尽きることを知らぬかと思うほどの鬼が、次から次へと攻め立ててくる。

リンケイはそれらを斬り捨て、また斬り捨てしながらも、心はただ一つの方向、すなわち森羅殿を目指してそちらへと移動していた。

そうする中でも鬼のひね曲がった爪が頬を擦り、髪を搔き、脛をかすめはする。僅かながらではあるが、陰陽師の肌のあちこちは傷つき血を滲ませた。

しかし心に絶望の影などが落ちることはついぞなかった。何故なら、リンケイには分っていたからだ。

「陰陽師殿！」

懐かしき声、自分を呼ぶ叫び声が、目指す森羅殿の方向から聞えた。

上に跳び、降りざまそこにいた鬼を縦に両断しながら、リンケイはにやりと笑みを浮べた。「コントク殿、ジライ殿、久しく」

その背後に、まさにその名を持つ二足が、それぞれの手に三叉を持ち姿を見せたのだった。

「うぬら鬼ども」ジライが、自身鬼となった今でもまるで降妖師としての誇りを全身に漲らせているかのごとき迫力を声に込め叫ぶ。「我らは閻羅王さまよりこの武器三叉を賜り、森羅殿の警固を任された。我らに断りなくここで諍いを起こすこと、断じて許さん。従わぬならばたちまちこの三叉の餌食となるか十八層地獄への門戸を開け放たれるかどちらかとなろう。その覚悟はあるのか」

鬼どもは言葉と顔色を失い、ばらばらと散じて行った。

「陰陽師殿、無事かー傷を負っているな」コントクが傍に駆け寄り、素早くリンケイの全身を  
検分する。

「なに、こんなのは傷の内に入りませぬ」リンケイはにこりと笑う。「お二足も、ご無事で何  
より」

「うむ」ジライが頷く。「腹を真二つに斬られはしたが、何が起こったのかよくわからぬまま、  
これこうして鬼となっていた次第だ」三叉を持ったまま両腕を広げ、自分を示す。

「ははは」リンケイは破顔した。「聡明鬼に、俺の中に入れとは言われませんでしたか」

「うん、言われた」ジライはまた頷く。

「うん、私も聡明鬼がそう言うのを聞いていた」コントクも、自分の鬼の耳に手をかざして頷  
いた。

「だが断った」ジライはにやりと笑った。「上天へ逝ってしまえば、もう皆とこうして話すこと  
ができなくなるだろうからな」

「そうですか」リンケイは元降妖師である鬼ーだがその中身はテンニと違い遥かに上天側に近  
いものだーを見て微笑んだ。「私でも、恐らく同じことをしただろうと思います」

「ーいや、待て」コントクはそこで初めて眼を丸くし、驚愕の顔を作った。「そもそも陰陽  
師殿、貴殿がここにいるということは、貴殿はつまりその、死んだということですか」

「いえ、死んではいません」リンケイは眸を伏せ首を振った。「生きたまま、自分に呪いをかけ  
ここに来ました」

「な」

「なん、と」

鬼の兄弟は揃って眼を剥き愕然とした。

「それはひとえに、テンニを葬る為」リンケイは眼を鋭く光らせた。「まさしく閻羅王に、力を  
貸す者として馳せ参じました」

「おお」

「それでは」

鬼の兄弟は顔を見合わせ、そしてまた陰陽師を見て感嘆の声を挙げた。

「我らと同じ目的ですな」

「そうですか」リンケイもいささか眼を丸くした。「では、閻羅王に力を貸す者というのは、何もひとりの者だけではなかったという事ですね」

「うむ」

「まさしく」

「あなた方ご兄弟と、不肖この私、そして」リンケイは、背後を振り向いた。「あいつ、聡明鬼も」

「そうだ」

「うむ、確かに」

「まだいますよ」リンケイはどこか楽しそうに、鬼の兄弟に眼を戻す。「スルグーンもそうなるし、ケイキヨも」

「ああ」

「模糊鬼キオウも、そうなるかも知れぬな」鬼の兄弟たちも楽しげな顔になる。

「ええ。ただキオウについては、かつて閻羅王を斃すという計略を持っていたものですから、閻羅王が信頼を置くものかどうかにはいささか危惧を覚えぬでもありませんがね」

「そうか」

「そうだな.....それに聡明鬼も、あれだけ閻羅王に楯突いてきた鬼だからな。閻羅王が信頼するものかどうか、これまた危ぶまれる」

「ああ、それにケイキヨも」リンケイは思い出したように人差し指を立てた。「一度、閻羅王から生死簿を盗んでいますからな。閻羅王の前に姿を見せることすら危ぶまれる」

「――」

「――」

ここに来て鬼の兄弟たちははた、と声をなくした。

リンケイは人差し指を立てたまま、しばし二足と無言で顔を見合わせた。



「ああ」それから口に拳を当て、陰陽師は咳払いをした。「そうですね。そもそも私がそれを命じた張本人でした……さて、閻羅王にこのまま会いに行く心積りではいましたが、果たして」

鬼の兄弟は顔を見合わせたが、どちらもすぐに物を言うことができずにいた。

「我らが」そしてコントクが慌てて言葉を継いだ。「お護りいたしましょう」

「うむ」ジライも頷く。「我らは既に閻羅王に謁見し護衛を任された身。我らの口添えがあれば必ずや」

「そうですか」リンケイはまた笑顔を見せた。「きっとお二足ならば閻羅王の信望も厚いことでしょう。では参りましょう」

三足はそうして、並び森羅殿に向かい始めた。

だがコントクとジライは互いにちらちらと眼を見交わし合い、互いに思うことを確かめ合った

。

この陰陽師であれば恐らく、唯独り閻羅王の前に出たとしても、結果として信望を得ることを遂げたに違いない、と。

何故ならば彼は鬼と成りここへ来たものではなく、陰陽師——策士としてそのまま、やって来た者だからだ。

フラは、長い時をかけて飛んだ。

飛び続けた。

海を超え、山肌を翔け昇り、谷を滑り降り、自分と同じ姿を持つ霊獣を探して、飛んだ。

自分の背に乗る主人キオウは、何も言葉を発しなかった。

だが決してのんびりと、あちこち巡る空の景色を楽しんでなどいないことは解っていた。

それどころか、ただ龍馬の背に乗るだけで他に為す術もない己の立場に歯噛みする想いでいるのに違いない。

フラもまた、歯噛みする想いであった。

何故、自分は龍馬をなかなか見つけられずにいるのか。

そこにいないものを見つけるなど不可能だ、という理屈よりも、今すぐに主人を満足させ何としてもその不安な想いから救い出したい、その気持ちの方が大きく重く、押し掛かってきていた

。

なのでフラもまた無言のまま、ただ飛んだ。

飛び続けた。

やがて砂漠の上に出た。

木も草もなく、人も獣もない、ただのっぺりと広大で果てしのない、砂の大地。

今は真昼を大分回ったところで、陽光は弱まっているが、大気は熱かった。

それでもフラは文句の一つもこぼさず飛び続けた。

「初めてだな」不意にキオウが背の上で呟いた。「こんな景色を見るのは」

「はい」フラは答え、龍の眼を細めた。

少し、嬉しく思った。

主人に、まだ見たことのない景色を、自分の飛翔の力で見せてやれたことが、嬉しかった。

無論空を飛ぶことのできぬスンキには、為し得ぬことだ。

だがフラは、それよりも龍馬を見つけることの方が先だと自分を戒めた。

しばらく飛び続けた時、ついにそれを見つけた。

黒い龍馬が、小さな泉のほとりに寝そべっていたのだ。

「キオウさま」フラは速度を上げ、叫ぶように主人に告げた。「いました。龍馬が、あそこに」

「いたか」模糊鬼は馬の背から身を乗り出すようにして確かめた。「ああ、確かに龍馬だな。あいつ独りか」

「独り.....のように、見えます」フラは飛びながら、その黒い龍馬の周囲を探した、だが主人と思しき人間あるいは精霊の姿は見えなかった。

「そうか.....」キオウは少し考えた。「龍馬を従える者にこそ、知識を借りたかったんだが.....とにかく、行こう」フラを促す。

「はい」フラはやはりそう答え、泉のほとりに降り立った。

黒い龍馬はその首をもたげ、空から降りて来る来訪者に眼を向けていたが、立ち上がったたり威嚇の所作を見せたりはして来なかった。

悪意のある来訪ではないことを感知しているのだろう。

だがそうだからといって、素直に協力してくれるかどうかは判らなかった。

キオウは次第に大きくなる黒龍馬の姿を見つめながら、どのように話を切り出せばよいかを考えた。



——どこへ、行くべきか。

リューシユンもまた、めまぐるしく考えを奔らせていた。

キオウを、追うのか。

それともリンケイを、追うのか。

「フラが.....消えやした」ケイキョが、痛みに耐えるかのような声を絞り出す。

「消えた？」リューシユンは驚いて訊き返した。

「へい、かなり遠くへ飛んで行ったんでやしょう。或いはこちらに気を送るのを止めたか」

「あいつ、何処へ行ったんだチイ？」スルグーンが問う。「何か探しに行ったのかキイ？」

「ー分らん」リューシユンは首を振るしかできなかった。「探しに.....けど、何を？」彼自身も問う。

「スンキをテンニに攫われてそれを追うとしたら、陰曹地府へ行くはずでやすが」ケイキョが尻尾をくるりと回す。「しかしそれなら、しばらくの間消える、てな事あ、言うはずありやせん」

「テンニに、脅されてるんだな」聡明鬼はそう考えた。「スンキを人質にしてーあの体を治せ、とでも言われたか」

「しかし、なんでキオウさんに？」ケイキョが首を傾げる。「医者でもなんでもないので」

「ー」リューシユンは、リョーマを見た。「魔焰、だったか」

「それだチイ」スルグーンが頷く。「龍馬の吐く焰で焼かれた体を治す方法は、普通の医者には分らないんだキイ」

「けど、キオウさんには分るってんですかい？」

「龍馬を従える者だからな.....そうか、キオウはそれを要求されて、その方法を探しに行ったわけか」

「それじゃ」ケイキョはもう一度尻尾をくるりと巻いた。「どうしやすか」

「ー」リューシユンはぐるりと周囲の景色を見渡した。

どこにも、いない。

リンケイも、玉帝も、自分に答えを与えてくれる存在は今、どこにも。

「体が治るまで、テンニは森羅殿へは行かないはずだ」リューシュンは低く考えを述べた。「むしろ陽世にこそ身を潜めるかも知れん。それならば、俺たちはここ陽世でテンニの目論見を阻むまでだ。あいつの体を治させることなく、スンキを取り戻す」

「テンニを探す、と」ケイキョが確かめる。

「ああ。陰曹地府に行ったあいつは、自分の力でなんとかするだろうーそれにコントクやジライも、あっちにいるはずだからな」

あいつ、とは無論、陰陽師リンケイのことだ。

鼬と雷獣、そして龍馬は揃って頷いた。

「今のテンニは打鬼棒と、斬妖剣の両方を持ってる」リューシュンは皆の顔を順繰りに見た。「お前達は斬妖剣で切られれば傷ついたり、下手をすると死ぬ。俺は打鬼棒で打たれれば血となって流れて消えてしまう。それでも、奴を追うしかない。それでいいか」

「へい」

「それでいいチイ」

鼬と雷獣は答え、龍馬は龍の首を縦に振った。

「よし」リューシュンも頷く。「お前達の法力に頼む。探し出した後奴を搦じ伏せるのは、この俺に任せろ」



砂の上に降り立ち、その黒い龍馬の近くへ、両手を拡げた恰好でゆっくりと近づく。敵意のないこと、攻撃するつもりのないことを示すためだ。

だが、なんと言葉をかければよいかはまだ見つかっていなかった。

キオウは無言のまま、ただゆっくりと歩を進めた。

「あなたは、鬼ですね」

突然、龍馬の方から話しかけてきた。

思わず立ち止まる。

「鬼でありながら、龍馬を従えている」黒龍馬は静かに言った。

背後から、フラが黒龍馬の挙動に全霊でもって警戒する気配が凄まじい熱を帯びて伝わってくる。

もしもこの黒龍馬がキオウに僅かでも牙を剥いたならば、フラはたちまちその喉首に噛み付き千切り飛ばすだろう。

「そう、俺は」キオウは眼の前の黒龍馬よりもむしろ自分の従者であるフラに恐れに似たものを感じながら答えた。「模糊鬼キオウだ。後ろの龍馬は、フラ」

「私に、何か用ですか」黒龍馬は訊ねた。

「おい」フラが、焰こそ吐かなかったがキオウの眸を細めさせるほどの熱を帯びた声を挙げた。

「ご主人さまはちゃんと名乗ったぞ。お前も名を言え」

「フラ」キオウは振り向き諫めた。「いいんだ」

「私の名はトハキ」黒い龍馬は静かに答えた。「この泉を、護っています」

「泉を？」キオウはトハキと名乗る龍馬を見た。「独りでか」

「いいえ」トハキは龍の首を振った。「私にも主人がいます。主人は今、砂の上で力尽きて倒れた者を救済しに行っています」

「救済――」キオウはまた眼を細めた。「お前を使わず、独りで？」

「はい」トハキは眼を閉じた。「主人はそうする時、いつも一人で行きます」

「救済、というのは、つまり――助ける、ということか」キオウは言葉を選びながら訊ねた。「死にそうになっている人間を生き返らせてやると、そういうことか」

「いいえ」トハキは眼を開けた。「死にゆく者の心を、安らかにしてあげるのです」

「なんで」不思議そうな声を挙げたのは、フラだった。「お前が行って、この泉の水でも飲ませてやれば、生き返るんじゃないのか」

「それをすれば、この泉の水はたちまち人間たちに貪り尽くされからからに干上がってしまうでしょう。主人は人間たちをこの泉に近づけさせないよう、自分から出向いて行きそこで人間たちの命を安らかに終えさせるのです」

「――そうか」キオウは小さく、そう言うしかなかった。「ところで俺は、あんたに――できればあんたの主人にも、訊きたいことがあるんだ」

「何でしょう」トハキはゆっくりと瞬きをし、飽くまでも静かな声で訊ねた。「模糊鬼キオウ」

「――トハキ」キオウは名を呼ばれたことに対し、名を呼び返して応えた。「あんたも、魔焰を吐くと思うが――その焰に焼かれた体を、すぐに元に戻す方法を知っていたら、ぜひ教えて欲しい」

「――」トハキは少しの間黙ってキオウを見た。

キオウは眼を逸らすことなく待った。

「元に戻す、ということではできません」トハキは言った。「龍馬の焰に焼かれた者は、たちどころに死んでしまうからです」

「普通はそうなんだが」キオウは首を横に振った。「実は死ななかつた者がいる。そいつも鬼で、黒焦げのまま今も動いている」

「鬼だからです」トハキはやはり静かに答えた。「すでに死んでいるではないですか」

「――そう、なんだが」キオウは言葉を継ぐことができなくなった。

「鬼であれば、転生して人間に生まれ変わることのできれいな体を手に入れられるでしょう」トハキは、どこか探るような眼でキオウに言った。

「ああ……だが鬼は、すぐに転生できるものじゃない」キオウは眉を寄せた。「俺もそれを思い、時間が経てば戻ると教えたんだが、あいつはすぐに治せと言った。そうしないと俺の」さらに眉を寄せる。「妻と、子が……消されてしまう」

「妻と子、それは人間なのですか」

「いや、鬼だ」

「そうですか」トハキは少し考えた。「人間ならば、私の主人が救済をしてあげられるのですが」

「お前」フラが怒鳴った。「キオウさまの話をちゃんと聞いているのか。救済だか何だか知らないが、そんなものを頼んでるんじゃないぞ。焼け焦げた鬼の体を元に戻す方法を聞いているんだ」

「フラ」キオウは、まるで自分が焔に焼かれたかのような表情をして諫めた。「俺が話をする」

「けど」フラは尚も言い募る。「こいつ、なんだか知らないけど、頭に来る」

「フラ」キオウはもう一度呼んだ。

諫めはするが、確かにキオウの内心にも、さっさとここを立ち去り、別の龍馬を探した方が得策かも知れないという想いが生まれつつあった。

どこか不思議な、興味をそそる雰囲気を持ってはいるが、喫緊の役には立ちそうもない相手だ。

「模糊鬼キオウ」不意にトハキが呼んだ。「あなたと、そのフラという龍馬は、かつて人間を焼き殺しましたね」

「――」はっと息を呑み、キオウはトハキに振り向いた。「――なぜ、それを」

「それも無作為に、多くの人々を」

「――」



「そのようなことをしておきながら、自分の妻と子を助けるために、魔焰で焼けた鬼の体を治す方法を教えろとは、なんと虫の良い話でしょう」

「――」

「あの人間たちも、今すぐに焼けた体を元に戻して欲しいと思っていたことでしょう。彼らは転生して、望み通りきれいな体に生まれ変わったのでしょうか」

「――」キオウはがくりと膝を地についた。

何故、この龍馬はそれを知っているのか。

霊獣の持つ霊的な力により、相手の過去の所業を読み取ることができるのか。

過去の、所業――だが決して消え去ることも、そして決して許されることもなき、悪鬼の業。

自分は妻と子を得、もはや閻羅王に抗する気持ちはなく、このままひそやかにそして穏やかに、心安らかに暮らしていくのだと思っていた、だがその背後には、自分のせいで命を絶たれたあの大勢の人間たちの悲鳴と怨恨が、今も、渦を巻き轟き続けているのだ。

忘れたつもりでも、それは永遠に忘れられるものではない。

そしていつかきっと、スンキにもそれが知られてしまうに違いない。

その時彼女は、果たしてどのように――

キオウはうな垂れ、ぎゅっと眼を閉じた。

「おい」フラが、殺気のこもった声を挙げた。「トハキといったな。お前、俺と勝負しろ」

トハキは何も言わず、ひざまづくキオウの体越しにフラを見た。

「俺が勝ったら、黒焦げの鬼の体を治す方法をご主人に教えろ。いいな」フラはそう言うなり、大気を切り裂くかのように上空高く跳び上がった。

キオウは眼でそれを追い、そして音を聞いた。

トハキと名乗った黒龍馬がはじめて立ち上がり、それから巨大な馬の蹄を蹴って同じく跳び上がる、音を。

空に昇ってきたトハキを迎え撃つように、フラはかっつと口を開け迫った。

トハキの黒き体は波を打つように空中でかわし、馬の尾でフラの体をしたたかに打ち据えた。

だがフラも同時にそれをトハキに対して行っていた。

互いに尾で体を打ち合った龍馬は、空の上で睨み合い牙を剥き合った。

ごう

同時に、二体は焰を――魔焰を吐いた。

フラのものは、紅き焰。

トハキのものは、黒き焰だった。

体の色と同じ黒焰を、トハキはフラに――フラの紅き焰に、ぶつけた。

二つの焰は互いに押し合い、消し合いし、しばらくして同時にふっと途切れた。

だが二龍馬は休むことなく、次に馬の前足を空中で高く上げぶつけ合い、押し合った。

そうしながら互いの頸に噛み付かんと牙を剥きせめぎ合う。

力はまったく拮抗しているように見え、どちらも相手に傷を負わせ優位に立つことができずにいた。

キオウは従者フラを制止することも叶わず、ただ地上から二龍馬の争う様を見上げるばかりだった。

トハキが尾を鞭のように振り、フラが後足を高く蹴り上げてそれをかわし、直ぐにフラが蹴り上げた足の蹄をひねって敵の横腹に食らわそうとするのをトハキの脚もまた素早く持ち上げられ大岩のぶつかるがごとき音を発して蹄同士弾き合う。

そのような光景を眺めるうち、ふとキオウは、かつて山の中でフラとリョーマが闘った時のことを思い出した。

あの時の闘いでフラは深く傷つき、自分は寝る間も惜しんで介抱したのだ。

その中で、スンキといろいろな言葉を交わし—そこから自分はスンキという女に、少しずつ心を開いていった。

スンキを—そのスンキを、一刻も早くこの手に取り戻さなければ。

キオウは牙を噛み締め、眼を細めて上空を睨んだ。

トハキの動きを追う。

息を殺し、黒龍馬の波打つ頸、しなやかに舞うがごとく躍動する体、それを瞬きもせずに見つめる。

そして模糊鬼はついに機を捉えた。

「フラ、右の腹だ」周囲の砂を吹き飛ばすかの勢いでキオウは叫んだ。「噛め」

次の瞬間、フラはまさしくトハキの腹部にぐさりと牙を突き立てていた。

黒龍馬は大地が裂けたかと思わせるような叫びを挙げ、激痛に身をよじった。

だがフラの牙は容赦なくその肉にがっきと食い込んだまま離さなかった。



よく、喋る女だ。

男は朦朧とした意識の中で、そんなことを思っていた。

正直なところ、女が話している内容などさっきから頭の中にまで入ってきていなかった。

そうでありながら、男は女の言葉に何度も頷き、ぼんやりとした眼差しを向け、耳を寄せた。

そうすることで、女の手から水を—自分の命を救う水を、もらうことができるからだ。

「一度に大量の水を飲むのはよくない」女は黒い幕を男の頭上にかざしてそう言った。「少しずつ飲め……そうしながら、私の話を聞くのだ」と。

女の口からは、マトウ様、という名が幾度も出てくるようだった。

男は一度、そして二度、声の出ぬ喉からマトウ様、というその名を唇だけで繰り返し、その度女は大きく頷いた。

そして一度は、男に微笑みかけもした。

頭上にかざされた黒い小さな幕の向こうには、陽の熱にぎらぎらと揺れされている熱い大気のあるのが見える。

「今私たちは、マトウ様の言葉に耳を傾け、そして行動を起こさねばならぬ岐路にまで来ている」女は言い、男の口許にもう一度水の入った甕を近づけた。

男は唇を震わせ、注がれる冷水を体に取り込んだ。

また一つ、命が自分の手に戻って来る――そのような感覚が全身を駆け巡る。

「私たちは、人間だ」女は男の口から甕をすぐに離し、言葉を続けた。「人間だからこそ、さまざまなことを考え、さまざまなことを学び、そこから得た知識を活かして更に今あるこの世界、つまり陽世の姿を、我々人間にとってより良いものに変化させてゆくことができるのだ」

男は、女が何を言っているのかまったく理解できぬまま、小さく頷く。

「それは人間であるがゆえに為し得ること。鬼や閻羅王には到底為し得ぬことだ」

もう一度、うすぼんやりと頷く。

「マトウ様の所へ行こう」女もまた頷きながら、そう言った。「我々人間の、人間たる素晴らしさをより深く知るのだ。そうすればお前は、本当の意味で命を手に入れ、今までとまったく違う、素晴らしい世界に生きることができる」

女はそう言ってから、ついに食べ物を――水だけでなく腹を満たす食物、それは芋を干したも

ののように見えた――男の口許に差し出した。

男は眼を剥いてそれに噛み付き、獣が人の手から餌を貪るがごとく齧り取り噛み砕き飲み下した。

女が再び甕を差し出すと、男はごくごくと音を立て、そして満足そうに息をつき眼を閉じた。

「トハキ」女は男の落ち着いたのを見届けてから、熱く揺らめく空に向かって大きく声を挙げた。

しばらく、何事も起きなかった。

「トハキ？」女は支えていた男の体を地に置き、立ち上がった。

男は震える手を遠ざかる女の姿に向かって差し伸べたが、女は振り向きもせずただ空をじっと見上げていた。

やがて、

「何奴か」

と呟くと、そのまま――男に振り向かぬまま、歩を踏み出し視界から消えた。

「あ……お……う」

男はなんとか引き止めようと必死で声を挙げた、だが唇はいまだ思うように動かず、言葉が結べなかった。

無論女に結べぬ言葉の通じるはずも届くはずもなく、二度と女の姿は男の視野の中に戻って来なかった。

男の視野にあるのはただ、おのれの震える手、その向こうにぎらぎらと揺れる熱い空のみだった。



リョーマは、高く飛翔した。

山を越え、海を渡り、また山を越え海を渡る。

鬼と化した元降妖師は勿論、龍馬の姿もまったく見えてこなかった。

リューシュンは、大声でその名を呼びたいところを我慢していた。

呼んだからといって、返事が返ってくるわけなどありはしない。

フラは、しばらく消えると言ったキオウを乗せ何処とも知れぬ場所を密やかに隠れるようにして飛んでいるはずだ。

テンニに至っては――

「ケイキョ」リューシュンは鼬に振り向いた。

「へい」

「あの、天心地胆」聡明鬼はじっと鼬を見下ろした。「あそこに、もしかしたらいるのかな、テンニの奴」

「――」鼬もししばらく聡明鬼をじっと見た。「上天、の」

「うん」リューシュンは頷いた。

テンニを追い陰陽界を駆け、最後に抜け出た天心地胆――それは大地から遥かに離れ、上天に一番近いところにあるものだった。

リューシュンとケイキョ、そしてコントクはそこから大地に向かって飛び降り、だが一歩及ばずテンニの毒牙によりジライの体が真二つに斬られたのだ。

あの、遥か遠くにある天心地胆――

だがそこへ行くには、まず陰陽界に入り、そこから長い間走り続けてゆかねばならない。

そして果たしてそこにテンニがいるのかどうか、確たる証もない。

そんなことをしている間に、万が一、テンニの体が回復し森羅殿へ攻め込んでいったなら――

リューシュンは首を振った。

今は一刻を争う。

間違いなく陽世にいるはずのキオウを、まずは探そう。

「リョーマ」聡明鬼は前を向き、龍の後ろ頭に向かって告げた。「フラを、とにかくフラの気を探してくれ。キオウを止めるんだ」

答える龍馬の声は、鬼には届かない。

だがリューシュンは、リョーマが

「わかった」

と答えたに違いないのを確信した。

「鳥たちだチイ」スルグーンが呟いた。

「鳥？」リューシユンは振り向いた、だがそこにスルグーンの姿はなかった。「スルグーン？」慌てて周囲を見回す。

雷獣は小さいながらも翼を広げ、群れ飛ぶ鳥たちのいる方へと向かっていた。

「ガルダ様」

思った通り、鳥たちはすぐにスルグーンを認め憧憬の眼差しと声音で迎えてくれた。

「お前たちチイ」スルグーンは鳥たち――雷獣となった今も自分を神と崇めてくれる信奉者たちを見回して、言った。「龍馬を見かけなかったかキイ」

「龍馬？」

「ナーガでございますか？」

鳥たちは一様に、驚いた声を挙げる。

「ナーガじゃないチイ」スルグーンは首を振った。「精霊だが神ではない、紅い眸を持つ龍馬だキイ」

「それは」

「いえ、私たちはその龍馬を見ていません」

「お役に立てず申し訳ありません、神よ」

「しかし私たちもその龍馬を探しましょう」

「ええ、その紅い眸を持つ龍馬を」

鳥たちはスルグーンを悦ばせようと、口々に述べた。

「そうしてくれると助かるチイ」スルグーンは頷いた。「他の鳥たちにも呼びかけてくれるかキイ？」



「はい、ガルダ様」

「むろん私たちは必ずそうします」

「お役に立てるのであれば、喜んでそれを致します」

「うん」スルグーンは、ふと陰曹地府で再会した男の顔——それは楽しげに、眼を細めて笑っている——を思い出した。

体が、くすぐられるように感じる。

咳払いをして、彼は言った。

「ありがとうチイ」

「おお」

「なんと」

「もったいない」

「ガルダ様」

「我らが神よ」

「よし行こう」

「うん。すぐに行こう」

「きっと見つけるのだ、龍馬を」

「では神よ、ご無事で」

「きっと我らが龍馬を見つけてご覧に入れます」

「お任せ下さい」

鳥たちは嵐のごとき歓喜の声を空に響かせ、それぞれの方向へ飛び去っていった。

スルグーンはそれらを見送り、そしてまたリョーマの馬の背の上に戻った。

「何を話してきたんだ？」聡明鬼が訊く。

「龍馬を探してくれと、頼んだチイ」スルグーンはぼそぼそと答えた。

「そうか」聡明鬼は大きく頷き、それ以上は訊かなかった。

リョーマは、また海を越え、山を超えて進んだ。

やがて遙か先に、海でもなく山でもない、砂の大地が細く姿を現しはじめた。



森羅殿を、リンケイは初めて見た。

それは一口に言ってどす黒く、すべてを呑み尽し二度と吐き戻さぬ、文字通り血も涙も容赦もなき構えの館であった。

あたかも土の塊を怒りに任せて殴りつけて形づくったような、心安らかならざる形容を示している。

怒りに任せて殴りつけたのは、閻羅王か、はたまた玉帝なのか――

そんなことを想う内にも、コントクとジライに導かれてリンケイは殿内に足を踏み入っていた

。

さて――

閻羅王は座に就き物も言わずじっとこちらを見渡していた。

リンケイも視線を返ししながら、特段歩を速めるでも緩めるでもなく歩み寄って行った。

――閻羅王は、俺をどう見るか。

半ば身を切られるほどの張り詰めた大気を、そして半ば愉悦にも似た楽しみを、リンケイは心の内に闘わせていた。

どちらにせよ、生きてここから出られるものではあるまい――

――なにしろ、呪いにかかってしまったのだからな、俺は。

口許が、つい笑いを帯びる。

「貴様は何者じゃ」

閻羅王が、恫喝にも似た銅鑼声を張り上げる。

傍に仕える牛頭馬頭は、今更のように背を伸ばし、まるで自分らが怒鳴られたかのごとくに威儀を正す。

「人として、生きたままここに来た者」リンケイは、視線をまっすぐ閻羅王に向けたまま答えた。「陰陽師」

「――」閻羅王は眸を動かさず、じっとリンケイを見据えた。

生半可の人であれば、その眼差しのみで命を絶たれるかも知れない。

それほどに、鋭く、血も涙も容赦もなき視線であった。

「人として、生きたまま、とな」閻羅王は繰り返した。「して、その目的とは何ぞ」

「無論」リンケイは躊躇することなく答えた。「テンニを斃すため」

「――」閻羅王は口を閉じ、リンケイをただじっと見た。

リンケイもまた、閻羅王をじっと見つめ返した。

「貴様」やがて閻羅王はまた口を開いた。「生死簿を儂の許から盗んだ張本人か」

「――」リンケイは、この問いに対してはすぐに答えることをしなかった。

代わりに、コントクとジライが手に三叉を持ったまま緊張の面持ちでずいと前に進み出たのだ。

「閻羅王様」コントクが叫ぶように言った。「この者は、生死簿を悪意の企みのために盗んだのではありませんぬ」

「それはそもそも、閻羅王様を斃す目的を持っていた模糊鬼に対しての方策を練るため」ジライが続けて叫ぶ。

「そう、そもそも閻羅王様をお守りするためだったのです」そして二足は揃って叫んだ。

――なんとこの兄弟、策士であることよ。

リンケイは笑い出したいのをぐっと堪えた。

「なんと」閻羅王は眼を丸くした。「儂を守るためとな」

リンケイもまた眼を丸くした。

――なんと、信じるかよ。

「天晴じゃ、陰陽師とやら」叫んだのは牛頭と馬頭だった。「いざ、我等と共にテンニなる悪鬼を斃し、閻羅王様に心安らかにこの世を治めていただこうぞ」

「――」リンケイは、眼を丸くしたまますぐに返事ができずにいた。

——まるで、正義を貫く者の言い草だな……まあ、この状況にあっては、その通りだな。

「はい」リンケイは頷いた。「必ずや」

——そしてまた、俺も策士だ。

「何を今更言ってるんだ」

呆れたようなリュージュンの声が、まるですぐ隣にいるかのように聞こえる。

陰陽師はそこでやっと、微笑みを浮かべた。



トハキは空中で激しくのた打ち回り、なんとかしてフラの牙から我が身を離そうとした。

対するフラもまた龍の頸と馬の体をしなやかにそして素早くかわし、絶対にトハキから牙を抜かせぬという決意を強く示していた。

「トハキ」キオウは叫んだ。「魔焰に焼かれた体を戻す方法を言え。そうすればフラの牙を抜かせる」

ギオオオオオオウ

トハキはもはや言葉では答えず、矢鱈に叫喚するのみだった。

フラは敵龍馬に噛み付いているため叫び返すことこそ叶わなかったが、その眼、紅く燃え立つかのような視線を突き刺すかのようにトハキに据え、微塵も揺らがせなかった。

二龍馬は激しく暴れ回り、トハキは耳を劈くほどの声を挙げ、十八層地獄も斯くやと思わせるほどの壮絶な光景がいつ果てるともなく続いた。

フラは、トハキをこのまま殺すかも知れない——キオウはそう予測した。  
だが今の自分に、もはやフラの怒りと勢いを制することは出来ぬだろうと思った。  
実のところ、トハキの声は次第に力を失いつつあるように聞こえたのだ。

「フ——」

「トハキ！」

キオウの声を押し退けて、女の声が叫んだ。  
はっとして振り向くと、キオウの背後に一人の人間の女がいつの間にか立っていた。

——この女が、トハキの主か。

キオウは咄嗟に悟った。  
女はキオウには目もくれず、その傍を走り抜けて暴れ回る二龍馬の下に近寄った。

「危ないぞ」キオウは思わず叫んでいた。

「トハキ」女は返答せず、再び龍馬を呼んだ。

呼ばれた黒龍馬は苦痛に身をよじりながらも主を見下ろし、  
「リシ、さま……」  
と、か細い声で呼び返した。

「貴様」リシと呼ばれた女は、そこで初めてキオウに向き直り、怒りのこもった眼と声で唱えた。  
。「何故こんな事をする。何者だ」

「——」キオウは、これほどまでの憎悪と殺気を放つ人間を見たことがなかったので、少し気圧されるものを感じつつも「俺は、キオウ」と答えた。

「鬼か」リシは顎を引き、上目遣いでキオウを睨んだ。「鬼の分際で、龍馬を操り陽間を掻き乱すか」

「そうじゃない」キオウは首を横に振った。「俺は龍馬を遣う者に訊きたいことがあって旅をしているのだ」

「ふざけたことを言うな」リシは腕を上には伸ばし、いまだ暴れるトハキとフラをその指で差した

。「あれが、人にもものを訊ねる者のする事か」

「――」キオウにも言いたいことはあったがそれをぐっと呑み込み、空を見上げ「フラ。その龍馬を離せ。戻って来い」と命じた。

フラは、素直に牙を抜き、トハキを睨んだまま砂の上に降りた。

黒龍馬トハキはもはや力尽き、砂埃を高く舞い上げて大地に落ち、そのまま動かなかった。

「トハキ」リシは狂ったように叫び、従者に駆け寄った。

模糊鬼にはかける言葉もなかった。

フラもかなりの消耗であつたらしく、黒犬の姿になりキオウの足許に蹲り眼を閉じ息を整えていた。

「ああ、トハキ、死ぬな。今、薬を」リシは取り乱したように肩に提げていた布袋に手を突っ込んで探り、浅黄色の水の入った小瓶を取り出した。

だがそれは、とても今のトハキの傷の大きさに間に合うとは思えぬほど微量のものだった。

「トハキ。トハキ」それでもリシは名を呼び続け、その水をトハキの傷に振りかけ始めた。

ギウウウウウ

トハキが、首を絞められたような声を絞り出す。

薬が染みるのか、主人に甘えて啼いているのかわからなかった。

キオウも自分の荷を探り、薬草の束を取り出して女に近づき「これを」と差し出した。

女は振り向きもせずにはいたが、しばらくして突然手を出しキオウの手から、キオウを見ないまま薬草だけを奪った。

そうしながらもう片方の手で再び袋を探り、鉢を取り出し、キオウの薬葉をちぎり入れて浅黄色の水をかけ、手早く擦り合わせた。

――この女……陰陽師か？

その慣れた手管を見て、キオウはふと思ったのだ。

だが陰陽師といえば、今まで共に闘って来た冷静で智に富むあの男の姿がどうしても浮かぶ。

今日の前にいるこの女の、感情に任せた取り乱し方は、キオウにとってはあまりにも陰陽師の名から程遠い印象だった。

「鬼」

突然女は呼んだ。

「――何だ」キオウは答えた。

「貴様は何を知りたいのだ」女は訊いた。「龍馬を遣う者に、何を訊きたいというのだ」

「魔焰による火傷を治す方法だ」キオウは答えた。「それも時間を置かず、直ちに」

「――」女はトハキを見つめたまましばらく黙っていたが、やがてキオウに振り向いた。「貴様自身も龍馬を遣う者でありながら、それを知らぬのか」

「――ああ」キオウは小さく頷いた。「時間に任せることしか、思い浮かばない」

「この薬草」女は鉢の中に出来上がった糊状の薬を手で直に掬い取った。「これを持っていながら、それを使うということを知らぬのか」言いながら掬い取った薬をトハキの傷にそっと擦り込む。

ギウウウ

トハキがまた喉の奥で啼く。

「知らな、かった」キオウは頭を垂れるようにして眉を寄せ正直に告げた。「俺は……俺には、あんたほどの知識がない」

「何の為にその知識を学ぶ」リシはトハキの体をゆっくりとさすりながら訊く。「龍馬遣いとしての精進の為か」

「――いや」キオウは足許に伏せるフラを見つめて、少し躊躇った後答えた。「それを知らなけ



れば、俺の妻と子が殺されるからだ」

フラは何も言わず、眼を伏せ体を伏せたまま動かなかった。

キオウはしゃがみ、黒犬の頭から背にかけてを手で撫でた。

こんな身勝手な自分に、変わらず従ってくれるフラに、何と言葉をかければ感謝に絶えぬ想いのすべてを伝えられるのか、知る由もなかった。

「誰の体を治すのだ」リシはさらに訊く。「どこかの町の統治者か」

「――違う」

「賊か」

「――そうじゃない」

「鬼か」

「――」キオウはフラを見たまましばらくして「そうだ」と答えた。

「お前の、仲間か」

「違う。敵だ」キオウはその問いには直ちに答えた。「仲間が俺の妻と子を殺すわけがない」

「――」今度はリシが黙り、少ししてふふふ、と低く笑った。「それもそうだな」

キオウは戸惑いを覚え、ただリシの次の挙動、もしくは言葉を待った。

「貴様は鬼のくせに、なかなか頭がいいと見える」リシはトハキをさすり続けながらまた言った。「土地爺か」

「いや……違う」キオウは首を振った。「俺は模糊鬼……地獄で生まれた鬼だ」

「模糊鬼？」リシはそれを聞いて初めて、キオウに振り向きその顔をじっと見た。「――随分と、若いのだな」

キオウは黙っていた。

「なるほど土地爺ではなさそうだ……だがそれならば何故、陽世に居るのだ」

「――話せば、長くなる」キオウはリシの強き視線から眼を逸らし足許の砂を見下ろした。

「まさかお前の妻というのは、人間なのか」リシは眉をひそめてそう訊いた。

「――」キオウは、このリシという女に言い知れぬ恐れを腹の底で感じ始めていたのだった。感情的ではあるが、それ以上に理知的でもあり、洞察力もある。

「お前の仲間」リシはさらに問う。「それも、よもやまさか……人間なのか」

「正直に言おう」キオウはぐいと顔を上げリシを正面から見据えた。「人間も、いる。鬼も、いる。ついでに言えば精霊も、いる」

「なんと」

「俺の妻は、今は鬼だが、一緒になった時は人間だった」

「――」リシは口をあんぐりと開けたが、言葉を思いつけずにいるようだった。

正直に言う、そのことが、果たして自分の進退にとり意味を成すものなのか、はたまた害をなすものなのか、この時点でのキオウには判断がつけられなかった。

だが――鬼の勘、とでも呼べるものが、否――鬼の勘、としか呼び得ぬものが、正直に言うことを強く求めていたのだ。

「何故」リシはやっと、なかばかすれた声で言葉を発した。「人間の女が、鬼のお前と一緒にあったのだ」

「――」キオウの心中に、白い花を手に持ち花のように笑っていたスンキ、人間であった頃、まだ自分と触れ合う前のスンキの姿が浮かんだ。

その姿を見た時、自分は何も考えられず――自分が鬼であるとか、相手が人間であるとかいう制約など欠片も思うことなく、ただ抱き締めていたのだ。

あの頃感じていた、燃えるようでありながら水の中に揺らめくような感覚――今にして想えばそれが鬼にとっての思慕、恋慕といえるものなのだろう――が、ふと蘇る。

「わから、ない」キオウはそうとしか答えられなかった。「ただ——そうなりたいと、俺たちは思った」

「貴様がかどわかしたのではないのか」リシは眉を険しくさせた。「その女を」

「——」違う、とは言えなかった、確かにそもそもは、かどわかしたものだっただけだからだ。

「そうなのだな」リシは眉をひそめたまま口元で笑った。「そうだろう、そうでなければ人間の女が、鬼になど嫁ぐはずがない」

「違う」キオウは首を振った。

「いや、違わん」リシも首を振った。「その女は、お前に嫁ぐことなど望んでいなかったのだ。内心では嫌がっていたものを、無理矢理」

ひゅッ

不意に鋭く風を切る音がしたかと思うと、フラの馬の尾がリシの身体の脇すぐそばでぴたりと止まった。

「それ以上言うと、お前もこんな風になるぞ」紅き眸で締め上げるかのように睨みながら、フラはリシに向かって告げた。

リシはゆっくりと眼を動かし、敵の龍馬を見た。

彼女と敵龍馬の間には、いまだ苦しげに顔を歪め横たわる黒龍馬の姿があった。

砂の上を、どこまでとも知れぬまま飛ぶ。

砂は、何も変化を見せることなく——この距離からではそのように見える——どこまでも続いている。

陽は傾きかけているが、大気はまだ大分熱い。

「こんなところで置き去りにされたら、たちまち干からびてしまうだろうな」リューシユンは思わずそう呟いた。「牛や馬でも、通り抜けるのは無理だろう」

「そうでやすねえ」ケイキョが、鼯の肩をすくめながらおっかなびつくりの体で下を覗き込む。「こんな所にや、まず人なんざ来やせんでしょうねえ」

「鳥なら、通り抜けるのは簡単だチイ」スルグーンは得意げに嘴を空に向け言った。

「そうだな」と言った、直後だった。

——助けて

「あっ——くうッ」突如リューシユンは龍馬の背の上で身を折り、呻きを挙げたのだ。

「そ、聡明鬼さん!？」ケイキョが叫ぶ。

「なんだお前、どうしたチイ」スルグーンも驚く。

——水を、水をくれ

「み……ず……」リューシユンは喉を押さえ震える手を伸ばす。

「水？」

「いったい――」

「鬼魂が――入ってきたんでやすね」 ケイキョが言った。

雷獣は鼬を振り向く。「鬼魂が？」

「聡明鬼さんには、鬼魂を体の中に取り込んで、上天に送る力があるらしいんでやす」 ケイキョはスルグーンにそう話した。

「玉帝さまがその力を聡明鬼に与えたって、ご主人さまが言ってた」 リョーマも続いたが「――前の」と、小さく付け足した。

「陰陽師さんでやすね」 鼬が少しだけ微笑む。

「玉帝――」 スルグーンは呆然と繰り返した。

「マ、トウ……」 リューシユンは消え入りそうな声で、鬼魂の言霊を口にした。

「マトウ？」 鼬がすぐに答える。

「マトウ、さま、の……ところへ」

「誰だそれはチイ？」 スルグーンが、倒れ顔を伏せたままのリューシユンに訊ねる。「マトウってキイ？」

「い、く、か……ら……み、ず、を」 リューシユンの持ち上げた手はぶるぶると震え、声にはもはや色も形も力も無かった。

「聡明鬼さん」 ケイキョがべそをかいたような声で呼ぶ。「しっかりしてくだせえ」

「聡明鬼自身は大丈夫なはずだ」 リョーマが飛び続けながら言う。「たぶんこの辺りで、誰か人間が死んだんだろう。そいつの魂が聡明鬼の中に入って、そう言ってるんだ」

「死んだ――人間、が」 スルグーンはまた呆然と繰り返す。「じゃあ、その人間というのはチイ」

「ここで、渴きのために死んだってことでやすか」鼬も低く続ける。「なんてこった——なんだって、こんな所で」

ぼたり、とリュージュンの手が、馬の背の上に落ちた。

「聡明鬼さん!？」ケイキヨは、リョーマに大丈夫だと教えられたにも関わらずやはり叫んだ。「し、しっかりしてくだせえ」

「——」スルグーンは黙ったまま、じっとリュージュンを見下ろしていた。

しばらくして、聡明鬼の指がぴくり、と動いた。

「そ、聡明鬼さん」

鬼はいきなり、がぼっと身を起こし「西の方だ」と、陽の傾きかけている方向を指で差した。

「西チイ？」スルグーンが訊く。

「だ、大丈夫なんでやすか、聡明鬼さん」ケイキヨがそわそわと尻尾を振り回す。

リョーマは直ちに、リュージュンの差した方へ向かい始めた。

「西に、何があるんだキイ？」スルグーンがまた訊く。

「こいつが最後に見た女が、西の方へ行った」リュージュンは真っ直ぐに前を見たまま答えた。「何者かはわからんが——とにかく行ってみよう」

「こいつってというのは」ケイキヨが訊く。「今、聡明鬼さんの中に……入ってた奴の、ことですかい？」

「ああ」リュージュンはケイキヨを見て頷いた。「もう上天へ行ったが……あいつは必死で、女に向かって水をくれと言っていた。その女はこいつを放り出して、西の方へ行ったんだ」

「――ひどい奴だチイ」スルグーンが無然として言う。「見捨てたのかキイ」

「その女は最後に空を見て“トハキ”と呼んでいた。見たところではその女もかなり、慌てていたようだった」

「トハ、キ？」ケイキョが首を傾げる。「誰でやすかね？」

「わからん」リューシユンは首を振った。

「空を見て、そう呼んだのかチイ」スルグーンはそう言って自身も空を仰いだ。「鳥の名かキイ？ その女の飼っている」

「鳥――」リューシユンはスルグーンを見た。「そうかもな。空を飛ぶもの――あるいは、龍馬」

「龍馬？」ケイキョが訊き返す。「どうしてそう、思うんでやすかい？」

「わからん」リューシユンは腕を組んだ。「俺が、龍馬だからか」

「――」鼬と雷獣は眼を見開いて聡明鬼を見た。

「何を驚いてるんだ」リューシユンは口を尖らせた。「冗談だよ」

「見えた」リョーマが叫んだ。

その声に鼬と雷獣は急いで首を馬の背から覗かせた。

リューシユンにはその声が聞こえないため「どうした？」と二匹に訊く。

「リョーマさんが“見えた”って」ケイキョは答えながら、鼬の眼をすがめて遥か遠くを見渡す。だが小さな鼬の眼にはいまだリョーマに見えたらしきものが捕らえられなかった。

「龍馬だチイ」今度はスルグーンが頭上で叫ぶ。

リューシユンとケイキョが見上げると、雷獣は自分で空中を、リョーマよりも高いところを飛

びながら前を睨んでいた。

「見たことない黒い龍馬だ、フラもいる」リョーマも負けずに伝える。「まだ見えないけど、たぶんキオウもいるはずだ」

「そうか。いたか」リューシユンは鬼の胸が躍るのを感じた。「よし」

リョーマは身をくねらせ、一段と速さを増して目的の場所へと飛び急いだ。



リシは、唇の端を広げてにやりと笑った。

だが、何も答えない。

「何が、おかしい」フラは怒りに声を震わせた。

「まあ、面白いことを思いつくものだと思ってな」リシは肩を揺すった。「私を、殺すなど——もしくは半殺しにして身動きひとつ取れぬようにするなど」

「フラ、抑えろ」キオウが低く命じる。「今こいつをやるわけにはいかない」

「——」フラは少しの間動かなかったが、やがてリシを打とうとした尻尾を地面に下ろし、己の方へ引き戻した。

「そういう事よな」リシは腰に手を当て、いまだ楽しそうに笑っていた。「私はなにしろ、お前の主人の妻と子を助ける方法を、知っているのだからな」

キオウは、ただ拳を握り締めることしか叶わなかった。

許してくれ、フラ——耐えてくれ——

強く眼を閉じる。

「さて、その方法についてだが」リシは腕を組み、顎を引いてキオウを上目遣いに見据えた。「これから私と共に、マトウ様の元へ行ってもらおう」

「マトウ、様……？」キオウは眉を寄せて女を見、その名を繰り返した。



「そうだ。マトウ様だ」

「それは、誰なんだ」

「――」リシは眼の下の肉をぴくぴくと震わせ、さも汚らわしげに鬼を見た。「本来お前ごとき鬼に教えるなど、恐れ多くも勿体なきお方なのだがな」

「――」キオウは、反論などせずにはいた。

ただフラに向かって、そっと掌を向け殺戮の衝動を抑えさせるだけだった。

「マトウ様は我々人間を強く、寛大な心でお導き下さる最高位のお方だ」リシはうっとりとして眼を閉じ、話した。「私たちはただ、マトウ様のご意志のままついて行くだけでいい、それだけで幸福の蜜に全身を浸らせることができるのだ」

「ふん」鼻を鳴らしたのは、フラだった。「ただの、戯言だろ」

「何だと」リシは眼をカッと見開き、龍馬を睨んだ。

「フラ」キオウは腹に汗を掻くような思いを味わった。「黙ってろ」

「マトウ様を愚弄することは許さん」リシは怒鳴るように宣告した。「貴様の望みなど、風に吹かれて飛ぶ砂ほどにも掌に留める価値なきものと捨て置いてもよいのだぞ」

「愚弄するつもりなどない」キオウは牙を食いしばるようにして眼を伏せ言った。「俺をマトウ様のところへ、連れて行ってくれ」

「ふん」リシはぶいと横を向いた。「そうしたくとも、まずはトハキの傷が癒えるまで待たねばならん。貴様の愚かな龍馬が牙を付き立てた傷がな」

「――そうか」キオウは声にならぬ返答をした。

「まったく、この主ありてこの龍馬ありだ」リシの言葉は終わりを知らなかった。「なんという、愚かで野蛮で、智の欠片たりともない、短絡的で粗野な行為だ」

「――すまない」

「キオウ様」ついにフラが堪らず口を出す。「もう行きましょう。なにもよりによってこんな性悪の女に頼まなくとも、他に知ってる奴はいますよ。さっさと砂漠を抜け出て、探しましょう」

「――」キオウは、迷う背中を心強く押されたような感覚に包まれた。

本当に、そうするべきだと自ら思った。

今すぐ、この女に背を向け、歩き出して――背後でフラがこの女に何事をけしかけようとも、それは預かり知らぬ事として“捨て置く”――

「その者は、ムイをやっていたのだろう」

突然、リシがそう言った。

はっとして、キオウは女を見た。

「ムイは人の体に尋常ならざる力を生まれさせる――まあそいつは鬼だというから鬼の体にまでそういう影響を与えるらしいという、これは新たな発見ではあるが」

「つまり、ムイの――せいだと」キオウは眸をさ迷わせた。

答えが――リシの持つ秘法の、或いは秘薬の中身が――半分見えたように思えた。

「その鬼は、人間であった時にムイのおかげで得た、岩石をも砕くほどの超人的な力が自分に備わっていると、鬼となった今も思い込んでいるのだ」

「思い、込んで――？」

「そうさ」リシはまた唇を上げ笑った。「龍馬の焔に焼かれたとしても決して朽ちることなく逞しく生き延びられる、そいつは自分でそれが出来ると心底思い込んでいるからこそ、それが出来るのだ」

「――では」

「そうさな、つまりそ奴に、鬼になった今において尚、ムイを撰らせるという事がおそらく功を奏するだろうて」

「――ムイ、を」キオウはまた眸をさ迷わせた。

そもそも、テンニを自分の下で働くようにさせ得たのは、そのムイを報酬として与える約束を交わしたからであったのだ。

だが結果として、キオウは一度もそのムイをテンニに与えることがなかった、人間として生きている間には。

「だが貴様、ムイを持っておるのか」リシはまさにキオウの案ずるところをぴたりと言い当てた。

「――」キオウは無言で、首を振った。

「それを、マトウ様は持っておいでだ」リシは腕組みをした。「だからこれから、マトウ様のところへ行くというのだ。どうだ、来るか」

「――」

「それとも諦めて、私を殺し立ち去るか」リシは言い、肩を揺すって笑った。「今、そう考えているような貌をしていたが」

「――」キオウはたじろいだ。

負けだ、という意識が模糊鬼の心の内でぽんと弾かれるように生まれた。

「――わかった……行こう」

「では待て」リシはトハキの方を見た。「私の愛する龍馬の傷が癒えるまでな」

「よければ、フラの背に」

「誰が乗るか」リシは顔を引き歪めてキオウを睨んだ。「貴様の阿呆龍馬の背になど乗れば、尻が腐るわ」

「頼む」キオウは必死で言葉をつないだ。「急ぐんだ。フラの背に乗ってくれ」

「嫌だと言っただろう。私の言うことが聞けぬというのか」

「そうじゃない、だがどうか、頼む」

「なにゆえ私が貴様の言うことを聞かねばならぬのだ」

「いい加減にしろ、お前はどこまで腐った性根の女なんだ」フラが我慢できずに怒鳴る。

「口を慎むが良いぞ、阿呆龍馬」

「阿呆龍馬とはなんだ、お前こそ阿呆だ」

「何」

「はははは」突然、少年のように済んだ笑い声が大気中に響き、三足の頭上が暗く翳った。

見上げる眼に、巨大な龍馬の姿——フラでも、トハキでもないもの——が、映った。

「何やってんだよ、阿呆龍馬」

「リョーマ」フラが驚いて叫んだ。「どうしてここがわかった」

「俺を誰だと思ってる」リョーマは大地にすんと降り立ちながら答えた。「阿呆じゃない龍馬だぞ」

「キオウ！」叫びながらリョーマの背より砂を蹴散らし裸足で大地に飛び降りたのは、黒い蓬髪を砂漠の乾いた風になびかせる、筋骨逞しい鬼だった。

「——聡明鬼」模糊鬼はなぜか、その姿を見た時砂の上にへたり込んでしまいそうになったのだ。

——なんだ、最初からそうすれば良かったんじゃないか。

そんなことを思う。

聡明鬼がいれば、すべてがうまくいくのだ。

何故、その単純な事実を、自分は見失っていたのだろう——